ルームメイト

帆摘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルームメイト

【Ｎコード】
Ｎ０６５８Ｉ

【作者名】
帆摘

【あらすじ】
１８歳、美大生の中川遥。大学進学に伴い上京し、女子大生ルームメイトと生活するはずが・・？一緒に住む事になった男は外国帰りのイケメン・・でも性格&素行態度にかなり問題ありの奴だった。まったく正反対の二人の生活が始まる。不器用な二人の恋の行方は？

1話

最近ではさして珍しい話ではないのかもしれない。この不況の中、突然父親が解雇されてしまった。私、中川遥、１８歳、東京の美大への進学が決まった後だった。小さな頃から絵を描くのが好きだった私の夢の第一歩が叶えられたと思った途端、それは砂の城のように淡く足下から崩れさって行く。

正直、うちは元々そんなに裕福な家ではない。５つ年の離れた兄は頭もよく、国立の大学を卒業した後、既に3年前に家を出て会社の社宅で一人暮らしをしている。家のローンだってまだまだ残っているし、うちの経済状況を考えるなら、大学進学は断念して働いた方が良いのは分かっていた。大体美大に入ったからといって、少々絵がうまいだけで食べて行ける世界ではない事は十分に承知している。本当に一握りの選ばれた人間だけが、この世界で這い上がっていけるのだ。

だが私はその入り口にもたてないのか・・・。父の解雇が分かってから怖くて両親に聞く事もできず私はもんもんとした日々を送っていた。美術部の安藤先生も、私が東京の美大に進学が決まった事を聞いてすごく喜んでくれていたのに・・どうやって話そう。

と、階下からお母さんが私を呼ぶ声が聞こえて来た。

「遥！降りてらっしゃい。ちょっと話があるから！お兄ちゃんも帰ってきてるのよ！」

さっき聞こえたドアの開け閉めの音は兄の物だったのか・・。それよりもとうとうやって来たのかと私は腹をくくって下に降りて行った。

「よう、遥、久しぶりだな。」久しぶりに会うお兄ちゃんは相変わらずだった。短く切りそろえた髪にちょっと日に焼けて浅黒い肌に

涼しげな目元。通った鼻筋にきりっとした口元。我が兄ながらちょっと自慢したくなるぐらいの男っぷりだ。お兄ちゃんは美人と誉れ高いお母さん似なのだ。私は・・というと、不細工・・と言う程ではないと思うが、お兄ちゃんとは違い、ずっと室内の部活動ばかりしていた為か、白い肌だ。本を読むのが好きで、絵を描くのが好き・・な私は必然、視力も悪く、薄い銀フレームの眼鏡を愛用している。たまにお兄ちゃんが悪戯で私の眼鏡を取り上げてはまじまじと顔を覗き込んで、「もったいねー」と口にするが、何の事だかわからない。大体眼鏡を取られると周りがぼやけてほとんど見えなくなってしまうのだ。

兄妹仲はいい方だと思う。5歳年の離れた妹を昔からよく可愛がってくれていた。そんなお兄ちゃんが家を出たときは少し寂しかったが、こうしてちょくちょく家に帰って来て顔を見せてくれるのはうれしい。

久しぶりに家族揃って食卓に着いた所で、お父さんがおずおずと話を切り出した。来たか！とつい私も身構えてしまう。

「遥、お前の大学進学の事なんだがな・・・」皆まで聞くのが嫌で私はお父さんの話を途中で切って言った。

「いいよ、お父さん、分かってる。家、お金ないんでしょう？私、地元で何か仕事見つけるから気にしなくていいよ！」精一杯の強がりで私はお父さんに早口でまくしたてた。

が・・・一瞬家族の間に奇妙な沈黙が広がった。何だろう、なんで皆変な顔してるの？

「遥・・お前、大学に行きたくないのか？」お兄ちゃんが聞いてくる。

「え？そりゃあ・・・行きたいに決まっているけど、お父さん、仕事なくなってお金無いんでしょう？家のローンだってまだ払い終わってないし・・。」そう言って口ごもった私の頭をお父さんがクシャリと撫でた。

「なんだ、遥、そんな事を気にしていたのか？心配するな。お前の大学に行くぐらいのお金はちゃんと貯金してある。父さんが遥に話そうと思っていたのは、大学の事じゃなく、住む場所の話だ。」
「え？じゃあ、私、本当に東京の大学に行っても良いの？」
母がニコニコと笑いながら言った。「当たり前でしょう？そんな事を心配してたの？家の事はあなたが心配しなくても何とかなるわ。お父さんだって、今また新しい仕事を探しているし、私も幾つか新しい翻訳の仕事が入っているから心配しなくていいのよ。それにお兄ちゃんもまたお父さんの定職が決まるまでの間、月々サポートしてくれることになってるんだから、ね？お兄ちゃん？」

「ああ、俺は社宅に住んでるからな。家のローンは俺が払っておくし、お前が心配することはない。」そういって兄はほれぼれする様な笑顔を私に向けた。
何だ・・・じゃあ、私本当に夢を諦めなくても良いんだ・・。ほっとしたのと同時にもう一つ父の言っていた事を聞き返す。
「お父さん、住む場所の事って・・・？」

2話

「ああ、その件なんだがな、お前、油絵をやるから、ある程度の広さがあってアトリエになる様な部屋があればって前前から言っていただろう？父さんたちの友人で、東京にその条件ぴったりの部屋を持っている人がいてな、お前の事を話したら、喜んで部屋を貸してくれるというんだよ。その人も有名な画家で、今はフランスに住んでいて、丁度部屋を誰かに貸そうと思っていた所なんだそうだ。家賃も信じられない程格安で貸してくれると言うんだが、一つ条件があるんだ。」

「条件？」

「ああ、なんでも今度ドイツからその人の姪がお前と同じ大学に留学してくるんだそうだ。それで、そのマンションには3つベットルームがあって、もう一つの部屋は合同のアトリエに、そしてあと二つの部屋は1つづつ自分達の部屋として使って欲しいとの事なんだが・・・」

私はぼーっと父さんの言葉を聞いていたが、頭がはっきりしてくるに従ってそれがこの上もない条件だと考える。つまり、部屋を貸してくれる人の姪と一緒に住む代わりに部屋を安くで貸してくれるという事だ。しかもアトリエ付きの。こんな良い話は無いように思えた。

「ぜんぜん、大丈夫だよ、お父さん！同じ大学に通う友人と一緒に部屋を共有するんでしょ？あ、でもその子、私と同じ年なのかなあ？しかもドイツってまさか外国人？！私ドイツ語なんて喋れないけど大丈夫かなあ・・・。」ちょっと不安もある。

「確か、お前っより1つ年上だと言っていたな。ドイツ人の血を引

くクオーターだと言っていたが、もちろん日本語は達者らしいぞ。日本の大学に進むぐらいだからな。」

「へ、へえ、そうなんだ。なんかお父さんのお友達ってインターナショナルな人なんだね。」

「元々は、私の知り合いなのよ。仕事の関係で知り合いになったんだけどね。」とお母さんが横から口を挟む。

お母さんの仕事は翻訳家だ。そんな母と知り合いなのだというと、どこかの出版社ででも出会ったのだろうか。ドイツやフランスなど、憧れはあるが未知の世界の話。だが、自分の好きな画家達の出身地であるヨーロッパには是非とも訪れて見たいという夢もある。ドイツからやってくるというその彼女と友達になって色々と聞いて見たいと私の夢は広がった。

私の思い煩いはこの日を境にさっぱりと無くなり、それから卒業までの間、私はゆっくりと家族との交わりを楽しんだ。初めに思っていた一人暮らしとは違うが、大学がとても楽しみに思えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーー

それから数ヶ月がたち、私は一人で上京して来た。今までは、神奈川県の片田舎に住んでいたのだが、東京は高校時代に友人と遊びに来て以来だった。最初、お母さんも一緒に荷物の片付けなどの為、ついて来てくれる事になっていたが、突如、急な仕事が入り来られなくなった。

今日の昼には、私の荷物を載せたトラックが新しいマンションにつく事になっている。

私は住所をもう一度確認しつつ、駅からゆっくりと歩き始めた。この地図によると、駅から徒歩7分のところにあるらしい。駅から大学までは、乗り換え無しの1本で行ける。本当にこんな立地の良い

場所を破格の値段で借りられるなんて私は幸せ者だ。
新しい土地にわくわくしながら、鼻歌を歌いつつ私は、てくてくと道を歩いて行く。
暫く歩くと、閑静な住宅地が広がり、お目当てのマンションの前に辿り着いた。
「ここかあ・・・」私は大きなマンションを見上げる。一介の学生が住むには高級すぎるマンションだと思う。もうルームメイトの子はついているんだろうか・・明後日には入学式があるのだからもう、先に部屋に入っていてもおかしくはない。

おずおずと、マンションの中に入り、私はエレベーターのボタンを押す。１２階。ほとんど最上階に近い。グイ～ンと音がして鏡ばりのエレベーターが急速に登り始めた。
エレベーターを降りて、私はある番号の部屋の前に立つ。１２０５室。ここが私の新しい家・・。
私は預かっていた鍵を鍵穴に差し入れゆっくりと回す。カチャリと音がして、鍵が開いた。
足下に置いていた手荷物を持って、中に入る。最初つんと鼻についたのは懐かしい油絵の具の臭い・・。玄関を入ると其処は広々としたダイニングキッチンとリビングが繋がるフロアだった。「わあ・・広い！」私は小さく叫んで、応接室へと足を運ぶ。
座り心地良さそうなソファーにモダンな家具、そしてオープンフロアーなキッチンが目につく。こんな夢の様な素敵な部屋は見た事がなかった。
部屋の両脇にそれぞれドアがついている。私はゆっくりとひとつのドアを開いた。広々とまではいかないが、ちょうど良い大きさの部屋から、またもう一つ扉があり、その先は、お父さんが言っていたアトリエになっているようだった。

アトリエの床は大理石の様なフロアになっており少し温度が低い。

私は暫くの間、感動のあまり身動きひとつせず立ちすくんでいた。
そう、誰かが私の肩をつかむまでは・・・。

いきなり後ろから誰かに肩を掴まれ私は小さく悲鳴を上げて振り向いた。そこには、モデルばりの長身を誇る足の長い男性がものうげに私を見下ろしていた。

3話

やたら顔の良い男の口から出て来た最初の言葉は「・・あんた誰？」という物だった。
それはこっちの台詞である。部屋番号はちゃんと確認したし、家の鍵だってちゃんと、預かっていた鍵で開いたのだ。ということはつまり、この男が不法侵入したと言う事だ。
私は男を睨みつけて言った。
「私は今日からこの部屋に住む事になっている者です！あ、あなたこそ、一体誰なんですか？」
男はゆっくりと首をかしげて暫く考え込むようにしていたが、やがてぽんと手のひらを打つとにやっと笑って形の良い唇を開いた。何だかやけにお色気ムンムンである。
「ああ、じゃあ、君がおばさんの言ってた子か、確かなんだっけ・・・中川・・はるか？」
私はびっくりしてまじまじと目の前の男を見つめる。何故この男が私の名前を知っているのか、それよりも今、おばさんって言った・・・？

「え・・？あなたは・・・？」
男はふっとかがんで私の頬に軽くキスをすると面白そうに言った。
「俺の事、聞いてない？俺の名前、忍って言うんだけど・・・。」
いきなりキスをされた事にも驚いたがそれ以上に彼の放った一言は私の脳天を突き上げるような錯覚をおこさせた。
「しのぶ・・・さん？え？だってお父さんは姪だって・・・」
「ん？ああ、もしかして俺の名前で間違えちゃった？」
「じゃ、じゃあ、あなたが私のルームメイトなんですか？！」私は頭痛を抱えつつ聞き返す。

「そう。これからよろしくね、はるかちゃん♪」
一瞬目の前が真っ暗になったようだった。１８年半生きて来てこの方、周りの友人らのように彼氏を作る事もなく、唯一接する異性は兄と両親のみという、ある意味箱入りで育てられた自分がまさか男と一緒に住むようになるなんて・・・嫌、待てよ、まだ今からなら探せば何処かアパートとか見つけられるかもしれない。
とふいに目の前の男がクスリと笑った。何だというのだろう。
「はるかちゃんって、考えてる事がすぐに顔に出るんだね。見てて飽きない。本当に君がルームメイトで良かったよ。」
「ちょ、ちょっと待って下さい！私まさかルームメイトが男だなんて思ってなくて、その、私困ります・・・。」慌てて反論しかけた私を制して忍さんが言った。
「はいはい、とりあえず落ち着いて、一緒にお茶でも飲まない？」
そう言われて気がついたが喉はからからに乾いている。私がゆっくりと頷くと、彼は私の手を取ってリビングへと戻っていく。先ほどからいきなりキスをされたり、大きな手で掴まれたりと私の許容量を超える振る舞いに私は翻弄されっぱなしだった。

イギリス製の茶葉だろうか、紅茶を入れてもらってほっと一息つく。たかが紅茶、嫌されど紅茶なのか、紅茶を入れる男性の手がこんなにも綺麗だとは思ってもいなかった。それに少し落ち着いて目の前のソファーにくつろぐ彼を見ると自然に顔が赤く染まるのが自分でも分かる。
本当になんて綺麗な人なんだろう。男に綺麗というのは少し間違っているかもしれないが、目の前にいる男性はぴったりとそれに当てはまる。ちょっとした仕草や何もかもが様になっていて、まるで一つの動く絵画を見ているようだった。

私の視線に気がついたのか、彼は目を上げてにっこりと微笑む。
「少しは落ち着いた？」

「あ、ハイ・・・。」とはいえ問題は何一つ片付いてはいない。これからどうしようか・・まずは家に電話して・・などと考えていると彼がゆっくりと話しだした。

「ねえ、まさか、ここを出て行こうと思ってる？」
私は目を上げて彼を見つめる。「え、あの、それはどういう意味ですか？」
「どういう意味もこういう意味も、そのままだよ。今君がここをでていっても、住むとこを見つけるのは難しいと思うよ？大学から立地の良いアパートなんかは既に埋まってるだろうし、それに君は油絵をやるんだろう？君にとってもこの部屋は理想だと思ってたけど、違うの？」

「そりゃそうですけどっ！でもいくらなんでも男の人と二人で住むなんて・・」と私はうつむきがちに抗議する。
「ああ、何、俺が君を襲うとでも？」
瞬間顔が真っ赤になる。「そんなことは言ってません！それにあなたのおばさんだって男女二人でこの部屋を使うって知ってたんですか？」

「ああ、あの人はそんな事気にしないよ。むしろ面白がってるぐらいじゃない？それに別に珍しい事じゃないでしょ？一緒に住むぐらい。」
「そりゃ外国とかならそうかもしれないですけど、ここは、日本です！」
彼はびっくりしたように私を見つめ、それから笑い出した。いきなり理由も分からず笑われた事に少し腹が立ってむすっとした私に彼は言った。
「日本人の女の子ってもっと色々とオープンだと思ってたけど、君みたいな子もいるんだ。まあ俺は相手してくれる女には困ってない

し、君に手を出す事はないから安心して？そんな固く考えることないよ、マンションのお隣さんぐらいに思っといてくれればいいんだし。
あ、そうそう、アトリエは君の部屋から繋がっているし、俺は使う事ないから君一人で使ってくれていいよ。バスルームも二つあるから、プライベート守れるだろ？そのかわり、こっちのリビングとキッチンは共同って事で。」

この人・・・いくら顔とスタイルは良くても人の話を聞かない奴は最悪だ。とはいえ、確かに彼の言う通り、今から部屋を見つけるのは大変だし、こんな最高の条件はありえないだろう。なんだか、むかつく事も言われた様な気もするが、お互いに無関心で居れば済む事だ。
私は意を決意して言った。
「わかりました。これからルームメイトのお隣さんってことでよろしくお願いします。」
中川遥１８歳、これが波乱の幕開けであった。

4話

中川遥・・最初の印象は面白い子だと思った。一足先に叔母の所有しているマンションについたのが3日前。スーツケース二個分の荷物と共に、幾度か訪れた事のある叔母のマンションの一室へと辿り着いた。事前にここで暮らす事になるという女の子の話は聞いていた。ベットルームは二つ、そのうち、アトリエに続く部屋を彼女にあてがって欲しいと・・・。あの叔母が身内以外の者に部屋を貸す事には少し驚いたが、どうやらそれは知り合いの娘で、まだその娘が高校1年の頃に描いた絵を見た叔母が随分と気にかけていたらしい。

性格は変わっているが、その業界では有名な新鋭女流画家の彼女の目に留まったのであれば、そこそこに才能があるのだろう。とはいえ、うるさく付きまとうタイプの女であれば敬遠していたが、そう言った心配はなさそうだった。

日本へ帰ってきたのは、親父たっての希望で進学した大学へ通う為だ。どうやら彼女とは同じ大学らしいが、自分の専門は建築なので、校内で合う事はあまり無いだろう。もうひとつは、高校の時に幾度か日本へ遊びに来ていた時、たまたまモデルにスカウトされ、それから毎年日本へ帰る度に、臨時のモデルをしていたが、今回日本に帰国？するにあたり、正規モデルとしての契約を交わした。日本で売れているメンズの雑誌を初め、幾つかの雑誌に顔がでていた為か、帰国してそうそう、遊ぶ女には困らなかった。

それにしても、頬にキスをした時の驚いた顔や近づいて見た時の眼鏡の奥の形の良いアーモンドの瞳と縁取られた長い睫毛を思い出す。手を出さないとは言ったが、なかなかに整った顔立ちだった。あれで眼鏡をとりもう少しましな服装と髪型をしていたならきっと男が

ほっておかないだろう。

なんとはなしに、これから楽しくなりそうだと笑みをこぼすと隣で寝ていた女が身じろぎして抱きついてくる。

「どうしたの？忍・・何かご機嫌よさそうね？」じとっと斜め目線で誘うように女が首に手を廻して来た。軽く汗ばんだ肌にキスをひとつ落として俺は「何でもないよ。」と言って笑う。

納得していないのか、もっと色々と聞きたそうな女の口を己のそれで塞ぐと女は嬉しそうにそれに答えた。

暫くたってシャワーを浴びると既に服を着替えた女がベットに座って馴れ馴れしく話しかけてくる。

「ねえ、今度はいつ合ってくれるの？」

「さあ・・・明日から大学が始まるしな、またこっちから連絡するよ。」そう言って俺はそれ以上の追求を遮る。この女は帰国早々、夜に出かけたクラブで声をかけて来た幾人の女達の中の一人だった。俺が彼女を選んで連れて出た時の彼女の勝ち誇った様な顔が馬鹿馬鹿しくて素敵だった。簡単に寝る女はドイツにも沢山いたが、やはりアジア系の女の肌は欧米のそれよりもきめ細やかで美しい。体型は・・・まあ、比べるのは止めておこう。

また連絡をすると約束してホテルをでた後、俺はゆっくりと歩き始めた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

結局、彼の言うまま、この家にそのまま居座ることになってしまった。あれからすぐに私の荷物が届き、荷物を全て運び入れてもらった後、実家へと連絡を入れた。まさか、同居人が男だとは言いだせなくて、適当にごまかして電話を切った。大した量はなかったが、段ボールを開けて当座の荷物を取り出し片付けて行く。そして昨日の夕飯は出前のピザを頼んだ。

大家である、彼の叔母が必要最低限の家具などはそろえてくれていたが、さすがに冷蔵庫の中はほとんど空っぽだった。彼はこの家について2日だと言ったが、食事はずっと外で済ましていたらしい。とりあえず、台所とリビングは共有なので、明日一緒に買い物に行く事になった。

「遥ちゃん、料理できるの？」彼がピザを食べながら興味新々と言った様子で聞いてくる。

ピザを食べる姿も様になるなんて、何故か少し悔しい感じもするのだが、私は頷く。

「母が・・・仕事が忙しい時は私が代わりに作っていたので、料理はできます。」

「へえ、そうなんだ。楽しみだな～。」

「・・・・。」つまり、何ですか？もしかして、彼の分も作れと言う意味ですか？

おそるおそる聞き返してみると、心地よいアルトが返って来た。

「ん～、簡単な物なら自分で作れない事もないけど、遥ちゃんが作ってくれるんなら、それにこした事はないし？あ、食事代は払うからさ。」

「はあ・・・。」しぶしぶと私は頷いた。まあ、どうせ、自炊するつもりだったし、一人分も二人分もそんなには変わらない。それに、正直食事代を出してくれるというのは助かる。

親からの援助はなるべく最小限に済ませたいと思っていたからだ。

それに、絵を描くのは結構お金がかかるのだ。これからバイトも探して行かないと・・。

最初の夜はそうこうしている間に過ぎ去り、次の日の朝、意外に彼が早く起きて出て行ったのを見送った後、部屋の片付けを始めた。

夕方には返って来て、買い物に行くのだという。

5話

昨晩から片付け始めた荷物は、午後にはすっかりと片付いてしまっていた。我ながら女にしては素っ気ない部屋だと思う。お兄ちゃんや、遊びに来た友達でさえ、一歩、私の部屋に足を踏み入れた時、大げさにため息をついて言っていたものだ。

「遥・・・、あんたがお洒落とかにあんまり興味ないのは知ってたけど・・・もう少し何とかならないの？これ・・・」呆れたように私の顔を覗き込んだ親友の幸恵ちゃん。彼女は地元の大学へと進路を勧め、以前のようにお互いしょっちゅう合う事は無くなったが、ずっとメールのやり取りはしている。

「吃驚するだろうな・・・」幸恵ちゃん、この私が見ず知らずの男の人と一緒に暮らしているなんて・・・と考えながら小さく呟いた声に反応する声があった。

「うん、ほんと意外だね。」

びくっと弾かれたように後ろを振り向いた。いつの間に帰ってきたのか開け放たれた部屋のドアにもたれかかるようにしてあの男が立っていた。

「な、なんですか？いきなり・・というか帰ってたんですか？！」

何故かわからないが微妙に焦ってしまい少し引きつった声で言い募る。

「うん、ただいまって言ったけど、聞こえてなかったみたいだし、それに扉も窓も開けっ放しだったから覗いてみたんだけど。」

なんだ、声をかけてくれていたのか・・・それは気がつかなかった。だけど目の前にいる男は興味深そうに私の部屋を見回している。引っ越ししたとはいえ、元の部屋と同じぐらい、いや、それ以上に殺風景な部屋だった。

もともと置いてあった備え付けの簡易ベットに小さな青い水玉模様のベットカバー、装飾は一切なしの機能的なタンスと少し大きめの勉強机。我ながら、確かに女の子の部屋らしいとはお世辞にも言いがたい。
「・・掃除が終わったので空気転換に窓を開けていたんです。すいません、寒かったですか？」
「いや？別に、俺も今外から帰ったばっかだし・・・。それにしても殺風景な部屋だね、遥ちゃん、なんかもっと女の子らしいふわふわしたイメージを想像してたけど・・・」
悪かったですね！余計なお世話だと思いつつ、私はむっとしながら言い返す。
「別に・・、大学へは遊びに来た訳じゃありませんから・・・。」
「ふうん？でもあそこの置物だけはちょっとイメージが違うかな・・」
目敏いと思いつつも私は彼が目線を向けた先にあるものを目の端に捕えた。それは昔お兄ちゃんが修学旅行のお土産にと私に買って来てくれた2匹のドルフィンが宙を舞うガラスで出来た置物だった。結構高かっただろうなと思いつつ貰い、引っ越しの際に少し迷ったが、一緒に持って来たのだ。

「で、その横にある写真が君の家族？」
そう、そしてその横にはこの冬、お父さんが仕事を解雇される前に、家族旅行で行った温泉宿での写真が飾ってあった。
「そうです。・・にしても早かったですね、忍さん。帰ってくるのは夕方じゃなかったんですか？」ちくりと嫌みを混ぜて言い返す。
男はそれこそ、『妖艶』を絵に描いた様な表情でにっと笑って言った。
「ん、用事はもう済んだんだ。それよりもさ、買い物に行かない？」
「買い物・・って、ああ、食料品の事ですか？」

「うん、それもあるけど、まあ・・・」と何か口ごもる。はっきり言わない所が何か怪しいが、どちらにしろ、今日冷蔵庫と、戸棚をチェックしてみた所、買いそろえなくては行けない物も少なくはない。これだけガタイが良いのだ、良い荷物持ちにはなるだろう、と私は一人納得して頷いた。

昨日、このマンションにくる前に、この近辺の安そうなスーパーなどはチェックしておいたのだが、一緒に外にでて歩き始めると、彼は思っていた方向とまったく別の方へと歩き出す。

「あ、あの！スーパーはこっちだと思うんですけど！」

すると彼は強引に私の手を引っ張って歩きながら行った。「こっちであってるから。」

というか、なんであなたは私の手を握っているんですか！自然と顔が赤くなる。それに周りの視線がとても気になる・・・というか痛い！

今すれ違ったお姉さんなんてきっと、なんでこんなイケメンが冴えない女つれているんだと言ったような目でこちらを見ていた。とりあえず逃げはしないので手は離して欲しい・・・。涙）

しばらく無言で歩き続ける事５分、駅の反対側にある巨大なショッピングモールが見えて来た。

食材の買い物に来たんじゃなかったんですか・・・？忍さん・・・

私を引っ張ったまま彼はモールの中にある、こ洒落た店へと入って行く。入り口にはＶＩＤＡ　Ｓａｌｏｎと書かれている、てか私なんでこんな所に来てるんですか？！

「ちょっと、忍さん！」私はこらえきれずに小さく叫んだ。

「何？」

「何って、なんなんですか？ここは！」

「見て分かんない？」

見てって・・・見た感じ其処は高級そうなヘアサロンのようだった。

嫌違う、だからなんでこんな所にきてるのかというのが問題なのよ！
「あれえ、忍何時帰ってきてたの～？」サロンの奥からかっこいい・・・けど何か違うお兄さんが出て来た。

6話

「ああ、3日前に帰ってきた。それよりも今ちょっといいか？」
「いいわよ～。忍のお願いなら何だって聞いちゃう！」そう言いつつ、奥の扉から出て来たその男ははたと私に視線を落とす。
「これ、何とかしてやってくれ。」そういって奴は私を指さした。
「はあ？！」私の素っ頓狂な声が店内に響く。サロンの奥でヘアカットを受けている客と店員が一気に振り向いた。
「ふうん・・・、忍がここに女を連れてくるなんてね。まあ、いいわ。ここじゃあ目立って仕方がないし。奥にいきましょ。」
そう言って、一見イケメンなのに言葉遣いが女っぽい男の人が私の肩を抱いて強引に歩きだす。
「ちょ、ちょっと！」言いかけた私の言葉を鋭い視線でねじ伏せた忍が一緒についてくる。またまた店の中でも大量の視線を浴びつつ私は奥の部屋へと拉致された。

パタンと扉が閉まる。其処には沢山のマネキンとウィッグ、それとヘアカットの練習でもしていたのだろうか、切りかけのウィッグらしき物まで置いてある。部屋に入ってすぐ、オカマっぽいお兄さんが私の顎に手をかけ強引に上を向かせた。なんでこんな事をされるのか泣きたくなってくる。大体今日は買い物に来たはずなのに！

「へえ・・なかなかね。確かにあんたがほっとけないのも分かるわねぇ。お嬢ちゃん、名前はなんて言うの？」
お嬢ちゃんって・・・私はむっとしながら答える。「中川・・・遥です。」
「遥ちゃん？可愛い名前ね～。私のことはジェリーって呼んでちょうだい♪今中学生ぐらいかしら？」ガンッと殴られた様な衝撃を受ける。いくら童顔でも今年から大学生に向かって中学生はないだろ

う。
「大学一年です！」明日からだけど・・。
「あら？そうなの？まあいいわ、ともかく其処に座ってちょうだい。」手早く私にてるてる坊主の様なマントを被せ、眼鏡を取られた。いきなり視野が悪くなる。
「あの、一体なんなんですか？眼鏡返して下さい！」
「ああ、心配しなくて大丈夫よ。すぐに終わるから・・」こいつも奴の同類か？人の話を聞かないにもほどがある。
「ヘアトリートメントは必要なさそうね。癖のない良い髪質だわ。それに、綺麗なうりざね顔ね。肌質も良さそうだし・・こういうタイプってメイクも映えるのよね。ねえ、私の好みにしちゃっていいのかしら？」そう言って男は忍に声をかける。
「ああ、頼む。」忍は壁にもたれたまま腕を組んで答える。
さすがの私もここまで来ると、自分がどういう状況にいるのか分かってくる。それと同時に少し怖くなって来た。こんな高そうなサロンでヘアカットなどした日にはいくら請求されるか。

一気に青くなった私を見て、私の髪をもてあそんでいたジェリーが口を開く。
「あら、どうしたの？心配しなくていいわよ？わたしがちゃ～んと綺麗にしてあげるから。」そういうと後ろから、また忍の声が聞こえてくる。
「ああ、こいつの腕はモデル界やセレブの間でも定評があるから心配するな。」

いや・・だからそうじゃなくて・・・
「私、お金持ってません・・・。」だって、今日は食材の買い物に来たのだ。確か私の財布には入っていて１万円ぐらいの現金しかない。
ぷっと頭の上で吹き出す音が聞こえた。

「ああ、そういう心配してたの？大丈夫よ。このお返しはしっかり忍から貰うから・・・ねえ、しのぶ？」そういって笑いを含んだ声で壁際に立つ男にちらっと目を向ける。
一瞬いやそうな表情を顔に浮かべたが、忍は「ああ」とだけ短く答えた。

それからあっという間に私は髪を切られ、化粧までしてもらっていた。人に化粧をしてもらうのなんて初めてだ。いつも外に出るときは、日焼け止めぐらいで化粧らしき化粧などした事もなかった。だが、人に肌を触られるのがこんなに気持ちよいとは驚きだった。
「・・・どうかしら？」暫くしてジェリーの声が響いた。
「上出来」満足そうな忍の声が返ってくる。

はっとして目を開けるが、眼鏡を取ったままだと、何も見えない。ジェリーがゆっくりと眼鏡をかけてくれた。「本当は眼鏡じゃなくてコンタクトにして欲しい所だけど、今日は仕方ないわね。」
そこに映ったものを見た途端、夢かと思った。鏡に映った見慣れた眼鏡、だがまったく違う自分が其処にいた。
「可愛い系のメイクも似合うとは思ったけど、こういうゴージャスなのも良いかと思って。どう、気に入った？」何処か遠くで声が聞こえる様な感覚に囚われながら私はゆっくりと頷いた。
「あとは、洋服ね。」「そうだな」と二人の声が聞こえる。
つい余りにも違う自分の姿にぼーっとしてしまったが、これでは奴らの思うつぼだ。色々言いたい事はあるのだが、何から切り出せば良いのか迷っていると忍がまた強引に手を引っ張って歩き始めた。

7話

またしても強引に引っ張られながら、今度は同じショッピングモールの5階にある、ブランド物に疎い自分でも名前を聞いた事のある店へと入ってく。私の顔からは既に血の毛が引いていた。ここの店の人とも知り合いなのか、スタイリストさんらしきお姉さんにはなしかけると、幾つかの洋服を持って来られ、着せ替え人形のように有無を言わさず着替えさせられた。

「可愛い！よく似合うわ！」と店のお姉さんが声を上げる。御丁寧に靴まで履き替えさせられた。確かに鏡の前に映っている自分は普段とは到底かけ離れた別人だ。店員さんが私が今まで来ていた服を綺麗に手提げ袋に入れてくれていた。

「じゃ、これそのまま貰って行くから」との声が後ろから聞こえ、またしても私は彼に手を引っ張られ歩き出した。

「ちょ、ちょっと忍さん、この服！」

「ん？大丈夫、あそこ馴染みの店だから。」

「そうじゃなくて！なんでこういうことしてくれるんですか？」とりあえず一番の疑問を口に出す。すると奴はぴたっと足を止めじっと私を凝視する。

やはり見れば見る程綺麗な顔なので、見つめられるとちょっとドキッとしてしまう。

「そうだなあ・・・趣味？」

「は？」今この人趣味って言った？人を連れ回して着替えさせるのが趣味ってことか？

「趣味って・・・趣味でこんな高いものいただく訳にはいきません。」またむっとしながら言い返すと彼はクスリと笑って言った。

「じゃあ、入学祝いってことで。」それ以上の追求を許さず、結局私は彼に振り回されっぱなしだった。結局当初のプラン、食材の買い物を終えて帰って来たのは夕方過ぎだった。

思いもしない行動に精神的に疲れていたが、私は手早く買って来たものを冷蔵庫にいれると一度部屋に戻り、今まで来ていたブランドものの洋服を脱いでしまう。今から夕飯の支度をするのに、こんな高そうな洋服を着たままでは出来ない。
部屋着に着替えるとダイニングキッチンに戻り夕飯の支度を始めた。家に帰ってすぐ、携帯にかかって来た電話を取り部屋に籠っていた忍さんがでてきた。

「あれ？遥ちゃん着替えちゃったの？」
「そりゃあ・・あんな洋服着たままで料理はできませんから。」少しつまらなさそうに頬を膨らませた忍さんを横目で見つつ、私はテーブルの上に料理を並べて行く。
「すっげ、これみんな遥ちゃんが作ったの？」
「大したもんじゃないですけど・・・」今日は春野菜を中心に和風メニューだ。あ、でも彼はずっとドイツにいたんだっけ？日本語が上手過ぎてそんな事はすっかり頭から抜け落ちていたが、大丈夫だろうか。
「電話してたようなので、何も聞かずに作っちゃいましたがこれで良かったですか？」
彼は満足そうに頷く。二人対面に腰を下ろすと、いただきますと言って食べ始めた。
目の前でおいしそうにご飯を食べる姿を見ているとなんだか不思議な気分だった。3日前には全然想像もしていなかった展開だ。

「遥ちゃん？」考え事をしていた私は彼の呼ぶ声にはっと顔を上げる。極上のスマイルで私の顔をのぞき込んでいた彼と目が合う。
「あ、すみません、何ですか？」
「遥ちゃんって、考え事とかしていると周りが見えなくなるタイプなんだね。」

確かに・・・特に絵を描いているときなどは回りの雑音は一切耳に入って来ない。よく言えば一点集中型だが、よくそれで、お母さんにしかられていた。本当に人の呼ぶ声なども耳に入らなくなるからだ。
私は少し顔を赤くして答えた。「よく言われます・・・。」
そんな私の様子を面白そうに眺めて彼は言った。「明日から学校始まったらお互いのスケジュールとかも変わってくるだろうし、色々と連絡つける事もあるだろうから、遥ちゃんの携帯番号教えてくれる？」
そう言われてみればそうだ。同じ大学とはいえ学部が違えばこれからのスケジュールはまったく違うものになるに違いない。私は頷いて彼に自分の番号とアドレスを教えた。

「じゃ、俺から電話するから。」そういうと彼は食べ終わった食器の片付けをしだした。
「あの！いいですよ、私しますから。」
「いや、作ってもらってんだから片付けぐらいするよ。」そう言って彼は洗い物をやってくれた。その後、またかかってきた電話を受けて彼は、また出て行った。
「遅くなるから戸締まりはちゃんとしとくんだよ。」とのメッセージ付き、というか私は子供か？！シャワーを浴びて昼間着ていた洋服からまた着替えて出て行った彼を見送りながら、ふと彼女の所にでも行ったのだろうかと考えた。

8話

大学が始まり1ヶ月が過ぎた。ルームメイトとの生活は最初に考えていたより、楽なものだった。初めの頃はあの強引な性格でどうなる事かと思っていたが、通常彼は滅多に私にかまってくる事はなく、それは私も有り難かった。朝はブラックのコーヒーだけ、昼食は別々、そして夕食に至っても一緒に取る事は滅多に無く、その日作ったものをラップしてテーブルの上に置いておけば大抵次の日には綺麗に片付けられていた。リビングとダイニングを共有していると言っても、遥が在宅時に彼はほとんど家にいる事がない。土日などの休日にたまに昼を一緒にするぐらい、だがそれもモデルをしているらしい彼は休日も多忙で滅多に無い事だった。

建築を専攻しているルームメイトとはほとんど学内で逢う事はないが、それでもたまに女子の奇声の上がる方向を見てみれば大抵彼がその中心にいる。初日に女には不足していないと言った様な事を言っていたが、それは確かに本当なのだろう。今の所、彼は家に女を連れ込む事はないが、時折彼のものでない仄かな香水の匂いを漂わせて帰ってくる事がある。ああ、それでも一度彼と付き合った女の子が彼の後を付けてマンションまでやって来た事があった。私は丁度その時アトリエに籠っていたのだが女の泣く声と、聞いた事もないような彼の冷たい突き放す様な声が耳に入って来た。

あんな冷たい声も出すのかと少し吃驚した。それからその彼女とは別れたのだろう、最初はこんな私と一緒に暮らしているのが知られるのが嫌なのかとも思っていたが、どうも他人に自分の生活を乱されるのが嫌なだけかもしれない。まあ、どちらにしろ私も彼と同居している事は絶対に知られたくないので都合は良いが。

せっかく有名らしいスタイリストにヘアメイクをしてもらったが、あれから以後、一切メイクをした事はない。買ってもらった？服も同様にタンスの肥やしとなっている。髪は梳いてもらって随分と軽くはなったが、後ろでひとまとめに括っているだけだ。これについては時々不満そうな忍の目線を感じるが、極力無視している。大学内は確かに、美術系大学とあって、校内にはそれこそーお洒落と呼べる人達は多い。服装だけでなく、髪型、そして装飾品に至るまで見ていて飽きないのは事実だ。そんな中で地味な私に声をかけてくる人達はほんの一握りだった。

だがそんな中でも大学に入って新たな友人が幾人かできた。同じ油彩科の真樹ちゃんは、姉御肌で男女共に人気がある。何故かそんな彼女はたまたま隣に座った私を気に入り、何かと面倒をみてくれる。それから・・・、あまりお友達にはなりたくなかったのだが、一方的にやたらと私をかまいたがる困った先輩もいる。沢田亮司といういかにも芸名の様な名をもつ男はこの大学でルームメイトと同じぐらいの有名人だった。

「お！はっるかちゃ～ん！そんなところで何やってんの～？！」

学内の店からデッサンに使うチャーコールを買って教室へと向かって歩いていた私の名を大声で呼ぶ先輩の声に私は眉をひそめる。

なんでこの人はわざわざ目立つように呼びかけてくるんだ！沢田・・先輩は美術科のホープとも言われる才能溢れた人だった。油絵、彫刻、果ては日本画までなんでもござれのマルチタイプ人間。この大学始まって以来の天才と呼ばれる彼が何故一介の新入生の私を気にいったのかは謎だ。聞こえない振りをして補足を早めたが彼はあっという間に追いついてきて私の横に並んだ。

「もう、遥ちゃん、無視しないでよ。俺の声聞こえてたでしょ？」

そりゃあ・・・聞こえてましたとも。聞きたくはなかったが。

「・・・先輩こそ、何をやってるんですか？今先輩はシェール賞に出す作品の製作で忙しいんじゃなかったんですか？」
「ああ、あれねえ。ほんとまいっちゃうよ。教授ったら俺の事そんなに愛してるのか縛り付けて離してくれないから。」
「それは・・・先輩がすぐにサボっていなくなるからでしょう？」
「ん～？でも俺としては遥ちゃんみたいな可愛い女の子が側にいてくれた方が創作意欲が増すというか～・・・ってなことでさ、遥ちゃん、俺とデートしよ、デート！」
「結構です！」
「遥ちゃんって意外に気が強いよね～。本当は儚げな美少女なのにね。」そういって沢田先輩はさっと私の眼鏡を取る。他人に眼鏡を取られたのはあのジェリーというオカマ言葉で喋るスタイリストさん以降の事だった。私はそんなに隙があるのだろうか。

「先輩、返してください！」そういって私は朧げに揺らいで見える先輩をおもいっきり睨みつけた。
「やだ。遥ちゃんがデートしてくれるっていうなら返しても良いけど。」ざわざわと人の集まってくる気配に私はため息をついて降参した。
「わかりました。デートしますから、早く眼鏡を返して下さい。」
「やった！絶対約束だからね、遥ちゃん。」そういって先輩はやっと眼鏡を返してくれた。
その様子をじっと遠くから見つめる姿があった事を遥は知らなかった。

「ねえ、忍ってば、何見てんの？」腕に絡ませた手を強く引っ張りながら女が言った。
「ん？ああ、何でも無い。」
「あ、あれって沢田先輩じゃない？やだ、本物初めて見ちゃったかも！」

「・・・知っているのか？」
「え？うん、だって有名だよ～。まあ建築科の方はあんまり知らないかもしれないけど、なんでもうちの大学始まって以来の天才らしいよ。私の友達にも一時期付き合った事のある子いたなー。なんたって美形じゃん？でもかなりの変人らしいよ？私も詳しく聞いた訳じゃないけどさ～。」
「変人？」
「うん、あ、そんな事より～、早くいかないと間に合わないよ！それから、今日のが終わったらいいでしょ？」そういって女は含みのある目を向けた。

9話

夕飯の買い物をして帰ってくると、どっと疲れて冷蔵庫にものを閉まってからリビングのソファーにトスッと腰を下ろした。それは暖色の柔らかいマイクロファイバーで出来たソファーでとても心地が良い。実際本当に疲れていたのだろう、それからほどなくして私は深い眠りの中へと落ちていた。

＊＊＊

何故か、昼間見かけない男と一緒に並んで歩く彼女の姿を見た時に胸がざわめいた。別に彼女が誰と一緒に居ようが関係ないと思いつつ、その場から目をそらす事ができなかった。それからなんとなくイライラしたまま、女との約束をすっぽかして帰ってきた。玄関の扉を開け、リビングに入るとそこに疲れた顔をした彼女が寝ているのが見えた。

その顔を見た途端、何とも言えない安堵感があった。部屋から軽い羽毛のブランケットを持って来てゆっくりおこさないようにかけてやる。

黒くて艶やかな髪の毛をひとなですると、暫くの間その寝顔をじっくりと眺める。その年の割には幼い容貌だが数年もすれば、見違えるようになるか・・・ジェリーの言っていた言葉を思い出し苦笑する。あの後、一度奴にあって馴染みの店に行った。日本ではどうやら二十歳になるまで酒が飲めないらしい、側でぐいぐいと浴びるように飲む奴を恨めしく思いながらコーヒーを飲む。

「あんたにしては珍しいタイプの子だったわね。うちの店にまで連れてくるなんて。」

「そうか？」

「あら？彼女じゃないの？」
「只のルームメイトだ。」
「へえ・・・尚珍しいじゃない？あんたが女と一緒に住むなんて。あんたって無類の女好きだけど、自分の部屋には一切入れなかったでしょ？メンドクサイって言って。」
ジェリーは本名、二宮竜之介という。傍系の流れを汲む日本の芸能文化歌舞伎役者の家に生まれながら、それを蹴って一人ドイツへ留学していた時に出会ったのだ。なので、付き合いは結構長い。まあ、跡継ぎは次男がいるらしいが、ドイツで3年、パリで2年、もともと美意識に恵まれていたのか才能があったのか、多くの若者がつぶされる業界の中で瞬く間にその座を勝ち取って行った。

ショーの手伝いなどで欧州に呼ばれると必ず俺の家にも遊びに来ていた。家の親父は世界的に有名な建築家でほとんど家に居た試しがなく、おふくろは元々身体が弱く、俺が小学生の時に没している。家に居ない父親の代わりにベビーシッターとして呼ばれていた女が俺の初めての女だった。一度味を覚えてからは取っ替え引っ替え色んな女と寝て見たが、結局の所、それは只の性欲処理にしか過ぎない。
ドイツ系フランス人の血を引く美貌の母の血を色濃く継いだ自分の周りには絶えず女がいたし、親父も俺の私生活についてはまったくというほど干渉してこなかった。そう、あの日までは・・・。

「んっ」彼女が小さく身じろぎした。うっすらと目を開けて俺の顔を見つめている。そのうちだんだんと意識がはっきりしてきたのか、彼女は勢いよく跳ね起きた。
自分にかけてあったブランケットを見て悟ったらしく、顔を真っ赤にしながら言った。
「すみません！私こんなところで寝てしまうなんて・・・って今何時ですか？！」

俺はちらっと腕時計に目をやって「7時ちょっと過ぎかな」と呟く。
「ご、ごめんなさい！夕飯すぐに作ります！」そういって慌ててダイニングキッチンに行こうとする彼女の手を掴み引き寄せた。
バランスを崩して丁度俺の膝の上に乗っかる様な姿勢になった彼女は大きく目を見開いて俺を凝視する。俺は努めて優しく微笑みながらその耳元に語りかけた。

「いいよ、今日は・・。疲れているんだろう？外に食べにいかないか？」
びくりと震える小さな身体を包み込むように抱きしめる。面白いぐらい抱きしめられた彼女の動揺が伝わってくる。
「あ、あのっ・・」彼女は俺の瞳を見つめ仕方が無いと言ったように息を吐き出した。
「何か・・・あったんですか？忍さん。今日、いつもより随分帰りが早いですよね？」
何かあったのかと聞かれれば、あったのかもしれないが俺は努めて軽く答える。「ん、そう？」
「そうですよ！なんか変ですよ？とりあえずこの手を離してください。晩ご飯は・・まあ私が寝ちゃったから仕方ないですけど・・。」
「何が食べたい？」
「何でもいいです。でも良いんですか？この時間、いつも忍さんどっかに行ってるのに。」
「良いんだよ。」そういって笑うと俺は手を離して彼女を解放する。その途端、俺の携帯が鳴りだした。小さく舌打ちして着信をチェックするとあの女からだった。約束をすっぽかしたから怒っているのだろう。俺は携帯の電源ごと切り顔を上げると心配そうな彼女の顔が見えた。
「いいんですか？その電話・・なにか大切な用事とかじゃ？」
「何でもない、じゃ、行こうか。」
「・・・・・」

鍵を閉めると俺は、彼女の手を引っ張って歩き始めた。先ほどまで眠っていたからかもしれないが彼女の手はとても温かかった。何を勘違いしているのか、彼女は何か言い足そうにしているが、何と言って良いのかわからないといった感じで表情をころころと変えながらついてくる。それが何とも言えず可愛かった。

１０話

目が覚めるとそこには忍さんがいて、優しそうな目でこちらを見ていた。だんだんと頭が冴えてくるに従って自分がソファーで寝ていた事に気付き慌てて起き上がると、自分の身体にブランケットがかけてある事に気がつく。どのくらい寝ていたのか、窓から外はもう暗くなっていた。実のところ其処から暫く私の記憶は曖昧だ。色々な事がごったになって頭の中でショート気味。まずい、夕ご飯作らないととか、考えているといきなり腕を引っ張られてあっという間に広い胸の中に抱きすくめられた。耳元で甘やかに囁かれ心臓を掴まれたかのようにびくりと身体が跳ねた。

だが、それと同時にむくむくと疑問がわき上がる。一緒に暮らし始めて分かった事だが、普段彼は必要な事以外で一切私にかまってくる事はない。確かに最初にあった日のキスや翌日の買い物騒動には吃驚したが、それからは本当に彼が言った通り、お隣さん状態だったのだ。

たまに一緒にご飯を食べるだけの・・。まあソファーで寝てしまったのは私の不覚だったけど、それにしても、なんだか彼の様子が変に思えたのは気のせいではないだろう。そういった思惑がつい口からぽろっと出たのは仕方が無い。でも、彼は何事もなかったかのように蕩けるようなスマイルを私に向けている。さすがに私も女なのでちょっと見惚れてしまうが、それと同時に彼の携帯が鳴りだした。ちらっと着信元を確認して彼は電源ごと切ってしまった。

やっぱりなんかおかしい。彼女・・さんと喧嘩でもしたんだろうか？マンションを出た所でまた手を握られ歩いて行く。そういえば、こんな風に男の人に手を握られて歩いていると昔のお兄ちゃんを思い出す。最初のときは戸惑いと怒りが強くてあんまり考えなかった

けど。無言で手を引っ張って歩くのも兄と似ている気がした。
「あの、忍さん、夕飯どこで食べるんですか？」
「君がきめていいよ。この先にレストラン街があるから、好きな所選んで？」
「はあ・・・。」
「どうしたの？元気ないね・・・？この間連れ出したときはずっとプンスカ怒ってたのに」
それはあなたのせいでしょ！と思うがふと先ほどの切なげな瞳を思い出して踏みとどまる。そうだ、忍さん、彼女と喧嘩別れとかしたかもしれないんだからここは何か盛り上げてあげた方が良いのかもしれないけど・・・でも今までみじかに居た男性はお兄ちゃんか、お父さんしか居ないしこういう時はどうすれば良いのか・・・

＊＊＊
色々な女の子と付き合ってきたけど、ルームメイトになったこの中川　遥という女の子は他の女の子達と一味違う。大抵の子は、少し誘う振りを見せるだけで落ちるのに、この子は何を考えているのか読めない部分が多い。

女の子をエスコートするのは慣れているはずなのだが、何故か、彼女とは話が続かない。女の子が喜ぶ様な会話、お洒落といったものに一切興味がないようだ。どうやったらこんな変わった子になるのか少し親の顔が見て見たいと思う・・・が、そうか、あの叔母の友人だというのであれば変わっているのも頷ける。
ちらっと横目で大人しく手を繋がれて歩く彼女に目を向ける。今日は髪をひとまとめではなく、寝ていたせいもあるかもしれないが、艶やかな髪を背中に流している。
服装は・・・まああまりあえては触れないが、彼女にとってはそう言ったものはあまり意味をなさないのだろう。

そういえば彼女が寝ている時に見た指先は、少し黒く汚れていた。
2～3日だけ付き合った（つまり寝た）美術科の女が木炭を使ったデッサンのときは爪が汚れるとすごくぼやいていた事を思い出す。
美術の話題なら、好きだろうか・・・？今までほとんど女にあわせる会話なんて考えてもいなかったが、このルームメイトに関しては、自分でも不思議なぐらい真剣に考えてしまう。確かに彼女が言ったとおり、俺は少しおかしいのかもしれない。

しばらくレストラン街をふらついていたが最終的に彼女が選んだのは・・牛丼で有名な吉○屋だった。これには俺も少し驚いた。臆する事なく、うきうきと牛丼屋に入っていく彼女を俺は不思議なものをみるように眺めていた。

「へい、らっしゃい！2名さまで？、そこのテーブルか、カウンターが空いてますがどうします？」
彼女はちらっと俺を見ると、「じゃあ、テーブルで」といっていかにも大衆食堂のテーブルらしいところに腰を落ち着けた。
「忍さん、どのくらいお腹空いてます？」
「え？ああ・・・普通かな。」
「・・牛丼嫌いですか？」
「嫌、そんなことはないけど、遥ちゃん・・は牛丼食べるの？」
「そりゃあ、もちろんです。でも色々メニューあるんですよ。忍さん、ずっと外国にいたから知らないかもしれないですけど・・。ほら、このカルビ定食とか、セットメニューとか・・」そういいながら彼女はメニューを指差して、にっこりと笑う。

オーダーを取りにきたおじさんにそれぞれ注文を終えると改めて俺は彼女と向き合った。
が、彼女の口から出て来た言葉は俺の予想を遥かに裏切った？ものだった。

「忍さん、もしかして今日一緒にいた彼女と喧嘩でもしたんですか？」
「今日一緒にいた彼女？」
「はい、校門近くのところで、綺麗なお姉さんとキスしていたでしょう？」

11話

まさか見られているとは思わなかった。今までならこんな事ぐらいで動揺する自分ではないはずなのだが、すっと血の気が引いたのが分かる。

「見てたの・・・？」

「え？ああ、はい。すみません。ちょっと遠目からだったんですけどすごく素敵で一枚の絵を見ている様でした。」

「そう・・。」返事をしながらむくむくと苛立ちが募る。自分でもさっきまで機嫌が良かったのにまたこんな風に苛立つのが解せない。

「えっと、なんて言えば良いのか分からないですが、とりあえずいっぱいご飯食べて眠ったら元気になると思うんですよ。」

目の前の彼女は何も分かっていない。分かってはいるがイライラしたまま口を開く。

「別に、彼女と別れたとか、付き合ってるとかそういう話じゃないよ。そんな事君が気にしなくてもいい。」何故か冷たい口調で突き放してしまう。

一瞬彼女の顔が少し曇る。そんな顔をさせたかった訳ではないのに・・だが一度芽生えてしまった刺は己の口からもっと大きくなっていく。

「君も・・・誰かいい人ができたんじゃないの？講堂に向かってやたら目立つ男の人と歩いてたでしょ？」

彼女の白い肌がほんのりと赤身を帯びた事を俺は見逃さなかった。

「もしかして、忍さん見てたんですか？あの人沢田先輩といって、3年の先輩なんですけど、すごい人なんですよ。油絵一つとっても色彩とか、テクニックとか本当にすごくて、それなのに、彫刻や日本画まで、幅広くフィールドワークしてて、すごい賞いっぱいもらってるんです。」

俺が聞きたいのはそんな話ではない。
「・・・付き合ってんの？」自分でも驚く程冷たい声が響いた。
ぎょっとした顔の彼女と目が合う。ふるふると小さく首を振って彼女が言った。
「付き合ってないですよ？あ、でも今日デートに誘われましたけど・・・でもあれもたぶん、今期出す予定の作品、それは彫刻の方なんですけど、それでフラストレーションが溜まってるから、きっと私をからかって発散してるんです。」

そんな訳無いだろうが・・・。目の前ののほほんとした彼女を見てため息をつく。と、そこに料理が運ばれて来た。
「へい、おまち！お嬢ちゃんは牛丼並盛りだね、そっちの男前の兄ちゃんは牛すき鍋定食。」
途端に目を輝かせて、彼女が言った。「おいしそうですね、忍さん。温かいうちに食べましょう。」それから一時話を中断して二人は黙々と食べ始めた。
その後、彼女を押しとどめて二人分の食事代を払って店をでる。二人で千円にも満たない。大抵女と食べに行くと、こんな安上がりにつく事は無いのだが・・・。
「すみません、支払ってもらって・・・。でもおいしかったです。御馳走様でした！」彼女がぺこりと頭を下げた。
「いいよ。こんな安上がりの食事で悪かったな。」
「安上がりっていっても、ここは学生の拠り所ですよ？安くておいしくて量がいっぱい！完璧じゃないですか？」

それからまた、たわいもない話をしながらマンションへと向かって歩いていると、先の電柱のあるところに今朝見た女性が立っているのが見えた。
あちらも同時にこちらを捕えたらしく、綺麗にお化粧された顔が見る見る間に歪むのが見えた。あっと思った時には彼女は走りよって

きて、私はいきなり頬を叩かれた。
突然の事で驚きの方が強かったのだが、それから後、彼がすごく怒って、彼女と言い合いをした後、彼女が泣きながら去って行くのが見えた。
しばらく、ドラマを見ているような展開にぼーっとしてしまったが、すぐに私は彼の腕を引っ張って言った。
「し、しのぶさん！彼女、泣いてましたよ？追いかけなくて良いんですか？！きっと彼女私の事を誤解してますよ？！」

が、彼はじっと私に目を落とし、その大きな手で私の頬を包み込む様にして触ると、辛そうに言った。「ごめん・・・傷つけて。早く家に帰って冷やそう。」
「私の事は良いですから、早く行って下さい！」
だが、彼は一向に追いかける様子もなく、ぐいっと私の肩を引っ張って自分の方へ引き寄せるとマンションに向かってゆっくりと歩き始めた。私は、頬は痛いが、先ほど去って行った彼女の事が気になって仕方がない。なんでこの人は平然としていられるのだろう。

１２話

家に戻るとすぐに忍さんが氷を包んだ袋にタオルを巻いて持って来て頬を冷やしてくれたが、その場には重い雰囲気が漂う。
「あの・・氷ありがとうございます。もう大分腫れも引いたので私は大丈夫です。」
「まだひいてないじゃないか・・。それに擦り傷も・・・。」
そう、頬をひっぱたかれた時、彼女の鋭い爪で擦り傷も出来てしまっている。冷やすと気持ちよいが擦り傷がぴりりと痛い。

「本当に大丈夫です。それより、本当に良いんですか?彼女さん。」
「もう別れたんだから彼女でも何でも無いよ。」
本当にそんな事で良いのだろうか・・憮然とした彼の綺麗な横顔を眺めつつ小さく息を吐いた。曲がりなりにも彼女は私との事で誤解してああいう態度を取ったのだとすれば、いくらでも説明すれば済む事なのに。私は忍さんの彼女でも何でもないのだから。まあ、一緒に暮らしている事は黙っていた方が良いと思うけど。やましい事は何も無いけどね・・・。
私はゆっくりと立ち上がりつつ、むすっとソファーに腰掛ける忍さんに私は声をかけた。
「それじゃ、私、今晩中に課題を仕上げないと行けないので失礼しますね。」
実際こんな遅くなるとは思わなかった。寝てしまった事もあるが思わぬ時間を食ってしまい１０時を過ぎたというのにまだ何も手をつけていない状態だ。

「あ、ああ・・」
様子のおかしい忍さんの事も少し気になるが、課題を仕上げないと、後が大変だ。

部屋から続くアトリエに入ると、バタンと扉の閉まる音がした。
（・・・出て行った？気を紛らわせに行ったのかな・・・。気になるけど、本当に真面目にやらないと課題終わらないかも。）
必死に課題を終わらせて寝たのは明け方だったが出て行ったルームメイトは帰って来なかった。一人で朝ご飯を住ませると鍵をかけ大学へと向かう。
昨日の腫れはほとんど引いていたが引っ掻かれた爪の跡は赤い筋となって残っている。いつもは化粧などしないが今日は傷を隠す為に薄化粧をしてきた。

教室に入ると真樹ちゃんが声をかけてきた。
「おはよ、遥。あれ・・・？今日なんか違うと思ったら化粧してる？どうしたの？すごい可愛い～！」そういって私の顔を覗き込んで抱きしめてくる。
「ん？ちょっと遥、どうしたのよ、その傷？」
「あ、やっぱり目立ちますか・・・？」
「化粧してたのってそのせい？」
「はい・・ちょっと不注意で引っ掻いてしまって・・・はは」
「本当に・・・？」
う・・・やっぱり真樹ちゃんって結構鋭い所あるな・・。まだ知り合って間もないけど、彼女には隠し事とか出来ない雰囲気がある。どうしようかと迷っていると真樹ちゃんがは～っと大げさにため息をついて言った。
「まあ、いいわ。今回は聞かないでおいたげる。遥ってすぐに顔にでるからこういうのって向いてないわよね。でも、何か困ったことあればいつでも私に相談してよ？」
心強い友の言葉に少し胸が熱くなる。
「はい。真樹ちゃん、ありがとう！」

あの夜の事があってから3日間、忍さんは家に帰って来なかった。

もしかしたら私が居ない時に戻っているのかもしれないが、私が家に居る時はまったく出くわす事がない。一人で住むには広すぎるリビングはなんだか寂しい感じがする。
「今日も帰って来ないのかな・・・。」一応毎日夕食を作っていたが、もう既に3日分の夕飯の残りが冷蔵庫に入っている。3日前のものはさすがに食べてしまわないとやばそうだ。
私は冷蔵庫から残りものを出すと、レンジで温め夕飯を済ませてしまう。
洗い物を済ますと、丁度タイミング良く携帯に電話がかかって来た。この着信音は、実家のものだ。私はあわてて手を拭くと鞄の中から携帯を取り出す。
「もしもし？」受話器の向こうから懐かしい母の声が聞こえて来た。
「ああ、遥？電話とるの遅かったわね、何してたの？」
「洗い物してたんだ。お母さんは元気？」
「もちろんよ。どう、大学の方は？念願の学生生活を楽しんでる？」
「うん、すごく楽しいよ。新しいお友達もできたし、すごい先輩とかも居るし・・」
「そう、それは良かった。そうそう、今あなたのルームメイトのしのぶさんはいらっしゃるの？忙しくて御挨拶しそこねたから、電話ででも御挨拶しとかないとね。」
「あ・・・えっと・・・忍さん、今忙しくて家に居ないんだ。」
「あら、そうなの？残念だわ。まあ、御挨拶はお兄ちゃんに任せとこうかしら。」
「え？」
「お兄ちゃんが丁度1週間後に東京に出張に行くから、その時に遥の所にも寄るって言ってたから。何も聞いてない？」
「う、うん・・・。」
「そうなの？まったくあの子ったら、いきなり行って驚かせるつもりだったのかしら・・」

電話を切ったあと、少しの間心臓がバクバクとしていた。お兄ちゃんが一週間後にやってくる・・？本当なら嬉しいはずなのだが、家族には忍さんが男だったという事実はもちろん伝えていない。それに、今は・・・。私は大きく深いため息をついた。

13話

まさか、付き合っていた女が家の近くで待ち伏せしていようとは露程にも思っていなかった。第一、彼女に自分の住所を教えた覚えも無い。誰から聞いたのかは知らないが、たかが約束を破ったぐらいで押し掛けてくるとは思いも寄らなかった。（＊この男最低です。W）

一瞬目があった時にやばいと思ったが、駆け寄ってきた女が殴りつけた相手は何も考えていなさそうなルームメイトだった。

悔しそうな女の顔と一瞬何が起ったのか分からないと言ったようなルームメイトの唖然とした顔。あれだけ酷く殴られて、眼鏡が吹き飛ばなかったのは奇跡だろう。とはいえ、もし眼鏡が壊れていたなら、これを機会にコンタクトを勧める事も・・・いや、話がそれた。ともかく彼女が殴られるのを目にした途端、カッと頭に血が上った。それから俺も実際よくは覚えていないのだが、かなりキツい事を言ったのだろう、気がつけば女がぼろぼろと涙をこぼして走り去って行った。

次に我に帰ったのはルームメイト殿が赤く腫れ、爪での引っ掻き傷がついた頬を押さえながら、焦ったように、早く追いかけろという言葉を吐いた時だった。

一気に罪悪感というのか自分の中に重苦しい感情が沸き起こり、ゆっくりと彼女の頬を撫でた。家に帰り、彼女の頬を冷やしていたときも、お人好しのルームメイトが気にしているのは、殴った相手の事だった。だが、いくら彼女が言い募ろうと、追いかける気などまったくなかった。もう既に終わった事だ。

重苦しい雰囲気の中、彼女がリビングから立ち去ると、俺はイライラした心を抱えたまま、外へと出て行った。その日の晩は他の女の所へ電話をかけ、激しく抱いた後、そのまま1泊を過ごしたが、イ

ライラは収まるどころか、余計に酷くなっていく。朝から俺の不機嫌な様子を目の当たりにした女はさっさと仕事へ出かけて行き、俺は昼から大学へ行った。
ずっとルームメイトの赤く腫れた頬や驚いた顔が頭から離れないが、何故か家に帰る事は戸惑われて、結局それから3日間、ジェリーのＳｔｕｄｉｏへと転がりこんだ。
俺の苛立を機敏に感じ取ったのか、深くは追求せず、しばらくほっておいてくれたのはさすがに長年の付き合いの成せる業か・・だが、3日目に奴が仕事から帰ってくると、俺を見やってため息を付きながら言った。
「忍、あんたそろそろ家に帰ったらどうなの？何があったのか知らないけど、あの純情そうなお嬢ちゃんも心配してるんじゃない？あんたが一緒に居てくれるのは、そりゃあ目の保養にもなるし、良いけど、そんな辛気くさい顔は見たくはないわよ。」

「・・・・。」
「あんたがそんなにやさぐれてるのは、あの子に関係ある事？喧嘩でもしたわけ？」
「・・そんなんじゃねー」
「そ？なら別にいいじゃない。明日からあたし、仕事で大阪に行くから、丁度良い頃合いでしょ。」
「わかったよ。」
結局半分追い出されるようにジェリーの自宅から出た俺は、叔母のマンションへと向かって歩き始めた。マンションの近くまで来ると部屋のある窓を見上げる。部屋には煌煌と明かりが灯っていた。帰って来ているのか・・・。一瞬戸惑ったが、そのままエレベーターに乗り、部屋の前までくると、鍵を開けて一歩室内へと足を踏み入れた。
＊＊＊

カチャリという音がして玄関の扉が開く音がした。
（帰って来た・・・？）
しばらくの間電話のショックでぼーっとしていたが、その音に反応して私はリビングのドアをじっと凝視する。
ドアを開いて入って来た彼と一瞬視線が交差した。
＊＊＊

「お、おかえりなさい。夕飯は？」普段と何一つ変わらない態度で彼女が声をかけてきた。少しほっとすると同時に急激にお腹が減った気がする。
「何かあるのか？」
彼女は花が開くようにニッコリと笑うと台所へ行き、冷蔵庫を開ける。
「帰ってきてくれて良かったです。３日分の食事をいれてあったんですけど、さすがに冷蔵庫もパンパンだし、あ、ちなみに３日前のは私が今日食べちゃいましたけど。」
そういいつつ、冷蔵庫から色々なものを取り出して、あるものはレンジで温め、あるものはオーブンで温めなおしたりしながらテーブルの上へと置いて行く。
「どうぞ？もう食べれますよ。」
まるでレストランの給仕のように完璧にテーブルの上に並べられた料理。俺は無言で食べだした。美味い・・・。最近ずっと外食ばかりだった為もあるが、久しぶりに食べる彼女の料理はできたてでないにしてもかなりおいしかった。
彼女は既に夕飯を食べていたのだろうが、俺に付き合ってか、椅子に腰掛け、俺の食べる様子を満足そうに見ている。なんだか、１歳年下の彼女の方が自分よりよっぽど大人だ。
ほとんど食事を食べ終えた頃、彼女がゆっくりと口を開いた。
「あの、忍さん・・。相談したい事があるんですが・・・。」

14話

相談・・・その言葉を聞いた時に嫌な予感がした。まさか彼女はここをでていくつもりなのかと。だがそれでは相談とは言わないかもしれないと思い返し、おそるおそる聞いてみる。
「何かあったの？俺が居ない間・・」
「いえ、そう言う訳じゃないんですが・・・。実は先ほど忍さんが帰って来られる前に家の母から電話があったんです。それでですね、兄が・・来週こちらに出張でくるんですが、こちらに挨拶に来るって言ってて。あの、家の家族まだみんな知らないんです。忍さんの事はみんな女性だと思っていたものですから・・・。」
「・・なるほど。つまり俺が男だとばれると困るって事？」
「まあ、有り体に言えばそうです。」目前のルームメイトは頷いた。

「ふうん、結構お固い家なんだね。うちの親とは大違いっても、家は親父しかいないからな・・。で、そのお兄さんってあの写真に映ってた奴だろ？」
「はい。」
自分には兄弟が居ないからわからないが、わざわざ妹の住居に挨拶に来るなんてシスコンか？などと自分の事は棚に上げて色々と失礼な事を考えていたが、どうも彼女は真面目に悩んでいるようだった。

「もし・・・、俺が男だってばれたらどうなんの？」
「それはっ・・。たぶん、この部屋を出てどこか違う場所に移る事になると思います・・。でも私、まだバイトも見つけてないし、ここより良い部屋なんて見つからないってわかってるから、本当ならここにいたいんです。」
確かに彼女がでていくなんて許せる事ではない・・・。何故自分がこんなに彼女に執着するのかまだわからないのだが、彼女がここを

でていくのは断固阻止するべきだ。
「つまりさ、俺が男だってばれなきゃ良いんだろ？」
「まあ、そういうことになりますね。」
「女装・・・とかしてもばれるだろうしなあ。俺結構タッパあるし・・。」
くすっと彼女が笑う。その笑い方がとても可愛らしくてつい目を奪われた。
「忍さんの女装ですか？きっとお似合いだとは思いますけど・・でもやっぱり無理がありますよね。」

しばらく考えていた二人だったが、ふと思いつきを口に出してみる。
「じゃあさ、遥ちゃんの信用できそうな友達に頼むってのはどう？誰かいない？頼めそうな人・・。」
そう言われて頭に浮かんできたのは真樹ちゃんの顔だった。真樹ちゃんなら、頭の回転も早いし、事情を話せばなんとかしてくれるかもしれない・・・。
「そう・・ですね。ちょっと聞いて見ます。」私は後片付けをしながら頷いた。我ながら不思議だ。最初はルームメイトが男だと言う事が分かって1～2週間は何とはなしに居心地の悪さを感じていたはずなのに、いつの間にか、ここに居るのが当たり前・・・ううん、とっても心地よく感じている自分がいる。
忍さんも、私生活の素行態度はお世辞にも良いとは言いがたいが、お互いある程度の距離を保ちつつ上手くやってきた。実際、毎月手渡される、食費もすごく助かっている。広いアトリエを自分一人で使える。こんな物件は他にはないと言う事を大学が始まって新しい友達ができると、より実感した。何も悪い事をしている訳ではない・・・でも、お兄ちゃんなら、この状況を見てどうするだろうか？自分の事を可愛がってくれているのは、十分に承知しているが、たまに過保護すぎるぐらいの執着を示す兄の事を思いため息をついた。

＊＊＊
次の日の金曜日、私は講堂につくと真樹ちゃんの姿を探す。少し離れた窓際に見慣れた姿を見つけ、私は駆け寄って挨拶をする。
「おはよう、真樹ちゃん。」
「おはよ、遥〜。どうしたの？息切らしちゃって。鼻の頭が赤くなってるよ。」クスリと笑いながら真樹ちゃんが私の鼻を指で弾いた。
「ほんと？走ってたからかなぁ。まあいいや。あのね、真樹ちゃん、相談があるんだけど、後で時間ちょっと良いかな？」
真樹ちゃんはちょっと吃驚したように私を見つめて言った。「わかった。じゃあお昼時間の時で良い？いつものところで。」
「うん。」

いつものところと言うのは、大学の校舎のハズレにある、昔建てられたという今は道具置きになっている物置の横にある小さな花壇。何故かそこにピクニックテーブルが置いてあり、たまたま入学当初迷って見つけたその場所は私のお気に入りで少し気候が暖かくなってきてからはちょくちょく其処でお弁当を広げていた。
午前中の授業が終わった後、私はお弁当を片手にゆっくりと校舎のハズレに足を運ぶ。するといつものピクニックテーブルに人影が見えた。
あれ、もう真樹ちゃん来てるのかな？だが、距離が近づくと共に、それはまったく違う人物である事が分かる。
「沢田先輩？」
少し長めの前髪をくしゃくしゃにしてテーブルの上にうつぶせて先輩が寝ていた。近くまで来て私はぴたっと足を止めて考える。いくら温かくなって来たとはいえ、まだ春先だし、あんな薄着で寝ていたら風邪を引いてしまう。疲れていそうだからおこすのは偲びないし、などと考えながら、もう一歩足を踏み出した所でいきなり先輩がむくりと起き上がり私の腕をぎゅっと掴んで来た。
「・・起きてたんですか。先輩？」寝た振りするなんて質が悪い・・

。
「だって、こうでもしないと遥ちゃん、逃げちゃうでしょ？」
「逃げませんよ。でもどうしたんですか？こんなところで。」
「どうしたも、こうしたも無いよ。せっかくデートの約束取り付けたっていうのに、遥ちゃん、一向に顔見せてくれないし、何処に行ったら捕まえられるかずっと考えてたんだぞ！」
いや・・・そんなこと考えなくても・・と思いつつ、私は言った。
「あれ・・冗談かと思ってたんですが本気だったんですか？」
むっとした顔で先輩が私を睨む。
「当たり前じゃん。俺がそんな嘘をつくように見えるの？遥ちゃん！」
ものごっつい、見えます・・・。とは言えないのでどうしようかと考えていると、真樹ちゃんがこちらに向かってくるのが見えた。

15話

「先輩、何昼間っから女の子くどいてんですか！」
先輩は私の手をを握ったままクスクスと笑って答える。
「だって。遥ちゃんの手って小さくて柔らかくて気もちいんだもん。」
真樹ちゃんはピクニックテーブルの側までやってくると呆れたように言った。
「先輩、その発言もう親父の域超してやばいですよ。うちの可愛い遥にあんまり近づかないでくださいね。この子、男にあまり免疫ないんだから。」
「ちぇ。しゃーねえなあ。」そういって渋々先輩は手を離してくれる。
「というか、先輩、さっきそこ熊谷教授が探してましたよ。もうそろそろこっちらへんにも手が回るんじゃないですか？」
「げっ、まじで？」
「マジも、マジ、大マジです。」
「わかった、サンキュ、俺行くわ。そんじゃ、遥ちゃん、今度ゆっくりデートのプランたてようね～！」そういいつつ先輩は風のように去って行った。

「さて、これで邪魔者はいなくなったわね。お弁当食べながら話しましょ、遥。」真樹ちゃんはバックの中からコンビニのおにぎりを取り出すと、ピクニックテーブルの上に置いてあった、私のお弁当の包みをいそいそと開けだした。
「え？じゃあ、さっきの熊谷教授が探してるっていうのは・・・？」
「遥・・。嘘も方便って言葉知ってる？」それこそ妖艶な笑みを浮かべて真樹ちゃんは私のお弁当の卵焼きをフォークで突き刺して口の中に放り入れた。

「おいし～！やっぱり遥の卵焼きは最高ね。で・・・？遥の相談事って一体なんなの？」
「えっと・・・うん。そうだね・・。」
「何？なんか言いにくい事？まさか遥、男ができた？」
「え？違うよ・・そんなんじゃないんだけど、えっと何から話せば良いのかな・・・。」わたしはゆっくりとお弁当を食べながら、忍さんのことや、今抱えている問題の事を話した。

「まっじで・・・？いや、これは・・ホントびっくりしたわ。まさか遥があの有名人と同棲してるなんてね。」
「同棲じゃないよ。只のルームメイトだし・・・。」
「いや、だからそれを同棲って言うんでしょ？」
「え？そうなのかなあ・・・。同棲って付き合ってる人とかがするんでしょ？私と忍さんはそんな関係じゃないし。やっぱりお隣さんって感じだと思うけど。」
「でも、遥が夕飯作ったりしてるんでしょ？プチ妻状態じゃん。」
「う～ん・・・でも、食費代、結構出してもらってるから・・それに、一人分作るのも二人分作るのもあまりかわらないでしょ？」
にこにこ笑いながら言う遥を見ながら真樹は考える。この子って本当に自覚がないのよねえ。無防備な所は友達としてすごく心配だけど・・でもだからこそ自分の身を守れているって所もあるのかしら。本当に変わった子、まあだからこそなんかかまいたくなるんだけど。
「まあいいわ。話を元に戻しましょ。つまり、遥のお兄さんが来る時に私が、彼のかわりにルームメイトとして振る舞えば良いってことでしょ？」
「うん。お願いできるかな？」
「いいわよ。そんなことならお安い御用。あ、でも前持って部屋の事とかも色々知らないとまずいわよね。」
「うん。だから真樹ちゃんさえ良ければ、近いうちに一度家に来てもらえるかな？もちろんご飯も一緒に食べよう！」

「そうね、例の有名人にも逢ってみたいしね。オッケ、じゃいつにする？」
「明日・・・土曜日だし、何もなければどうかな？たしか忍さんも明日の午後からは何も予定が入ってないって言ってたし。大抵週末は居ない事が多いんだけどね。」
「わかった。じゃあ、明日の昼頃にしようか、どこで待ち合わせにする？」
「そしたら、●●駅の南口前で１２時でどうかな？」
「わかった。じゃ、そろそろ戻りましょ。私はこの後何もないけど、遥、デッサンのクラスがあったんじゃないの？」
「あ、そうだ！ごめん、まきちゃん、また明日ね～！！」

＊＊＊
こうしてまた１日が終わりを告げ、家に帰った私は、８時頃に家に帰ってきた忍さんに、話をした。
「え？明日？」
「あ、もしかして何か予定入ってましたか？すみません、そうですよね、せっかくの休みなのに予定も聞かないで勝手に決めちゃって・・。ごめんなさい。いいです、真樹ちゃんには電話して日にちを変更してもらいますから。」
「ああ、まって。いいよ、明日でも。ただ、俺が帰って来られるの３時過ぎになると思うけど。本当は休みだったんだけど、撮影の方でなんかトラブルあったらしくって、ピンチヒッターで呼ばれてんだよ。」
「そうだったんですか。あ、そういえば最近忍さんが載っている雑誌を見ましたよ。友達が持って来てたんですけど・・すごいですね。なんか雑誌の中の人っていうか・・・。」
「っぷ、何その雑誌の中の人って。まじうけるんだけど・・・」
「え？うけるんですか？」
「は～、遥ちゃんってほんと天然だよね。で、どうだった？雑誌の

中の人は？」
「すごくかっこ良かったです。良いですよね、忍さん背が高くて足が長いから何でも似合いますよね。雑誌の中で着てた洋服、私あまり知らないんですけど、一つ兄が好きなブランドがあったので知ってたんです。」
「へえ？どんなやつ？」
「えっと、白と黒が基調の・・・。」
「ああ、●●ね。何、お兄さんって結構お洒落なの？これって結構新しいブランドだけど。」
「そうなんですか？じゃあ、違うのかな・・・。」
考え込む遥の横顔をしばらくじっと見つめていた忍だったが、何かを思いついたようににんまりと笑みを浮かべた。

16話

「真樹ちゃん！こっちだよ～。」私は改札から出て来た真樹ちゃんに大きく手を振る。
真樹ちゃんが早足でやってくるとぽこんと軽く私の頭を叩いた。
「もう、子供じゃないんだからあんな手を振らなくたって分かるわよ。恥ずかしいでしょ！」
「あ、ごめん～。うちに私たち以外のお客様が来るのって初めてだからなんか嬉しくって！」
そういってニコニコ笑う遥を見てるとやはり可愛い。自分にはその毛はないので、妹がいればこんな感じかと思う。あいにく下には口の悪い弟しかいないのだが・・・。

二人で並んで歩きながら、この辺りの事を色々と教えてくれる。
「それでね、この曲がり角の家にはすっごい大きなワンコがいて、可愛いんだけど、あまりちかより過ぎると飛びかかって来て上に乗られちゃうのよ。一度やられちゃってお洋服がどろどろになっちゃったのよね。家の人が出て来て大謝りしてくれたんだけど、、ちゃんと張り紙してあったの見なかった私が悪いから・・。飛びかかり注意って。でも、それからそこのお宅の方と仲良くなって、時々触らせてもらうんだー。ふわふわのもっこもこで可愛いんだよ！」

「そ・・・そう。」
意外に遥の住むというマンションは駅から近かった。これって、駅から見えてた建物よね？私は建物を見上げながら考える。すっげー高そうなんだけど・・・。
「遥・・ここに住んでるの？」
「うん、すごいでしょ？私も最初来た時何回も住所確かめちゃったよ。ここね、両親の友人で、忍さんの叔母さんが使ってたんだけど、

今ずっとフランスに住んでいて使ってないからって格安で貸してくれてるの。」
それからエレベーターを上がって部屋に入ると、またまた吃驚する。ダイニングキッチンから見える眺めもそうだが、まるでモデルルームのようだ。
「おじゃましまーす。。てか、うっわあ・・・マジすごいかも。ここに二人暮らしかあ。あれ、そういえば例の有名人は？」

「あ、忍さんね、実は急に仕事がはいっちゃって、帰ってくるの3時過ぎになるって。それまで、ここでゆっくりしてもらっても良いし、買い物とか行っても良いけど・・・。」
「そっか。お楽しみは後回しだね～、確か夕食一緒に食べるんだっけ？遥の手料理、すっごい羨ましいんですけど・・・はー私も遥みたいな可愛いお嫁さん欲しいかも。」
「およめさんって・・・真樹ちゃん・・・。」
「冗談だよ。」半分は本気だけど・・と心の中で付け足す。
「そっか、じゃあ駅の辺りでなんか食べてくれば良かったね。このへんって何か食べる所あるの？」
「うん、この間忍さんに教えてもらったレストラン街の方へ行ってみようか？」

お昼を食べて、少しぶらぶらウィンドーショッピングして帰ってくると、遥がいそいそとお茶の準備をしてくれる。その様子を見ているとどう見ても新妻さんだ。一緒に暮らしているという男は遥の事をどう思っているのだろうか・・・。大学内でも彼は色々な意味で有名人だった。それは一重に彼の外見の事だけでなく、人気雑誌のモデルをしている事や、女性関係は入れ替わり立ち代わりがやたらと激しいが、それでもひっきりなしに彼女になりたがる女が多い事、そして意外に授業にはちゃんと出席していて、教授達の評価が高いらしい事・・などなど、細かく上げればきりがない。

もう一人の有名人である沢田先輩といい、何故か遥の周りにはトラブルの種となりそうなものが多い。それと・・・週明けの少し赤く腫れた頬と擦り傷。遥は何も言わなかったが、あれは何処かでぶつけて出来る様なものではない。誰かに殴られた跡だ。
最初はルームメイトであるという男の事を疑ったが、遥の様子を見ていると、どうもそうではないらしい。としたらそいつの周りにいる女ではないかと推測していた。

「はい、真樹ちゃん。これ、昨日作ったんだけど口に合うかな？」
と、遥が出して来たのは手作りらしいクッキー。
「遥が焼いたの？」
「うん。昨日の晩に作っといたんだ。紅茶はね、本当は忍さんが入れたものの方がおいしいんだけど、我慢してね。」
何かと、遥の世話をしてるんだと考えていると、玄関で鍵の開く音がした。
「あ、帰って来た！」そういってパタパタと出迎える姿を後ろから眺める。遥・・・あんたは気がついてないかもしれないけど、これじゃ、本当に新婚さん家庭だよ・・・汗）

リビングの扉を開けて入って来たのは噂に違わぬ良い男だった。入って来た途端にほんのりと爽やかな香りが鼻孔をくすぐる。香水でも付けているのだろう。確かに、雑誌から出て来た様なファッションとスタイルを持つ男だった。ヤケに彫りの深い顔を見るとドイツ人とのクオーターと聞いて納得できる。だが、この様子だと、両親もかなりの美形なのだろう。
「どうも・・」入って来てすぐに目が合い、男が心地よいアルトを響かせた。
「初めまして・・。秋本　真樹っていいます。」
奴は妖艶な笑みを浮かべたまま手を差し出す。「俺は、笹塚　忍です。よろしく。」

「えっと、忍さんも座りませんか？今丁度私たちも帰ってきてお茶する所だったんです。」
「分かった。じゃあ、俺少し着替えてくるから・・。」そう言って彼は隣の部屋へと歩いて行く。私はゆっくりと息をはいた。確かにすごい存在感だ。

着替えて出て来た奴はビンテージらしいジーンズと黒のシャツを完璧に着こなしている。ソファーに座った時の足の長さに驚いた。
「それじゃぁ、本題について話そうか・・・？」

17話

簡単な自己紹介が済むと、部屋を案内してもらい、色々な情報を頭に詰め込んで行く。
「で、こっちが俺の部屋・・。まあこれに関してはどう見ても男の部屋だし、見せないでいてくれるのが一番助かるけどな。」
「まあ、普通初対面で部屋に勝手に入るってことは無いと思うから大丈夫じゃないですか？」
「うん、お兄ちゃん、無神経じゃないからきっと大丈夫！」
「へえ、でもすごく綺麗に片付いてますね。なんか吃驚・・無駄なものが無いっていうか。」
「ああ、あまり荷物持って来なかったから。必要なものはこちらで買えばいいと思ってたし。」
「そういえば、忍さん・・はドイツからの留学生なんですよね？」
「よく知ってるね。」
「まあ、有名人ですから・・・。」
「そう？」
私はひょうひょうとした雰囲気の男を観察しつつ会話を進める。
「で、遥のお兄さんがくる日は忍さんはどうするんですか？」
「あー、それなんだけどさ、俺遥ちゃんのお兄さんってちょっとあってみたいんだよね～。」
「ええ？」遥が声を上げる。
「俺、兄弟とか居ないしさ。どんな感じなのかなーとか思って。」
もちろんそれが理由ではない。自分でも不思議だが、遥と一緒に暮らすようになってから、彼女に関する些細な事は、なんでも気になるようになった。写真でしか見た事の無い遥の兄は、モデル仲間やその他のいわゆる見目の良い男達を見慣れている自分が見ても、なかなか、格好の良い男だった。遥とはあまり似ていない感じだが、一度あってみたいと思ったのは本音だ。

遥が目を白黒させているとなりで、私は男の顔をじっと見つめた。
「・・見たいっていってもこそこそ見る訳ではないんでしょう？一体どうするつもりなんですか？」
「う～ん、そうなんだよね。友達・・が遊びに来たとか、たまたま近くであったので遊びに来たとか？」
「・・微妙ですね。その辺の事は後で話しましょう。それにしても、遥、実際に何日の何時にお兄さんがくるのかわからなかったら、色々困ると思うんだけど、その日程はちゃんと調べられないの？」
「うん。そうだね、お母さんは来週としか言わなかったし。もう一度電話して確認してみるよ。お兄ちゃんにかけた方が早いかもしれないけど。」

それからしばらく会話をした後、遥は夕飯を作るためにキッチンへ行った。私も手伝おうかと思ったが、後で、お皿やお箸を出すときに手伝って欲しいと言われ、リビングの方でルームメイトと顔を突き合わせ座っている。今日一日観察していて、私の中で確信に近いものを得た気がする。私は目前の男に小声で話しかけた。
「遥の、頬の傷、あれどうしたんですか？」半分釜をかけて問いかける。知っているのだろうと視線で問いかける。
すると思った通り、男は一瞬目を見開き、視線を遥に向けた後、ゆっくりと私を見て口を開いた。「真樹・・さんは感が良さそうだね。たぶん君が考えている通りだと思う。」
「遥は良い子だから何も言わないけど、あんな傷、普通には出来ないですから。まだうっすら後が残っているけど、気をつけて下さいね？今後、あの子を傷つけたら私が許しませんから。」

神妙な顔つきで、忍が頷く。「分かってる。もう二度と遥を傷つけさせない・・・。」そう言って手を握りしめた。
やはりこの人は遥の事が好きなのだろうか？遥に接する様子を見て

いると、巷で聞いている噂とは違った姿を垣間見る事がある。だが、なんとなくそれはこの男自身も気がついていないような感じがした。まだ、物事を見極めるには時間がかかりそうだ。

「真樹ちゃん！このお皿、そっちに置いてくれる？！」遥の声が響く。

私はうな垂れている彼を一瞥した後、手伝いをする為に立ち上がって行った。イタリアンを中心とした晩ご飯に舌鼓を打った後、また細かい事は後に連絡し合う事になって、私は疑似新婚家庭を後にした。

真樹ちゃんがでていった後、忍さんがぽつりとつぶやいた。

「頬の傷、まだ少し残ってるんだな・・・。」

「ああ、こんなのどうってことないですよ。そのうち消えますから。」まだ気にしていたのかと自分よりも遥かに背の高いルームメイトを見上げる。

「償いができるとは思ってないけど、何か欲しいものとか、してもらいたい事とかあればなんでもいってほしい。」

「大丈夫です。最初にいった通り、これは事故みたいなもんですから気にしないで下さい。それにしても、忍さん、本当に家の兄に会いたいんですか？」

「え？ああ。まあ、できれば・・・。」

「そうですか。わかりました。何か方法考えておきますね。それと、今日は、色々と付き合って頂いてありがとうございました。」

＊＊＊

それから1週間後、遥の兄、中川　柾樹は駅に降り立つとゆっくりと周りを見渡した。仕事は順調に終了し、少し早めにここまで来たのだが、あいにく今日は雨だった。

「お兄ちゃん！」小雨の中を傘をもってぱしゃぱしゃと小走りにや

ってくる妹の姿を認めると、柾樹はその端正な顔に笑みを浮かべた。
「遥」
ゆっくりと二人並んでマンションへと歩いて帰る。兄とこうして二人並んで歩くのは本当に久しぶりだった。たわいのない近況報告をする妹を見て、少し安堵する。というのも、実家に帰ったとき、丁度そう、遥がこちらに移って間もない頃だったか、電話をかけた母が、遥の事を心配していたからだ。だがしかし、それも家族と離れて生活を始めた最初だったからかもしれない。
「そういえば、母さんが是非ともお前のルームメイトに宜しく挨拶してくれといってたが、今日会えるんだよな？」
「う、うん・・・。あのね、お兄ちゃん、実はルームメイトの他にお友達が二名ほど・・・来てるんだ。」

18話

低い足音に水音を響かせながら柾樹が方眉を少し上げて問い返す。
「友達・・？」
長い付き合いだ、その一言の中に様々な思惑が含まれているのを遥は敏感に感じとる。何も、今日に限って友達を呼ばなくても・・とそう考えているのだろう。
「うん、その、今日お兄ちゃんがくる事話したら是非あいたいって・・・。」
「女か？」若干嫌そうな響きを含ませ即座にそう聞いてくる兄の端正な横顔を覗き見る。高校時代、生徒会会長を務め、全学年の幅広い人望を集めていた兄の元には様々な女子からの熱い視線が注がれ、妹である私を通して兄に近づこうとする女の子達も少なくはなかった。
表面上、優しく紳士的に接してはいたが、中には勘違いから暴走してしまう女子もいて、度々面倒に巻き込まれた兄の脳裏には昔の苦い思い出が甦ったのだろう。
「ううん、えっと、お友達は両方とも男の人で、一人は学部の先輩で、もう一人は・・その・・・」頭の中で猛烈に忍さんとは学部も違うしどうやって説明しようかと考えていると、兄の少し冷ややかな声が帰って来た。
「男・・なのか？」その声にはっと顔を上げると、若干驚いた様な兄の顔が目に映った。
「あ、うん。」
「そうか・・・。」と兄は少し考え込んだまま歩を進めた。
＊＊＊
そう、なぜか、今日家には二人の男性が待っている。一人は忍さん、

そしてもう一人は・・
数日前、ランチタイムに兄が来る時の詳しい打ち合わせをしていた時、何故か庭園の垣根に隠れるようにしていた先輩がひょっこりと顔を出して来た。
「き～ちゃった・・。まさか遥ちゃんが、建築学科のあのイケメン君と一緒に暮らしてるなんて・・・俺の可愛い遥ちゃんが、まさかねえぇ・・・・。」
「せ、先輩！」
「いつから其処に・・というか、なんでそんなところに隠れてるんですか？！」
「ん～？遥ちゃんたちのくる前からだけど・・・逃げてたからに決まってんじゃん、あの鬼教授から。」
「また何かやらかしたんですか？」呆れたように真樹ちゃんが冷たい視線を落とす。
「そんな事はどうでも良いけどさ、遥ちゃん・・・」
「な、なんですか？」私はずずっと寄って来た沢田先輩から逃れるように若干身体を引く。
「今の話、本当なの？てか、あれだけ深刻そうに話してたら嘘じゃないよね～。あーマジ俺ショックだわ。つーか、遥ちゃんあいつと付き合ってんの？」
全部聞かれていた・・と思った途端に自分でも顔色が青ざめたのが分かる。
「ちょっと先輩！」真樹ちゃんが止めに入る前に私は決意を決めて言った。
「別に付き合ってるとかじゃないです。只のルームメイトですから。」
「ふ～ん・・・？そうなんだ・・・。で、まあ遥ちゃんのお兄さんがくるのに、ルームメイトが男だということがばれたらやばいってこと？」
「そうです・・。」

「なるほど、そっか、そっか。」そして先輩は目元まで隠れている長い前髪をかきあげて、切れ長の綺麗な瞳で私を見つめ、にっこりと笑った。
「じゃあさ、俺も遥ちゃんのお友達ってことで、そのお兄さんと合わせてよ。そしたら、この事は秘密にしとくからさ。」
変人だとは聞いていたが、何故秘密にするという駆け引きで、自分の兄に会いたいというのか、まったく遥にはわからなかったのだが、真樹ちゃんもため息をついて仕方ないと言うように私を見ている。私は緊急連絡用に教えてもらっている、忍さんの携帯に連絡を入れ、簡潔に事情を説明すると、忍さんも嫌そうな雰囲気が声に現れていたが、最終的に何故か、二人一緒に兄を迎える事となったのだった。

＊＊＊

「ここか？結構良い所に住んでるんだな。俺の所とは大違いだ。」マンションにつくと兄が笑って言った。確かに、今お兄ちゃんは、会社の社宅のアパートに住んでいる。一度母と訪れた事があるが、お世辞にも綺麗な建物とはいいがたかった。
エレベーターを上がり、部屋の前までやってくると、チャイムを押す。はーいと中から真樹ちゃんの声がして、扉が開かれた。
「あ、忍さん、えっと、うちの兄です。」玄関先で、私がとりあえず兄を紹介する。
「どうも、遥がいつもお世話になっております。遥の兄の中川柾樹と言います。」ぺこりと兄が頭を下げた。
「初めまして、笹塚　忍と言います。どうぞ宜しく。あの、玄関で挨拶もなんですから、リビングの方へどうぞ。今、遥と私の共通の友人も二名ほど来てるんですが・・・。」そう言って真樹ちゃんはちらっと奥のリビングに視線を走らせた。
「ああ、先ほど遥から聞きました。すみませんね、急にお邪魔して

しまって。」靴を脱いでそろえると、真樹ちゃんに案内されて、兄がリビングの方へ移動する。私もうゆっくりとその後をついて歩いて行く。よしよし、今の所、兄は少しも疑ってはいなさそうだった。
「気になさらないで下さい。ちょっと課題の事で一緒に勉強しようという事になって来てるんですよ。今日、遥のお兄さんがくる事は知ってたんですが、それでもかまわないと言うので・・・。遥は人気者だから、そのお兄さんにも是非あってみたいって。」真樹ちゃんの返答に私は、胸の中で賞賛する、なるほど、勉強会って言っとけば良かったのだ。さすが真樹ちゃん、頭がいい！でも、私が人気者っていうのは少し違うと思うけど・・・。
「そうですか・・・。」兄が小さく頷いた。
そしてリビングとダイニングキッチンに繋がる扉が開かれた。

19話

「こんにちは、お邪魔しています。」
「どうもー、お邪魔してます。」と兄がリビングに入った途端、二人の声が響いた。
「・・・」おずおずとリビングに入って兄の横に並ぶと私は説明する。
「えっと、こちらが、沢田先輩と、秋本さんです。二人とも同じ大学の友人・・です。」
兄は一応営業スマイルを浮かべたまま、二人を凝視している。怖い・・・こういう時の兄は猛烈に何かを考えている事が多い。
「・・・そうですか。いつも遥がお世話になっています。」
「あ、あのっ！立ち話も何ですからどうぞおすわりになって下さい。」真樹ちゃんがフォローを入れると兄が、真樹ちゃんに持っていた紙袋を手渡す。どうやらこちらにくる前に何か買って来たらしい。
「つまらないものですが・・」などとやり取りしている。

「あの、皆さん、コーヒーと紅茶、どちらが良いですか？」
「・・今日は出先で何杯もコーヒーを飲んだので紅茶にしてもらえますか？」お兄ちゃんがここぞとばかりに営業スマイルを振りまく。少し真樹ちゃんの頬が赤く染まった。流石だ・・・。
「じゃ、俺も紅茶で。」と先輩が続く。
「忍さん、手伝いますよ。」そういって、本物の忍さんが立ち上がって真樹ちゃんと一緒にダイニングキッチンへと向かう。なんかお似合いだ。
残された3人の間にはなんとはなしに気まずい雰囲気が漂っている。何か喋らないと・・と思っていると、じっと兄を見ていた先輩がぽそっと呟いた。

「遥ちゃんと、お兄さんってあんまり似てないんですね。」初めて兄と私を見た人には大抵同じ事を言われる。お兄さんは格好いいのに妹さんは・・といった感じなのだろう。先輩はそう言う意味で言ったのではないと思うが興味深そうに私たちを見ている。
「遥は母親似で俺は父親似だからな・・・。」
「そんな事無いよ。私はどちらかというとあまり両親に似てなくてお兄ちゃんこそ、お母さんに良く似てるって、昔から言われてて・・・。」
「??お前は、母さん似だと思うが・・、まあいい。それより遥、お前俺に何か隠している事があるだろう?」
いきなりの爆弾発言に私は固まる。私は引きつった笑顔を浮かべつつ答える。
「え・・なんで?」

そのとき真樹ちゃんと忍さんが二人で紅茶と私が昨日焼いておいたシフォンケーキを持って来た。先ほどの兄の台詞を聞いていたのだろう、二人とも微妙に顔が引きつっている。
爆弾発言をした兄はと言えば、ホイップクリームの添えられたシフォンケーキを一口食べると、にっと笑って「遥のシフォンケーキは久しぶりだな・・」と呟いた。
話題をそらすように、真樹ちゃんがお兄ちゃんに質問する。
「あの、、お兄さんは一体どんなお仕事をされているんですか?」
「●●商事で営業をしています。」
「うわあ、それって有名な会社ですよね。お兄さんエリートなんですね。」
行った事はないが、話に聞く合コンとはこういうものかと言う雰囲気で話が進む。意外に先輩と忍さんは大人しく時々会話に参加しつつ、お茶を飲んでいる。
私はといえば、先ほどの兄の発言にまだドキドキしていた。何故か

昔から兄の前では嘘がつけず、、というかすべて見破られて来た過去を持つ私である。今回は真樹ちゃんたちの協力もあってうまくごまかしたつもりだったのだが、何かばれる様なことをしでかしただろうかと頭の中で猛烈に考えていた。
「遥・・はるか？」考えすぎて気もそぞろになっていた所、兄の叱りつける様な声にはっとして顔を上げる。呆れたような兄の顔と面白そうにこちらを伺う先輩、そして心配そうな真樹ちゃんと忍さんの顔が見える。
ええっと・・・何の話をしていたんだろう・・・・汗）
「お前は昔から・・・何か隠しごとがあるときや嘘をついている時は気がそぞろになる癖がある。お前はすぐに顔にでるからな。今回はさしずめ同居人の事か？」そういって兄は並んで座る真樹ちゃんと忍さんの方を見てにやっと笑った。

「な、なんでわかったの？」とつい口からぽろっと出てしまう。真樹ちゃんがあちゃーといった様子で頭を抱えた。
「何年お前の兄をやってきたと思っている？まあ、母さんからお前の様子を聞いて、何か隠しているだろうとは思ってたが・・お前の考えそうな事はすぐ分かる。それにぽろぽろとボロを出していたしな。まあ確信をもったのはこの家にはいってからだったが・・・。」そういって兄はじっと忍さんを見つめて言った。「君が遥のルームメイトだね、忍君？」
忍さんは妖艶な微笑を浮かべたまま、答える。
「本当に・・遥ちゃんじゃないですけど、何故わかったんですか？」

兄はやれやれといった感じで一口紅茶を口に含むと話しだした。
「先ほども言った通り、遥と母が電話で話をしていた時に丁度実家にいてね、遥の話す様子に少し違和感を感じたのが初めだった。うちの母は、仕事しながら電話を取るからよく、スピーカーフォンにする事が多くてよく聞こえるんだよ。

それから、今日、遥が迎えに来た時に持って来てくれた傘。ちゃんとした男物の傘だったが、遥が買ったにしてはあり得ない値段だ。あれは●●のブランド物だっただろう？わざわざ男物の、それも貧乏性の遥が買える品物ではない。

マンションの入り口で、靴を見たとき、客人の数にしては男物の靴が多かったし・・・大体最初にお前のルームメイトはクゥオーターだと聞いていただろう？この中でいかにもそれらしいのは彼だからな。彼女は、美人だがやはり日本人だろう？」

兄の説明を聞いて私は大きなため息をついた。確かにそう言われてみれば、すべて兄の言う通りだ。きっとこれだけでなく他にも色々とボロを出していたんだろう。私はおそるおそる兄の次の言葉を待った。

２０話

「まあ・・・お前の考えていることは分からなくもないが、一応聞いておこう。何故俺を騙そうとした、遥？」
あああ・・・魔王降臨です。やばいです。お兄ちゃんが端正な顔にこうして笑みを浮かべている時はヤバいんです。
「う・・えっと・・それは・・・」
しどろもどろになった私をカバーしようと忍さんと真樹ちゃんが間に入ろうとしたが、視線だけで黙らされてしまった。流石、魔王。とりあえず余計な事を言う前に謝った方が勝ちだ！
「ご、ごめんなさい！お兄ちゃん。最初は、その・・私も忍さんが男性だとは知らなくて・・その出て行こうかとも思ったんだけど、家賃も安くてここより良い物件なんてないし、アトリエも自由に使わせてもらってるし、食事代も半分出してくれてるし・・・。まだバイトも見つかってないから助かると言うか・・・」とだんだん話すものの声が小さくなって行く。其処で思わぬ所から助けが入った。
「油絵とかが出来る広いスペースとアトリエがある住宅なんて普通のとこじゃぜったい見つからないですよ？ほんと、遥ちゃん、羨ましい。俺も半分スペース貸して欲しいぐらいだし。油の独特の匂い、嫌がる人も多いからなあ。」先輩が力説してくれる。このときほど、先輩の事をありがたく思った事はない。これからもう少し態度を軟化することにしますからね、先輩！デート云々は別ですが・・・。

「つまり・・お前は俺に反対されると思ってた訳だな？遥。」
「う・・うん。」
「お前が俺に隠し事するなんぞ１００年早いが、かといって遥たちの言う通り、確かにこんな条件の良い物件は他にはないだろう。知り合いのよしみで安く貸してもらっている事もあるからな・・。」
「え？じゃあ・・・」

「それは、それとして、忍君。」私の問いかけを無視したまま、お兄ちゃんは忍さんへと向き直った。
「君は、どう考えているのかな？知っていたんだよね、君は・・遥がルームメイトになる事を。」今度は兄の攻撃が忍さんにバトンタッチする。
「そうですね。叔母から聞いてはいました。欧米では別に良くある事ですし、、まあ少し不安はありましたが、遥さん本人にあ逢って、彼女となら問題なく一緒に暮らして行けると思ったものですから・・出て行こうとした彼女を俺が引き止めたんです。」忍さんはお兄ちゃんの目を見据えたままゆっくりと答える。

「ふん・・・。つまり、俺が考える様な事は起こりえないと断言する訳かな？」
「・・・・。遥さんは、俺にとって大切な存在ですから・・・・・。」二人の間にぴりぴりとした緊張感が走る。しばらく忍さんの目を直視していた兄だったが、ふーっとため息をつくと、言った。
「まあ、しばらくは執行猶予と言った所か・・・。」
「お兄ちゃん？」
「とりあえずは親父達には言わないでおいてやるよ。俺よりも親父の方が絶対にうるさいからな。（お前は家族に溺愛されてることに気付いてないかもしれないが・・）今まで通り、ここに置いてもらえ。ただし、学生の本分は勉学だと言う事を忘れるなよ。」

「は、はい！」なんだかよくわからないが許してもらえた？ようだった。真樹ちゃん達からもほっとした空気が伝わってくる。
その後、少しの間、また話をした後、兄が帰るというので送って行こうと思ったのだが、思いもかけず、何故か忍さんが兄を駅まで見送る事となった。
「それじゃあ、遥またな？皆さんに迷惑をかけるんじゃないぞ？」
「わかってるよ、もう、子供じゃないんだから！」

頬を膨らます遥を見て、だからまだ子供だというのだと思ったが口には出さない。
「皆さんも、遥の茶番に付き合わせて申し訳無かったね。これからもこの子の事、よろしく頼みます。」そういって頭を下げ、傘を持った忍さんと一緒に帰って行った。

＊＊＊

「遥とお兄さんってホントに似てないんだね。」
玄関でぽつっと真樹ちゃんが言った。
「どうせお兄ちゃんと私は全然似てないよ。お兄ちゃんはかっこいいし、私は・・」
「違うって。外見の事じゃなくて、中身の話。あーうちもあんなくそ弟じゃなくて遥みたいな可愛い妹か、あんなお兄さんが欲しかったなあ。マジで大人の雰囲気だよね。」
「まあ、そりゃぁ社会人だし・・・。学生の私たちとは違うと思うけど・・。」
「そうかな？俺は結構あのお兄さんと遥ちゃんて似てると思ったけど・・・？」そう沢田先輩が口を挟む。
「「え？どこが？」」自分で言っときながら真樹ちゃんとはもって少し落ち込む。
「ん～？頑固で融通きかなさそうなところとかさ～。まあ、あのお兄さんよっぽど遥ちゃんのこと大事なんだね。きっと今頃、あいつも釘さされてんじゃないの・・？」
「？？」
よくわからないが、確かにお兄ちゃんが帰り、忍さんを指名して出て行ったのは不思議だった。何か言われているんだろうか・・・。考え込む様子の私を見て、リビングに戻りつつ、先輩と真樹ちゃんが「遥ちゃんって、ホント天然の箱入りだね」と話し合っていた事は私の耳に入って来なかった。
それから暫くの間、忍さんが帰ってくるまで、私たちはアトリエで

美術談義に花を咲かせていたのだった。
「いや、ほんとにこのアトリエいいなあ。俺はまだ実家で納屋を使わせてもらってるから、かなり大きな作品とかもつくれるけど、普通じゃあ、こうはいかないからね。
俺さ・・・実は遥ちゃんの作品、一度だけ見た事があったんだよね。」
何気ない先輩の一言にびっくりして私は彼をまじまじと見つめた。
私の作品を見た事があるって、大学にはいってからの事を言っているのだろうか、それとも・・？

21話

「私の作品って・・・どのことですか？」
「遥ちゃんが高校生んときにだした奴、ほら、ＤＡＳのコンペに出したでしょ？俺の親父、あれの審査員やってたんだよね。俺もコネで興味半分一緒についてった日があって、そこで遥ちゃんの作品みたんだ。なんだか其処だけ惹き付けられる様な魅力を持った絵だったからな。
家の親父も感心してたし。先が楽しみだって。」

「え？あれ、見てたんですか・・・恥ずかしい・・それに先輩のお父さんってもしかして沢田・・隆司先生・・？」
「うん、そうだけど・・ってあれ、知らなかったっけ？」
「知りませんでした・・・。日本画家の大家ですよね？」
「まあ・・な。それより最近描いたものってないの？課題以外でさ。」
「いえ、まだ色々と忙しかったものでペイントは始めてないんです。デッサンは幾つか描いたんですが・・・。」
「ふうん、そうなんだ。見せてもらっても良い？」
「どうぞ・・その机の上にあるのがそうです。」
しばらく無言で私のデッサンを眺めていた先輩だったが、そのいつものおちゃらけた感じとは違う真剣な様子に驚いてしまう。思えば大学に入ってすぐから先輩は異様に年下のそれも接点のないはずの私にかまってきていたが、自分の作品を通して知られているなどとは思いもよらなかった。それにしてもなんだろう。すごくどきどきする。

暫くデッサンとスケッチを見た後、先輩が顔を上げた。
「正直、まだまだ未熟な点が多いよね。でも遥ちゃんの絵には独特

で不思議な魅力が溢れている。これからどんどんその魅力が引き出されるのが楽しみだよ。」
「はあ、魅力ですか・・。」確かに先輩の言う通り、私はまだまだ未熟だ。とはいえ、やっと念願の美大に入ったばかりなのだ、これからゆっくりと色々な事を学んでいけばよい。自分が井の中の蛙だと言う事を忘れてはならない。本当に美大に入って思った事だが、それこそ、先輩のようにうらやむぐらいの才能にあふれた人達が少なくない。それでも絵を描いて行きて行けるのはその中から、またほんの一握りなのだ。
「ありがとうございます、先輩。私頑張りますね！」
「忍さん、帰って来たよ？」居間でテレビを見ていた真樹ちゃんの声が響いた。「はーい」そういってリビングへ向かった遥の後ろ姿をしばらく見つめていたが、スケッチブックを閉じると俺は立ち上がってリビングへと向かう。アトリエに繋がる遥ちゃんの部屋は恐ろしいほどすっきりと片付いている。というかぶっちゃけ物がないのだ。もう少し女の子の部屋というものに憧れを抱いていたのだが、正直、こちらがあの男の部屋かと思ったぐらいだ。
人は見かけによらないなと感じたのはきっと奴も同じだろう。

＊＊＊
時間を少し遡る事、２０分前、俺は遥のお兄さんの「要望」でありがたくも？彼を駅まで送って行く事となった。断るなよ？ともいうような目で睨まれたらもちろん行くしかない。
遥の方も少し不思議に思ったらしいが、深く追求せずに笑って送り出してくれた。あり得ないだろう・・普通。やはりちょっとどこかねじがずれているっぽい。
部屋を一歩でると、先ほどまでと同じ人物とは思えないほど浮かべていた営業スマイルが消えていて、やはりついて来た事を後悔する。
こいつ、きっとこれが本性なんだろう。兄妹とはいえ余りにも似て

なさ過ぎだ。駅に着くまでの7分間は1時間以上に長く感じられた。思っていたよりもかなり手強い兄だ。
絶えず微笑んでは居るが目が完璧に笑っていない。
「と、いうわけで、忍くん、これからもうちの遥を「宜しく」頼むよ？」
「はい。」俺は負けじと微笑みながら、用意していた物を手渡した。
「これは？」
「妹さんから好きだと聞いていたので、ここまで挨拶に来てくれたお礼です。」
訝しげに紙袋の中を確認した兄の表情が変わる。「これは・・・どういうつもりかな？」
「別にどうってわけじゃないです。俺、モデルの仕事してるんで、案外安くで手に入るんですよ。お近づきにと思って。これと遥さんの事は別件なので遠慮せずに貰って下さい。後、その傘も、そのまま使って下さい。どうせ今日は雨止まないと思いますよ。」
「・・・。男に物をもらうのは始めてだな・・」
「俺も男に上げるのは始めてですよ。」目を合わせてにやりと笑う。１８０以上ある俺の目線とそう変わらない、この男ならたしかにこの服も嫌み無く着こなすだろうと思う。
「・・遥に時間ができたらまた様子を見にくると伝えておいてくれ。」
「お待ちしてますよ。お兄さん・・・。」
少しいい気分で帰りかけようとした俺の耳に彼の最後の言葉が届く。
「それと、首筋のそれ、今度くるときまでに始末つけとけよ？」含み笑いを漏らしながら、兄がひらひらと手を振って改札を通り抜けた。
あわてて、首筋に手をやる。自分が痕ををつけることがあっても、まさか自分が付けられているとは思ってはなかった。くそ、あの馬鹿女・・・
だがまあ、とりあえずは良かった・・と言うべきか。ばれたにも関

わらずしばらくは様子見だとあの男はいった。俺は首筋を撫でながらため息をつくとマンションに向かって歩き始めた。

22話

先輩と忍さんは、仲が良いのか悪いのかいまいちよくわからない。一応先輩なのでそれなりに敬語を使って話しているかと思えば、ゲームの事などで子供みたいな喧嘩を繰り広げたりもする。出会ってからまだそんなに日は立ってないのだが、最初に二人が逢った頃よりは随分と打ち解けているようにも見えるのだが・・・。

「よう、お帰り。」

「ああ」

「その顔じゃしっかりおにーさんに釘指されたな。」クスクスと先輩が笑う。

「うるせーよ。お前も同じ穴のムジナだろーがっ」ちょっと悔しそうに忍さんが答えた。

「俺は別に何も言われてないけど～。」何故だか今日の二人はとても子供っぽく見える。久しぶりに兄を見たからかもしれないが・・。

「釘って、お兄ちゃんなんか言ったんですか？」私が聞くと、忍さんは更に苦い顔をしたまま、「何でも無い。気にするな。」とだけいってそっぽを向いてしまった。本当にお兄ちゃん、何か失礼な事でも言ったのだろうか・・。

「まあまあ、とりあえず遥もここを出て行かずにすんだんだから、何かお祝いしましょうよ！」と真樹ちゃんが提案してくる。やはり真樹ちゃんはムードメーカーだ。

私は真樹ちゃんに賛同する。「うん、じゃあ、みんなで牛丼でも食べに行く？！」

「「「牛丼・・・」」」何故かげんなりしたような三人の声が重なった。

「え？だめ？」

「いや、駄目ってことはないけど・・・このメンバーで牛丼・・。」

真樹ちゃんが口ごもる。このメンバーでって何か問題があるのだろうか。
「あのさ、俺の知ってるとこで美味いラーメン屋あるけどそこ行かない？」
引きつった顔の真樹ちゃんを余所に先輩が言う。
「あーラーメンもいいですね～。」「俺も別にかまわねーよ。」と忍さん。真樹ちゃんは少し嫌そうな顔をしていたが、もうどうでもいいやといった感じで最後は納得した様子で、４人揃ってラーメンを食べに行った。先輩お勧めのラーメン屋さんは値段も安くてとてもおいしかった。

＊＊＊
それからしばらくして、校内で、忍さんに本命ができたらしいとの噂が広まった。なんでも
今まで付き合っていた不特定多数の女性達とすべてお別れしたらしい。と、講堂で噂になっていた。
「へえ、忍さんの本命さんって一体誰なんでしょうね？モデルさんとか綺麗な人かな？」
「遥・・・あんた、いや、いいわ。あんたはそれで・・・。」真樹ちゃんが不思議な表情で私を見て一人で頷いて納得している。
「？？」
「ふうん・・あいつもそろそろ本気になってきたってことか。」いきなり後ろから声がかけられ、ぎょっとして私と真樹ちゃんが振り向くとそこには沢田先輩が立っていた。
「お、驚かさないでくださいよ、先輩！本当に心臓に悪い・・・。」
「というか、いつも神出鬼没ですね、先輩は・・。で、こんなところでまた何をしてるんですか？」と真樹ちゃんが冷たくあしらう。
「ん？そりゃあ、可愛い後輩達の様子を見に来たに決まってるじゃないか。まあそれと、遥ちゃんにデートのお誘いを。」そういうと沢田先輩は優雅にお辞儀する。

「へ？」私のその時の顔はよっぽどひょうきんだったに違いない。先輩がクスクスと笑い声を上げる。横をみると、真樹ちゃんも笑っている。
「からかったんですか？先輩！」
「いや、違うって・・あまりにも遥ちゃん可愛いからさ。それに、これ・・興味ない？」そういって先輩がポケットから取り出したのは2枚の絵画展のチケットだった。
「今都内に来てるんだ。親父のツテで貰ったんだけど、良かったら今週末にでも一緒に行かないかと思って。」確かにそのチケットはできることなら私が見に行きたいと思っていた絵画展のチケットだった。すこし値段が高くて躊躇していたのだが、タダで見れるのなら有り難い。

「それ、本当にもらって良いんですか？」
「遥ちゃんが、一緒に行ってくれるならね・・。」
「先輩・・・。私の目の前で遥くどくなんて良い度胸してますよね。」じとっと真樹ちゃんが先輩を睨みつける。
「はは、勘弁してよ、真樹ちゃん。というか、真樹ちゃんにもちゃんと用意してるよ、ほら」といって何かを真樹ちゃんの手に握らせた。
「これは！・・・ってか、なんで先輩私がファンだって知ってるんですか？」
「ん？内緒。」
「ま・・仕方ないですね。じゃあ、遥くれぐれも隙を見せないようにね、楽しんでいっといで～！」そういって真樹ちゃんは鼻歌を歌いながら去って行った。

「先輩、真樹ちゃんに何を渡したんですか？」
「ん？今流行のインディーズバンドのライブチケット。なかなか入手できないらしいよ。」

目が点になる。真樹ちゃん・・・・・T_T
とにかく、こうして私と先輩は週末に美術館デートをする事となった。

＊＊＊
その晩、いつも通り、家へ帰り夕飯の支度をしていると忍さんが帰って来た。
「あ、お帰りなさい！今日は早かったんですね。夕飯、もう少しまっててください。」
と声をかけると、珍しく、キッチンまでやってきた。
「遥ちゃん、あいつと土曜日にデートするって聞いたけど本当なの？」
「へ？え・・なんで忍さんが知ってるんですか？」
その言葉を聞くや否や先輩からいかにも不機嫌なオーラが漂いだした。うわっ、機嫌悪そう・・てかなんで？
「あの・・・忍・・さん？」
「・・・俺も行く。遥の事は柾樹さんからも「宜しく」頼まれてるから。」
今遥って呼び捨てにした？それにお兄ちゃんの事も柾樹さんって・・名前で呼び合うぐらい親しくなったのだろうか？
「今遥って・・」
「ああ、遥ちゃんより呼びやすいし、かまわないだろ？」
「ええ、別にかまわないですけど、でもチケットはどうするんですか？」
「その辺は心配しないで。俺も手伝うからさっさと飯喰おうぜ。」
先ほどの不機嫌さから、また一気に機嫌がよくなった忍さんを不思議に思いながらその日が終わったのだった。

23話

何故こんな状態に陥っているのだろうか・・今私は、右側を忍さん、左側を先輩に挟まれ、両手を繋がれたまま街道を歩いている。言わず物がなこの二人に挟まれている私は大いに回りの視線の注目となっている。

しかし・・だ！私はもう子供ではないというのに、何故か二人とも握っている私の手を離そうとしない。やはりあれがまずかったのだ・・・。

遡る事約1時間前、まず支度をしてでて来た私を忍さんが一瞥して言った。

「今日は俺の買ってあげた服を着てよ。」

「え？これじゃ駄目ですか？」今日はお出かけ用に一応いつもよりまともな洋服を選んだつもりだったのだが・・。

「確かにいつもよりマシ・・いや、なんでもない。ともかくせっかくなんだし、俺のあげた洋服着ていってよ。」

「はあ・・・。でもあの洋服だと例の靴も一緒ですよね～。私、ヒールって慣れてないから疲れちゃうんですよ。」

「じゃあ、靴だけヒール無しにしたら？黒っぽいのもってただろ？」って、よく見てんな・・・おい。結局着替えさせられて、待ち合わせの駅まで行ったのは良いが、人が多くて迷子になったら探すのが大変だからといって、またまた手を繋いだまま連れて行かれた。待ち合わせ場所で待っていた先輩もものすごく機嫌悪いし、なんか真樹ちゃんの裏切り者とか何とかぶつぶつ呟いていたが、その後、今の状況にあると言う事だ。

はっきり言ってやたらと目立つし、歩きにくいし、暑苦しいし・・と思っているのだが、どうにかならないだろうか。

そしてやって来たのはルーブル美術展だった。中世の有名な画家達

の作品が一同に集まるこの美術展には機体と思っていたのだが、一般でもやたらと人気が高く、チケットの値段は学生料金で１５００円程度とはいえ、普段切り詰めて生活している自分には少し高く感じたのは事実だった。
「結構混んでますね。」
「遥ちゃんが一番興味を持ってる絵画はどれなの？」
「う～ん、難しいですね。フェルメールはもちろん、フランス・ハルスにも興味ありますしルーベンスの作品も来てるんですよね～？」
「とりあえず端から見て行けば？」私の後ろに立っていた忍さんが提案する。
「まあ、それが妥当だろうな。」
ということで、私たちは時計回りに絵画を見て行く事になった。私は１７世紀頃に描かれた巨匠達の作品の細部を少しでも見逃すまいと集中する。こうなると周りの雑音は一切耳に入って来ない。そう、先輩達の会話ですら全て・・・

「すごい集中の仕方だな。いつもあんな感じなのか？」
「大抵アトリエに籠ってる時はあんなだな。呼んでも気がつかない事が多い。」
「ふうん。つーかさ、お前。なんで俺と遥ちゃんのデート邪魔してくれちゃってる訳？」
「まあ、色々と・・面倒見るように頼まれているからな。」
「か～！白々しい奴！大体なんだよ、見せつけるように手なんか繋いでやがってよ。」
「羨ましいか？」
「おまっ、確信犯か？いよいよもって嫌な奴だな。」
「別に・・・。先輩こそ真樹さんにチケット掴ませたり、裏でこそこそやってたんじゃないんですか？」
「まったく、真樹ちゃん・・・俺が必死こいてチケット手に入れたってのに・・こんな奴にリークするなんて・・・。」

「彼女は中立だと言ってましたからね。」
「で、お前いつまで俺たちについてくるつもりなんだ？この後はレストランにいくんだからお前帰れよな。」
「冗談でしょ？それにしても、先輩は遥の事本気なんですか？俺がいうのも何ですけど、先輩の噂は色々と聞いてますからねぇ・・。」
「マジでお前が言うなって感じだけどな。お前も最近女の整理に忙しいんじゃないのか？」
「・・・。」忍の脳裏に遥の兄の言葉が甦る。今度あうまでには・・・。
「ふん、まあ良いけどな。」

暫くたつと、感動のため息？をつきつつ、遥が戻って来た。
「すごい！もう感動ものですね。本当に1日中居たいぐらいです。というか、先輩達はもう見回られたんですか？」
「え？あ、ああ。」
「そうなんですか？早いですね。じゃあ忍さんも？」
「ああ、遥はもういいのか？」
「はい。十分に堪能させてもらいました。先輩、本当にありがとうございます！」
遥に極上の笑顔を向けられ、沢田はにやっと勝ち誇ったように笑う。
「全然オッケーだよ。それよりも遥ちゃん、お腹空かない？この先にあるレストランのランチメニューすごく美味いんだよ。デザートまでついてるし。」
「へえ、そうなんですか。確かに歩き回ってお腹空いたかも・・。忍さんも行きますか？」
「もちろん」先輩が舌打ちしたのが聞こえたがまったく気にせずに遥に微笑みかける。

少し先輩には悪いかなとは思ったが、二人きりになると、デート・・というものを体験した事のない自分は緊張してしまう。半分は冗談

だと分かっているが、つい自意識過剰？に反応してしまう気がして落ち着かないのだ。その点、忍さんは本命さんがいるらしいし、今回何故一緒について来てくれたのかは分からないが、ルームメイトだけあって、気心も知れている。保護者、もといお兄ちゃんについて来てもらってるみたいで安心するのだ。

これで、真樹ちゃんも来てくれてたら楽しかったのにな。と思いつつ、今度は注目される手つなぎを断固拒否して二人の後をついていく。

やはりこの二人は目立つのだ。あからさまに振り返って行く人も居るぐらい。少し居心地の悪さを感じながら私たちはレストランに入って行った。

24話

レストランの中に入るとこれまた周りからの視線をひしひしと感じる。案内されたのは、窓際の席で、これだと、外からも、中からも注目されてしまう。店内からはこれ見よがしに、「なんであんな子が・・」と言う声まで耳に届くのだからやりきれない。
私は二人に気付かれないように小さくため息を漏らすと外に目を向けた。しばらく外を眺めていると、不意に一人の人物と目が合う。
（うわあ・・外人さんだ～。綺麗な人だなあ。今日見て来た絵画にでてくる美女みたい。ていうか、なんでこっちをじっと見てるんだろう。）
と考えているうちに、その外人さんは大股にこちらに向かって歩いてくる。どんっと音がして、その彼女が私たちの座っていたテーブルの窓の外から叩いた。その音で、吃驚したように二人が振り向いた。

次の瞬間、傍目にもわかるぐらい忍さんの顔から血の気が引いた。そして呟かれる声。「嘘だろ・・・？」
窓の外の美女は獲物を見つけた猟師のように唇の端をにっとつり上げると、窓から離れ、店の中へと入ってきて、店員さんの止める間もなく、私たちのテーブルまでやって来た。

「見つけたわよ、忍！」意外にもお綺麗な外人さんの口からは流暢な日本語が流れ出た。
「・・・なんでお前がここに居るんだ、ゾフィー。」
「ここで逢ったのはたまたまよ。というか、まさかこんな所で逢えるなんてそれこそ神の導きね。丁度あなたに電話するところだったのよ、忍。」

私と先輩はいきなり現れた美人の外人さんに吃驚しながらも、頭の中では冷静に、なるほど、忍さんの知り合いかというカテゴリーを埋めて行く。
「おい、目立ってるぞ、どうにかならんのか？」先輩がおずおずと二人に声をかけた。
忍さんが気がついたように私たちに視線を戻す。
「すまない。ちょっと出てくる・・。」そういって立ち上がった忍さんを美女が面白そうに引き止める。
「あら、いいわよ別にここでも。忍のお友達？私、彼の婚約者のゾフィー・シュタイナーよ。よろしくね。」

「おい！ゾフィー・・お前と婚約した覚えは一切ないぞ。」
「あら、約束したじゃない。あれは6歳のときだったかしら・・・？」
「いつの話だ！それより俺は何故お前が日本にいるのかと聞いてるんだ。」
「まったく・・そんなに怒鳴らなくても聞こえてるわよ。とりあえず座らせてちょうだい。あなた、隣いいかしら？」
「はぁ・・・どうぞ。」私はとりあえず頷いて横にずれると彼女がとすっと椅子に座った。近くで見ると本当に綺麗だ。美しい栗色の巻き毛にくっきりとした眉と長い睫毛に縁取られた緑の瞳。通った鼻筋とふっくらとした唇は女性の私でもどきっとする。
「ありがとう。で、なんでそんなに怒ってる訳？忍」

「お前が人の話を聞かないからだろう。」
「あら、そんなことないわよ。大体幼い頃から忍のお嫁さんになる為に日本語にいそしんで来た私の努力を認めて欲しいものね。」
「話をすり替えるな。どうして日本に居るのか聞いてるんだ。」
「あなたが日本の大学に進学したから私も追いかけて来たのよ。次のセメスターから留学するのよ。で、一応留学前に視察に来たつい

でにあなたを驚かせてあげようと思って、おじさまに連絡して住所を聞いたんだけど、まさかこんな所で逢うとは思わなかったわ。」

「お待たせ致しました。あの、Ａ－コースのお客様は・・」とそこで、料理が運ばれて来た。私が頼んだのは夏野菜を使ったリゾットのコースだ。忍さんの婚約者？らしいゾフィーさんが料理を覗き込んで言った。

「あら、それおいしそうね。私も同じのを頼もうかしら？」と誰に聞くのでもなく、ウェイトレスに注文をする。先輩は呆れた様子で、忍さんとゾフィーを見ながらため息をついた。

「おい、いったいどうなんってんだ？痴話喧嘩なら俺たちの邪魔をせず余所でしろよ。」

「あら、あなた達お付き合いしてるの？なかなかお似合いね。それなのに何故忍が邪魔をしちゃってるわけ？」と今度は彼女がちゃちゃを入れる。忍さんの額に青筋が走ったように見えたのは気のせいかもしれないが、ものすごく不機嫌そうだ。

私は彼女の言葉に咄嗟に否定する。「ええ？いや、付き合ってないですよ。二人とも良いお友達です。」あからさまに男二人の表情が変化した事に気がつかず私は墓穴を掘って行く。

「ふうん？お友達・・・ねえ。」二人の表情を見ていたゾフィーが興味深そうに呟いた。

「はい。えっと、ゾフィーさん？は忍さんを追って日本にやってきたんですか？というか、すごく日本語がお上手なんですね。すごい吃驚しました。」

「ふふ、そう？ありがとう。私と忍は幼馴染みで、彼の家とは家族ぐるみの付き合いをしてきたのよ。それで、忍と一緒に幼い頃から日本語を習っていたから。」

「へえ、そうなんですか。」

男二人は諦めたように黙って目前のランチを食べている。私も彼女と話ながら、ゆっくりとランチを楽しみだした。

彼女の話をまとめると、もともと、日本語に幼い頃から親しんで来た彼女は忍さんが日本の大学へ進学すると聞くやいなや、自分の両親を説き伏せ、忍さんを驚かせる為に内緒で留学の手続きをしていたらしい。二人の間には他にも色々な事情がありそうだが、あまりにも男二人が不機嫌になっていったため、せっかくのコース料理もあまりおいしく食べる事が出来なかった。あ、でもデザートの紅茶のアイスクリームはとてもおいしかったが・・。

25話

不機嫌な男二人と連れ立って私たちは昼食後レストランの近くにある某有名ホテルの一室へとやって来た。ゾフィーさんは、昨晩日本について、このホテルで1泊したらしい。げんなりした顔で、窓辺のテーブルに肘をついたまま、忍さんが口を開いた。

「それで、お前はこれからどうするつもりだったんだ？」

「本当はお昼食べてから忍のところに押し掛けようと思ってたんだけど、とりあえず本人に会えた事だし、どうしようかしら・・」ニンマリとゾフィーが微笑を浮かべた。

はっきりいって私と先輩は昼食後、訳あり？っぽい忍さんとゾフィーと別れようかとも思っていたのだが、何故かゾフィーは忍さんではなく、私を強引をホテルまで連れ込み？結局仕方なしに先輩も後をついて来たと言う訳だ。まあずっとレストランにいても、周りから好奇の目でさらされるだけなので人目の無いホテルの一室へと移動したのは良かったのかもしれないが。

だが、ほとんど部外者である先輩と私は手持ち無沙汰にきょろきょろしてしまう。

このホテルは外観を見ただけでも結構高そうだと判断したが、室内もそれなりに調度品などすごく整った感じだ。ゾフィーさんはお金持ちなのだろうか。

キングベットも大きくてふかふかしている。

「ねえ、あなた、遥って言ったわよね。呼び捨てでかまわないかしら？」

初対面の人にあまり名前を呼び捨てにされた事は無いが、外国人だし、そういうものなのかと思って頷く。

「はい。別にかまいませんけど。」

そういうと嬉しそうにゾフィーが私の手を握りしめた。「じゃあ、私の事は、ゾフィーって呼んでね。あなたとはいい「お友達」になれそうだわ。」

「おい、ゾフィー。いい加減にしろ、大体遥をこんなところまで連れ込んで一体何を考えているんだ？」

そういえば確かにそうだ。レストランを出た後、すぐに別れようと思ったのだが、彼女が私の手を掴んだまま離さず、色々な理由をつけつつ、ここまで来てしまったが、彼女が用があるのは忍さんだったはず、何故私がここに連れて来られたのかわからない。

「そうだ、ゾフィーとやら。まったくもって忍と良く似てやがる。人の話を聞かない所も、図々しく俺と遥ちゃんの間に割り込む所も、一体何様だ！」

沢田先輩も少し怒ったようにゾフィーを睨みつけた。

ゾフィーは軽く肩をすくめると爆弾発言を落とす。

「あら、私が知らないとでも思ってたの？忍、あなた今遥と同棲中なんですってね？ちゃんとこっちにくる前におじさまに聞いたのよ。あなたが女の子と暮らしているって聞いてホント吃驚したわ。どんな女と付き合っていても幼馴染みの私以外、一切家には近づけさせなかったあなたがね・・・一体どんな女と暮らしているのか私が興味を持つのも当たり前でしょう？でも、今日本当に偶然町中であなた達を見かけて最初は確信がなかったのよね。遥ってあなたが今まで付き合って来た子達とタイプが全然違うし、でもまじかでよく見てわかったわ、彼女ってユリアに・・」

「ゾフィー！」

そこまで言いかけた所で怒気をはらんだ忍さんの声がゾフィーのそれを遮った。

私と先輩は吃驚して忍さんをみすくえた。

「ごめんなさい・・。」ゾフィーが小さくなって忍さんに謝った。

今、最後にユリアと聞こえたが女性の名前だろう。一体何故彼がこ

んなに怒っているのか、しかも以前、家まで押し掛けて来た元彼女を追い返したときよりも数段怒気をはらんだ雰囲気だ。

「いや・・すまない。大きな声を出してしまって。」忍さんははっとしたように私たちに言った。だがその表情はなんだか寂しそうだ。そのユリアと言う女性と何かあったのだろうか？もしかしたらその人が彼の本命の彼女と言う奴なのだろうか・・と頭の中で色々と考えてみるものの、これ以上突っ込める雰囲気ではないし、というかその場がかなり微妙な雰囲気になっている。

「あの・・私そろそろ、帰りますね。今日仕上げたい絵もありますし。」と私は逃げる方向でおずおずと切り出した。

「ああ、すまないが、沢田先輩、遥を家まで送って行ってあげて下さい。俺は・・、まだゾフィーと話す事があるので。」

有無を言わせぬ忍さんの言葉に先輩は黙って頷くと、私たちは彼らを置いてホテルの一室を出た。あの状況のまま、二人を置いておくのも少し気が引けたが、もともと彼ら達が話す内容は私たちには関係のない・・・いや、知らない方が良い事もあるだろう。

帰り際、先輩と並んで歩きながら私はぽつりと今日の出来事を振り返る。なんだか慌ただしい1日となってしまった。

「なんか、びっくりしましたね。」私がそういうと、先輩が言葉を返す。

「まあ、そうだな。巻き込まれたというか、なんというか。しかし・・付き合いだしてそう長い訳ではないが、あんな余裕のない奴の顔は始めて見たな・・・。」

「忍さん、すごく怒ってたけど、なんだか寂しそうでしたね。」

「そうだな・・。」

いきなり現れたゾフィーという存在に戸惑ったものの、不思議といやな感じはしなかった。ただ、これから彼女の存在に色々と翻弄されて行く事になる事をこの時の遥は知る吉もなかった。

26話

その夜、夕飯の用意はしてラップに包み、11時半頃に就寝したが、それまで忍さんが家に戻ってくる事はなかった。

次の日、いつも通り朝起きると眠い目をこすりつつ、コーヒーを点てる。そういえば、昨日忍さんは帰って来たのだろうか。こぽこぽと蒸気が上がるコーヒーを見ながら考えているとパタンとドアの開く音がして、そしてふわーっとアクビをしながら声が響いた。

「あーコーヒーの良い匂いね。ねえ、シャワー借りてもいい？」

へ？？今の声って・・と振り向くと其処には・・ドアの前に全裸で立つゾフィーの姿があった。すごい、裸のマハみたい！じゃ無かった・・・なんでゾフィーさんがここに・・、しかも真っ裸？！だが、彼女は私を気にする風でもなく、返事を待たずにそのままバスルームへと歩いて行く。一瞬の事だったが、私の思考回路に今の出来事がちゃんと理解できなくてバスルームの方向を見たまましばらく固まってしまっていた。

それからさほど立たずにシャワーの音が聞こえてくると、私は詰めていた息をゆっくりと吐き出した。えっと・・・昨日の夜、忍さんはゾフィーさんを連れて帰ってきて、ｘｘｘいたしましたと言う事なのだろうか？其処まで考えて顔が茹でタコのように赤くなるのが分かった。知識として知っていても、いくらお風呂屋さんで女性の裸を見ていたとしても、今までみじかに考える事も無かったのだが、さすがにルームメイトの部屋から裸で出て来られるといやでも想像してしまう。しばらくの間、バスルームと忍さんの部屋を交互に眺めていたが、それで何か起る訳でもないし、ここは私が忍さんの親戚から間借りさせてもらっているのだから、女を連れ込もうと文句

をいう筋合いはない。

だが、なんとなく心の奥底にちくりと痛みを感じた気がするのは気のせい・・・？やっぱりあの二人はそういう「大人の関係」なのかと考えていると、バスルームからゾフィーの声が上がった。

「ねえ、遥！悪いんだけど、バスローブもってきてくれない？」

バスローブ・・・？そんなはいからなものは無いが、とりあえず何となく忍さんの部屋に入るのも・・ということで、自身のバスタオルを持って行く。

シャワーを浴びて、すっきりした顔で私からタオルを取ると、ニッコリ笑ってありがとうといった。なんとなく、それからじっと彼女を凝視してしまった。同性だが、本当に羨ましいぐらい出るところは出てるし、引き締まった良い体つきをしている。上級のクラスでは、裸のデッサンのクラスがあり、ヌードモデルも幾人かいるが、さすがに欧米人の身体付きと日本人のは違うんだと思ってつい見惚れてしまう。

「遥・・はるか？」

「え？ああ、ごめんさない！失礼ですよね、人の裸じっと見ちゃって！すみません。」

「いや・・別に減るもんじゃないから良いけど。あなたも変わった子ね？さすが忍と一緒に暮らしているだけあるわ。」

忍さんの名を聞くと先ほどまで想像していた事を思い出してしまう。と、目の前の彼女がいきなりぷっと笑い出した。

「やだ、もしかして何かイケナイ事想像してた？」そういって私の顔を覗き込みにやりと笑う。う・・この人、なんか忍さんに似てるかも・・・。

「は？いえ・・あの・・・・」ついしどろもどろになる。バスタオルを巻き付けたままのゾフィーがいきなり私を抱きしめた。身長差が随分とあるので、彼女の豊満な胸にむぎゅっと顔がうずまる感じに

なる。苦しい・・・さすが巨乳。

「遥って可愛いわね。でも残念ながらあなたが想像したような事は何もないわよ。大体忍は昨日ジェリーの所に泊まってるはずだから。」

ジェリー・・どっかで聞いた様な・・・。あ、あの変なヘアスタイリストさん?!

「ゾフィーさんも、ジェリーさんの事知ってるんですか?」

「呼び捨てで良いわよ、遥。ええ、彼の事はよく知ってるわ。何度かショーでもお世話になったし。さて・・と、ほんと忍ったら酷いのよ。無駄使いするなってホテルから追い出しておいて、鍵だけ渡して自分はさっさとジェリーの所行っちゃうし。まったく・・私のお金なのになんで文句言われなきゃ行けないのかしら・・あ、それより遥、私おなか空いちゃった!何かない?」

「あの・・・それは・・いいんですが、苦しいので離してもらえますか?」

「ああ、ごめん〜。」私はやっと男の憧れの状況から解放されて小さく息を吸う。

それからゾフィーさんが着替えをすましてくるまで私は手早く朝食の準備をした。約10分後には、テーブルの上に、サラダ、ハムエッグ、トーストなどが揃い、私たちは一緒に座って食べ始めた。

「じゃあ、昨日の晩、ゾフィーさん・・いえゾフィーはタクシーでここまで来られたんですか?」

「そうよ、荷物もあったしね。散々説教されて疲れたからすぐに寝ちゃったわよ。忍って自分は好き放題遊んでるくせに、やたらとうるさいのよね。」

すぐに寝た・・・この人、裸で寝る癖があるんだろうか・・・汗)

「えっと、それで、結局何がどうなっているんでしょうか?」

「ああ、そうよね。まだ遥には何も話してないんだった。えっと、とりあえず、私がドイツに帰るまでの1週間、こちらでお世話になる事になったのよ。それで・・今日は大学の下見に行く予定♪忍は一度こっちに帰ってきて着替えてから大学に行くって言ってたわ。そろそろくるんじゃないかしら・・・？」

27話

噂をすればなんとやら・・とはよく言った物だ。私たちがその話をし終わるやいなや玄関のチャイムが鳴り響いた。あー、そっか、昨日ゾフィーに鍵を渡したから鍵を持ってないんだ。納得しつつ、立ち上がって私は玄関先へと向かった。
ドアを開けると、やはりそこには忍さんがぶっちょう面をして立っていた。あれ・・機嫌悪そう。なんでだろう。
「遥・・お前人が来たらいつもそうやって無防備に戸を開けてるのか？」
「へ？」
「危ないだろ。襲われたらどうするんだ。いきなり開ける前にちゃんと確認しろよ？」
また、そんなオジン臭い・・・いや親父みたいな事を言わなくても・・と思った脳裏にゾフィーが言っていた言葉を思い出す。本当に結構小姑みたいな所がある。
「覗き穴には届かないんですから仕方ないですよ。朝ご飯はもうすまされたんですか？」
「いや、まだだ。」
「じゃあ、とりあえず先にコーヒー飲んで待っていて下さい。ゾフィーもそろそろ食べ終わりますから。」
「あ、遥・・・」
「はい？」
「その、、昨日はすまなかったな。」玄関先で小さく忍さんが呟いた。
すまなかった・・・というのはどの事を指して言っているのかわからなかったが、別にとりたてて気にしても無いので、かるく流しとく事にした。
「はあ・・別にいいですよ。」

私はにっこりと笑ってすたすたとダイニングキッチンに戻り、忍さんの分のトーストをトースターに入れてから、残りの材料で、朝食の準備を始めた。
「お帰り、しのぶ。」ゾフィーが食パンをくわえたまま軽く手を挙げる。美人はどんなことをしても絵になるなと思う。

「ゾフィー、あのことは話したのか？」
「ん、言っといた。私は別に忍と一緒に寝ても全然かまわないんだけど。」
「は？その話は昨日しただろ。それよりお前、まさかまた裸で寝てたんじゃないだろうな？」
「やだ、忍見てたの？もう、スケベなんだから～。」ごつっと叩かれる音が響いた。
「お前・・・昔から暑い日は脱ぐ癖が逢っただろうが・・まったく、えっと、遥？相談せずに勝手に決めてしまったのは悪いんだが、ゾフィーがドイツに戻るまでの1週間、面倒をみてやってくれないか？」
「別にいいですよ。そう言えばさっき話の途中だったんですが、ゾフィーはうちの大学に通うんですか？」
「いや、違う大学だ・・・。というか、ゾフィーは色々と特殊な事情があるんだ。」
「特殊な事情・・ですか？」
「ああ、詳しい事は今日話そうと思ってたんだが・・、まず、ゾフィーはこう見えてもまだ15歳になったばっかりだ。」
「へ？」一瞬私は、取り出したトーストを床に落としそうになった。え？聞き間違い？15歳って言った？あのお色気むんむん、ぼんきゅっぽんボディーで私より3歳も年下・・？嘘でしょ・・・だって大学に通うって・・・・。
「あ～、そうだな、日本には馴染みが無いかもしれないが、いわゆ

る飛び級ってやつだ。莫迦そうな面はしてるが、ゾフィーはかなり頭が良くて、大学に入る為の認定は受けている。たしかＩＱ１７５だったか？微妙な数字だよな。とはいえ、まだ未成年だし、いくら親の経営するホテルと言えども、一人でほっとく訳にも行かないからな、うちで預かる事にした。わがまま娘で遥には迷惑だと思うが、よろしく頼む。」

「ちょっと、忍、馬鹿そうってどういう意味よ？」

「そのままの意味だが・・・？」

「き～、まったく！ちょっと遥、この男に私の魅力をもっと分からせる手を考えてちょうだい！ちょっと、なんで笑ってるのよ、忍！」

二人の言い合いを静止したまま見つめる。ん～。。。。。なんというか、今日はもう朝から許容量いっぱいいっぱい、通り越してます。えっと、昨日のあの豪華ホテルは親が経営するホテル・・・ですか？忍さんの関係者って、最初のジェリーさんといい、なんかぶっ飛び過ぎです。

「遥・・はるか、大丈夫？」ゾフィーが私の前で手をふらふらさせる。

「私は別にホテルでもいいって言ったんだけど、忍ったら昨日ママンにまで電話かけてこっちにいらせられることになっちゃったのよね。でも遥のお料理おいしいし、遥の事は気に入ってるし、これはこれで良かったかも・・。」

はあ、もうなんとでもしてくださいって感じです。何故か朝からぐったり疲れてしまった。

「俺、今日の授業午後からだから、ゾフィー連れて、通う事になってる私大の研究室に挨拶いくから、なんかあったら俺の携帯に電話して？」

「はい・・」といいつつふと時計をみるともう８時半を回っている、ヤバい！ちょっとキャパ超えてぼーっとしすぎだ。私はあわてて、

用意をして家を出て行った。

＊＊＊

「ねえ、忍。」

「なんだ？」

「私、遥のことすごく気に入っちゃったかも・・・。はるかになら・・良いかな・・・。」

「は？」

「なんでもない。さ、忍も早く用意してね。私たちもそろそろいかないと。」

「そうだな・・・。」

28話

午前の授業が終わると、真樹ちゃんからお声がかかる。
「ね、遥、昨日先輩とデートしてきたんでしょ？どうだったの？」
「あー・・・えっと、美術展は本当に素晴らしかったですよ。それこそ1日中でもいたかったんですけどね。」
「なんか含みのある答えね、何があったの？」
私は午後のクラスが始まるまでの間、真樹ちゃんに簡単に昨日のあらましを説明する。
「へえ・・ほんとぶっ飛んでるわね、その子。でも笑える。忍さんの困った顔見て見たかったわ～。」そういって真樹ちゃんは少し意地悪そうに笑う。
「そうですね、確かにあんな余裕の無い忍さんを見たのは初めてかも。うちのお兄ちゃんが来たときでさえ、あそこまで慌てた感じではなかったですし・・。」そういって遥は、ゾフィーの口から漏れたユリアという女性の名を聞いた時の忍を思い出す。

「で、そのゾフィーって子は1週間遥が面倒見る事になった訳？」
「はあ。一応。私よりはるかに大人っぽくみえますが一応未青年ですし・・。それになんだか変に懐かれた様で・・。」
「ふ～ん、なるほどねえ。」と真樹ちゃんが頷く。何がなるほどなのか分からないが、真樹ちゃんはそれなりに納得したようだ。
「それで先輩の初デートは撃沈した訳か・・ね、今週のどの日か私も遥んちに泊まっていい？その天才少女にもあってみたいしさ。」
「いいですよ。あ、でもうち、シングルベットしかないし、お布団が・・。」
「いいわよ、リビングのソファーで寝るから。冬ならいざ知らず、今は夏なんだし、全然オッケーでしょ。」
「わかりました。じゃあ、一応聞いてみますね。」

＊＊＊
その頃、忍はゾフィーを某大学へ送り届けて、親代わりとして？挨拶をすませた後、大学へと戻って来ていた。昨日、町中でゾフィーと逢ったのは本当に青天の霹靂というぐらい驚いたのは事実だった。ゾフィーの母と自身の亡くなった母は幼馴染みの同級生で、お互いに結婚をしてからもずっと母が亡くなるまで良好な関係を続けていた。もともと身体の弱かった母が俺を生んだのは奇跡とも言える確立で、そして出産直後から今まで以上に身体を崩した母は、一年の半分はスイスにある療養所で暮らしていた。
ゾフィーの母親は若くで父と大恋愛の末結ばれた母と違い、キャリアを積んで３０代前半で、手広くホテル事業を展開している夫と出会い結婚し、二年目にゾフィーが生まれた。

幼い頃から、ほとんど家に居ない母親の代わりに面倒を見てくれていたのがゾフィーの母親だ。とはいっても、子供を産んだ後は、乳母に子育てを任してすぐに仕事に復帰したのだから、自然残された子供二人は共に居る事が多くなる。
俺の父親も仕事で1年の半分以上は世界中を飛び回っていたのだから仕方が無い。俺も幼少の頃は、スイスにいる母とドイツの実家を行ったり来たりしていた。

ゾフィーは小さな頃からやたらと活発な子供だった。今思えば、それはＩＱの高さによるものだったのかもしれないが、みじかにある様々な物に興味を示し、いつも俺の後をついて回って質問するのが、多少うざかったが、それでも懐かれるとそれなりに愛着が湧く物でいつの間にか妹のように思っていた。

生前、母とゾフィーの両親は割と本気で俺たちをくっつけようとしていたらしく、その頃6歳になったゾフィーは母達の話を聞いて、

婚約という言葉に大いに興味を持って使うようになっていた。あまりうるさくいうので、適当に返事をしていたら、どうやら本気にしたらしく、俺の母親が死んだ後、しばらくして付き合ってた女達に牽制していた事は記憶に新しい。俺が日本でスカウトされて、モデル業を始めるようになると、ゾフィーも同じように雑誌モデルを始めた。まあ、年齢の割には大人っぽく体つきのよいゾフィーはすぐに売れっ子モデルとなって、ティーンの雑誌などで活躍している。

色々あって、親父の意向に従って日本の大学に行く事を決めたときも、こちらにくるぎりぎりにゾフィーに話したのだが、そのとき一瞬殺気の様なものを感じたが、何もいわなかったので納得したのだろうと思っていた。

雑誌モデルだけでなく、その知能でも注目されつつあったゾフィーは、アメリカの某有名大学から奨学金付きでのオファーをいくつか受けていたし、てっきりそっちの方面へ進む物だと思っていたから余計にゾフィーが日本の大学へくる事には驚きを隠せなかった。

だが、昨日ドイツにいるゾフィーの母親に電話して詳細を聞いた所、日本への留学は1年間のみで、その後はもともとの予定通り、アメリカへ行くのだという。

＊＊＊（ここからはドイツ語の会話です。）

「まあ、日本には忍も居る事だし・・？ゾフィーがどうしてもって聞かなかったからしょうがないわ。あの子、あなたの事が心配で仕方がないのよ。ま、そう言う事だから、1年間よろしくね、忍。」

「ちょっと待って下さい。住む所とかはどうするんですか？！」

「確か、Ａｙａのルームの隣って空き家じゃなかった？そこを私が買う事にしたから。」

「は？ちょっと、おばさん・・それはうちの隣に住まわすってことですか？」

「そうよ。忍のそばなら安心だし。というか・・・いつも言ってるでしょ、おばさんって呼び方、老けたように感じるから止めてちょ

うだい。あら、もう時間だわ。ごめんなさい、忍。行かなくちゃいけないから、とりあえずはこの1週間ゾフィーの事よろしくね！バ～イ！」

29話

「まったくあの人はいつもいつも・・・はぁ。まあ仕方ないか・・。」そして今に至る。
今日、一度戻って遥にちゃんと説明した方が良さそうだ。いくら人の良い遥とはいえ、勝手に決めてしまった事を本当は怒っているかもしれない。
これ以上ジェリーに貸しを作るのは嫌だが、結局の所、友人で一番気兼ねせずに楽に付き合え、また家からも近い所となるとジェリーの所しか思いつかず、昨日も夜中に転がりこんだが、どうやらお楽しみの真っ最中だったらしく、思いっきり嫌な顔をされてしまった。この埋め合わせを考えると頭が痛い・・・。とはいえ、長い付き合いなので、ゾフィーの事は知っているし、二つ返事で納得したように頷いた。
「あら・・ゾフィーまで来ちゃったの？随分あなたに懐いていたものね・・。ま、頑張りなさい。」そういって意味ありげに笑うのだった。

＊＊＊
それからゾフィーがドイツに戻るまでの1週間はあっという間に過ぎて行った。水曜日の晩に真樹ちゃんがお泊まりに来て、ファッションの事やドイツの女子の中で流行っているアイテムなどの事で盛り上がり、ゾフィーも性格が似ている？真樹ちゃんの事を気に入ったようだった。私とは違った所で気のあった様なそぶりでこそこそと話し合っていた。
金曜日には、真樹ちゃん、先輩、そしてジェリーさんも呼んでみんなでささやかなお別れ会を催した。初めてジェリーさんと対面した真樹ちゃんと先輩のリアクションはそれぞれ違っていて面白かった。先輩はちょっと引き気味に接していたが、真樹ちゃんは、ジェリー

さんと暫く話した後、首をふりながらとても残念そうに呟いた。
「もったいないわね・・。男にしか興味がないなんて生産性が無いにもほどがあるわ。」
「・・・そういう問題なのか・・？」先輩がそのつぶやきを耳にして思わず突っ込んでいた。意外に真樹ちゃんと先輩は良いコンビだ。

それから私と真樹ちゃんで用意した夕食をみんなで食べ始めた。
「ふうん、じゃ、明日ドイツに帰って半年後にこっちにくる訳？」先輩がアスパラの牛肉巻きをつつきながらゾフィーに問う。
「そうよ。で、この家の隣に住む予定。」
「ええ？それほんとなの？忍さん？」真樹ちゃんが大げさに驚く。
「・・みたいだな。この部屋の隣が空き家だったみたいでゾフィーの母親が買ったらしい。」
「買ったって・・1年の留学の為に？ここってそんなぽいぽい買えるような値段のマンションじゃないでしょ？」
「ああ」
「って、どんだけ金持ちなのよ、ゾフィーんちって。」
「ん～、親の仕事は私には関係ないけど、家ならニースやスイスにある別荘も入れたら5つあるかな。」
「げ、まじで？」これだから金持ちは・・と先輩が呟く。
「ひがまないで、おじさん。」くすっと笑うゾフィーの隣で先輩はムカつく！と叫びまくっていたが、仲良く言い合いをしている二人を見ると、微笑ましかった。

明日のフライトもあり、11時頃にパーティーをお開きにした後、片付けなどをしているといつの間にかゾフィーが黙って横に立っていた。
「もう寝た方が良いよ？明日も早いんだし。」年下と言う事もあり、この1週間で随分とくだけて話すようになっていた。
「ん・・・。ねえ、遥」

「はい？」
「暫くの間、忍の事よろしくね。」
神妙な顔つきのゾフィーの雰囲気にいささか戸惑いを感じたものの、生活面での事かと思い返事をする。「わかった。任せておいて？」
「今度、日本に来た時には・・・」
「え？」
「ううん、なんでもない。ホントに・・遥が忍のルームメイトで良かったと思う。それじゃ、おやすみ、遥。」といって彼女はいきなり私を抱き寄せ頬に軽くキスをした。
これって、一番最初に忍さんに出会った時にもされた奴だ。男性にキスをされたのも初めてだったが、女のこにキスをされるとは思わなかった。挨拶とは言え、流石外国人だ。少し赤くなった私を見てニッコリと花が咲いたように微笑むと部屋へと入って行った。遥の地道な躾？の成果か、初日の後はキャミとパンツだけは履いて寝てくれるようになったのだ。次回半年後にこれからいくらお隣さんとはいえ、一人暮らしをする女の子が夜、寝るときに裸で寝るなんて危なすぎる。あまりにも無防備過ぎて忍が心配するのも頷けた。だが、それと同じように自分が心配されている事には無頓着な遥であった。
部屋を片付けた後、さすがに疲れがでたのか、遥は部屋に戻るとそれから間もなくすぐに眠りの中へと落ちて行った。

30話

翌朝早く、私と忍さんはゾフィーを見送る為に空港へとやって来た。
「忍さん・・・車運転できたんですね、知らなかったです。」
「まあ、普段は使う事ないからな。叔母さんの家は便利な場所にあるし。」
「そうですね、確かに・・・。というか、この車はどうしたんですか？」乗って来た車は遥でも一目で外車だと分かる高そうな車だった。
「あー、これ伯母さんの車。」
「そうなんですか？車があったなんて知らなかったです。」マンションに車庫があるのは知っていたが、まさか車まで置いてあるとは知らなかった。
「まあ、一応使っても良いと言われてたからな・・。」
それから暫くの間、たわいもない話をしていたが不意に会話が止まり一瞬の間が二人の間を支配した。
「ゾフィー、最後にお前になんて言ったんだ？」
「え？」
「最後、お前だけ引き止めて何か言っていただろう？」
「あ、ああ。」そう、空港に見送りにいった最後にゾフィーは私と忍さんの頬にひとつずつキスを落とすとぎゅっと忍さんにハグした後、私だけを引っ張っていったのだ。
「ふふふ、忍さんってゾフィーに愛されてますよね。」
「・・・一体どういうことだ？」
「はい。えっと正確にいいますと、桐生真弓という女性がちかじか日本に舞い戻ってくるから忍さんに近づけないようにといわれたんです。」
「桐生真弓・・そうか、あの女が帰ってくるのか。」
実際にはゾフィーはそれ以上の情報を遥に残していた。

＊＊＊
「ど、どうしたの？ゾフィー。」抱擁が終わった後、何故か遥だけ引っ張られて隅っこまで来ると、ゾフィーが耳元に口を寄せて来た。
「あのね、遥・・これは昨日ママから得た情報なんだけど、ちかじか日本に桐生真弓って女が帰ってくるの。その女を絶対に忍に近づけさせないで？」
「え？」
「あの女、年増の癖におじさまだけでなく、忍にもかなり執着してるの。ドイツに居たとき、忍の周りにいた女は大体私が追い払ったんだけど、あの女だけは蛇みたいにしつこくて執着深い・・。遥が一緒に住んでいるって知られたら何をしてくるか分からないわ。だから気をつけてね。ホントはすぐにでも私も日本に来れたら良いんだけど・・・」

そっかあ、ゾフィーってやっぱり忍さんの事が大好きなんだ。まあ婚約者だって言ってたしね。つまりはドイツから日本に戻ってくる女の人は忍さんを狙っているから、ゾフィーの代わりにその人を近づけないでという任務な訳だ。
と、一応あってはいるのだが、ゾフィーと忍が聞けばずっこける様な思想で納得していた。
＊＊＊

実際の所、わざわざ忍ではなく、遥に桐生の名を告げておいた事には意味があった。飛行機のファーストクラスの背もたれにゆっくりと腰を下ろしてゾフィーは考えていた。
1週間一緒に住んで、色々と遥の事を観察していた。面白い・・そして思った以上に手強い。今まで忍が特定の女と一緒に住んだ事は無かったが、遥ならなるほどと思えた。
まず、とてつもなく鈍い。ゾフィーから見ると、生活の中で忍はあ

れこれとアプローチをしているが、恋愛という概念がないのか、見ていて可哀想になるほどまったくの素無視だ。
日本の言？？で、美人は三日見れば飽きるという言葉を聞いた事があるが、それの男性版なのか、１０人女が居れば１０人がなびくであろう忍の色気にまったく反応しない。

良い意味で我が道を行く女だ。もう一人の沢田という男も遥に気がありそうだったが、あの分ではかなり時間がかかるだろう。まったくどういう環境で育って来たのか興味が湧く。
それにしても、桐生真弓・・あの女は忍が日本に戻ってくる二年前に、あるパーティーで忍の父親と出会い、かなり猛烈にアタックしていたのだが、忍の父親がなびかないのを知ると、それは一挙に息子である忍にターゲットをしぼって来た。
あの頃の忍は、様々な女の子達と付き合っていた頃で、来るもの拒まずといった感じだったので付け入りやすかったのだろうと思う。
大人の魅力・・私から言えば只のおばさんだが・・で、すぐに忍と体の関係に持ち込み、そのとき他に忍と付き合っていた女をことごとく様々な手で陥れ別れさせた。

さすがに幼馴染みで影響力のある私には手出しできなかったようだが、裏ではかなり汚い事をやっていたと聞く。他の女はまだしも、あの女だけは何となく気に入らなくて、何度か忍に文句を言ったが、あの女が忍の私生活にまで割り込んで来ようとするまでは、忍は何もしなかった。だが、結局強引に忍を手に入れようとしたあの女は結局自爆したのだが、それでもあの女は忍を諦めた訳ではなさそうで、忍のまわりをうろついていた。
忍が日本の大学に行くと聞いた時、何も言わずに決めた事に少し腹は立ったが、あの女と距離を置ける事については良かったと心底思っていたのだが・・・。
ほんの１週間の事だったが、遥のことは忍と同じぐらい好きになっ

ていた。今回遥に忠告したのは、遥の口から忍へと伝わるであろう事、そして・・・これは一種の賭けだが、これをきっかけにあの二人に変化が起るのではないかという期待も無きにしもあらずだ。
さて、私がドイツに戻っている間どうなるのか・・それは真樹がメールで報告してくれる事となっている。

31話

「中川君、ちょっと良いかね？」
今日提出する書類の最終確認をしている中川柾樹に部長がデスクまで寄って来た。「大澤部長」柾樹は少し驚いて顔を上げる。
大澤は、そのまま柾樹を促して個室へと誘った。
「一体どういった用件でしょうか、部長？」
「ふむ、君は我が社のドイツ支社の事は知っているかね？」
「ドイツ支社へは、一度取引で行った事はありますが、それが何か・・？」
「実は、この度ドイツ支社から一人、この第一課に派遣されることになってな・・慣れるまでの間、君に彼女の世話を頼みたいと思っている。」
「女性・・ですか？」柾樹は軽く眉を顰める。
「ああ、そうだ。名前は桐生真弓君という。ドイツ支社でもやり手のホープなんだが、本人の強い希望があって、来月からうちにくる事になっている。まあ、そういう事で宜しく頼むよ、中川君。君の様な若手のやり手と彼女ならきっと良いコンビになるだろう。ははは！」

体よく押し付けられた様な気がしなくとも無かったが、デスクに戻った柾樹は先ほどの桐生真弓という女の事について考えを巡らした。いくらやり手だとはいえ、そう簡単に東京の本社に希望を出して帰って来られる程甘い世界ではないということはよくわかっていた。ということは・・・上との繋がりがあるか、言いたくはないが、女の武器を使ったか・・実際いくら建前を繕ったところで、こういった事例はどこの会社でも多かれ少なかれある事だ。正直メンドクサイ事を押し付けられたとは思ったが、上からの命令である以上仕方がない。柾樹は軽くため息をつくと、もう一度デスクのコンピュー

ターに集中しだした。

＊＊＊

あれから忍さんは桐生真弓という名前を聞いてその美しい顔を少し曇らせると、黙り込んでしまった。色々と思う所があるのだろう、色男は大変だ。

私にも何か言いたさ気にしていたが、なんせ、ゾフィーが居た間、ほとんど課題をする時間がなかったので家につくと私はさっさとアトリエに閉じこもって課題に取りかかった。

一息ついて部屋から出て来たときには既に夕方になっていた。

「やばっ、もうこんな時間か、夕食の用意しなきゃ・・・。」ゾフィーを送って行った帰りにそのまま買い物に寄って、食材と日用品を買い込んで来た。車があると、こういうときは本当に便利だ。とはいえ、いつもは私自身が厳選した格安のスーパーや八百屋などで買い物をしているから、いつも車が必要な訳ではない。

カチャリとノブを廻してリビングへの扉を開けるとリビングのソファーで長い足を投げ出した忍さんが横たわっているのが見えた。

「忍さん？」呼びかけて見るが返事がない。寝ているのかと思いゆっくりと近づいて行く。ゾフィーといい、忍さんといい、本当にゲルマン系の彫りの深い整った顔立ちをしている。しばらくの間その端正な寝顔を楽しみ、キッチンへ向かおうとした瞬間私はぐいっと引っ張られて彼の胸の中へと倒れこんだ。

「お、起きてたんですか？！」焦った私の体を包み込むように忍さんがぎゅっと抱きしめてくる。もしかして寝ぼけてる？そして次の瞬間、何か熱いものが私の唇に覆いかぶさった。

半開きだった私の唇と彼のものが合わさっている現実に驚きを通り越して固まってしまった。息をするのも忘れてしまったように私は目を見開いて相手の顔を見つめる。

そんなに長い間ではなかったはずだがつい息を止めていたせいか苦

しくなって相手の唇を退けようとする。
「っん」
逃げる私を追いかけてまた忍さんが角度を変えて私の唇を奪おうとする。
く・・・苦しい！自分でも顔が真っ赤になっているのが分かっている。もちろん初めての事で恥ずかしさもあるがそれよりも苦しさが先に立っていた。私は手に力を込めて忍さんを引きはがした。
名残惜しそうに伏せ目がちに私のくちびるをひと舐めして忍さんが離れた。
「おきがけに何するんですか！」
「人の寝顔をじっと見てたお駄賃。」
「それはっ、・・・っていうか、本当は私が呼んだ時から起きてたんでしょう？」
「まあ・・。こんなチャンスはなかなかないし。」
私はじろっと忍さんを睨みつけて言った。「だからと言ってなんでキスするんですか？！私すっごく苦しかったんですよ！」
「何故？」
「何故ってそりゃ、息ができないじゃないですか！」
「・・・・・。」
「なんですか？変な顔して。」
「いや・・遥、キスは初めて？」
「そうですよ！っていうか、今の私のファーストキス？！うわあ・・・初めてのキスはレモンの味って聞いてたのに・・・。」遥の顔が曇る。
「俺の・・・そんな顔されるぐらいに駄目だったわけ？」さすがに自分からキスをした女の子にこういった態度を取られたのは初めてだ。彼女はいつも俺の想像を上回る。怒るだろうとは思っていたが・・・こういう反応を返されるとは思わなかった。
「だって、忍さんのキスはレモンじゃなかったですよ。あの匂いは・・そう、お酒・・？」

「ああ、寝る前ちょっとウイスキー飲んだから。」
「忍さん！ここは日本ですよ、２０歳までは飲酒禁止です！ってホントそれ、何処から手に入れたんですか？」
「おばさんのコレクション？」
「もう！」遥は立ち上がって、すたすたとキッチンまで歩いて行くと、「今日はうどんです！」と言った。

実のところ、忍から背を向けた後、色々と唇の感触や色んなものをはっきりと認識してかなり動揺していたのだが、その時の忍は思っていたリアクションと違ったものを返された事で軽くショックを受けていた所だったので、それに気がついた様子はなかったのだった。

３２話（前書き）

しばらく忙しくて執筆できなくて、お待たせしました。１１月からはファンタジーの方も進めて行く予定なので、少し更新速度が遅くなると思いますがこれからもよろしくお願いします。

32話

ドキドキと胸の奥に響いてくる鼓動を聞きながら私は努めて平静な振りをしてうどんをつくり始めた。咄嗟に自分の口からでた言葉は昔読んだ漫画の受け売り・・ファーストキスはレモンの味・・・。なんて嘘つきなんだろう。

初めてのキスはちょっと苦い大人の味がした。自分の舌が彼のそれに絡められた瞬間、軽いショックと驚きでつい付き離してしまったが油断も隙もあったものじゃない。

そう・・本当に吃驚しただけ・・・・。

でも、何故・・？

ぐるぐると思考が回る。慣れか、一応手は手順通りに動いているが、心はここにあらずといった感じだ。だが、うどんが出来上がる頃にはその事実を心の片隅に追いやってしまっていた。

それから2週間がたった頃、いきなり兄の柾樹から電話がかかって来た。

「遥か？」

「うん、どうしたの？お兄ちゃん。珍しいね、こんな時間に。」今はまだ勤務時間のはずだ。

「ああ・・・まあな。それよりも、来週また仕事でそっち方面に行く事になった。視察も兼ねて、俺と・・あともう一人。まあ、色々あって本来ならホテルに泊まるとこだが、ちょっと気疲れする相手でな。悪いんだがお前の所に一泊させてもらえないか？」

お兄ちゃんがこういった泣き言？を漏らすのはとても珍しい。私は二つ返事で頷いた。

「わかった。忍さんにも聞いてみる。たぶん大丈夫だと思うけど。」

そういうと、兄はクスリと笑って言った。「まあ、あいつに拒否権などないけどな。」

なんだか分からないがいつの間にか親しく交流しているようだ。
「ま、俺からもメールしておくが、一応そう断っておいてくれ。」
「はーい。じゃあ、また詳細分かったら連絡してね。」そういうと遥は電話を切った。

「何なに？今のって柾樹さん？」真樹ちゃんが横から聞いてくる。
「うん、なんかお兄ちゃん、また来週うちの方に来るって。」
「遥さん、お兄さんがいらっしゃるんですか～？」と間延びした声で質問してくるのは最近仲良くなった友人の和泉蝶子姫だ。もちろん、姫はあだ名だが、それにぴったりの華やかさと楚々とした雰囲気で人気のある彼女と友達になったのは、ある一件があったからだ。

＊＊＊
上京してきてから、ずっと探していたバイト先。なんといっても、油絵の具や、キャンバス、油彩や絵の道具はお金がかかる。学費と生活費を苦しい中から親に捻出してもらっているのだから、絵の具代ぐらいは自分で働いて賄おうと職探しをしていたのだが、この不況のさなか、なかなか時間や給金に見合ったバイトは難しい。
その日も、ある仕事情報誌を見ながら歩いていると前方で言い争いが聞こえて来た。
「止めて下さい！」
「いいじゃん、俺らと一緒に遊びに行こうよ！」
「っつ！」
半目に涙を溜めた可憐な女の子が無理矢理男に手を引っ張られている。噂では聞いた事があるが実際にお目にかかるのは初めてだった。が、周りを通りすぎる人達は興味深そうにちらっと横目で見て行くだけで、誰も助けようとはしない。遥はその状況にむかっと腹がたった。もしこの場に忍がいたら無謀な事をするなと怒っていたに違いない・・がその時の遥はもっていた情報誌を丸めるといきなりそれを男に向かって投げつけた。上手い具合に丁度頭に当たって、男

は短い悲鳴をあげた。
その途端に手を離した一瞬の隙を逃さず、遥はその女の子の手を取って走り出した。
「おい！まて、この糞女！」後ろで何か聞こえて来たが無視して走り続ける。私が男だったら新しい出会いの一瞬なのかも・・と考えながら。
「はあ、はあ・・あのっ、すいません、助けて頂いて。」
「気にしないで下さい。私あーいった人の事を考えない男は嫌いなんです。」
遥は改めてまじまじとその子の顔を見つめる。可愛い・・・くりくりとした茶色い巻き毛に
均整のとれた顔。さすがにナンパされるだけの事はある。
「あの・・・もしかして、中川さん？」
小さな口から出て来た言葉に私は吃驚する。私の事を知ってる・・？
「え？」
「わたし、西洋美術史のクラスを取っている和泉蝶子です。」
「和泉・・・ああ、そうだ、聞いた事がある。男の子達がすごく可愛いって騒いでいた子だ。」つい声に出して言ってしまっていた。
西洋美術史のクラスは人数が多く、はっきり言って知らない人の人数の方が遥かに多い。
「え？」私の言葉に今度は目前の彼女が赤くなった。本当に可愛い。背丈も小柄な私とそう変わらないし、小動物といったイメージがしっくり来る。
「あ、あの、本当に有り難う御座いました。良ければ、お友達になってもらえませんか？」
「もちろん、こちらこそよろしくお願いします。」
＊＊＊
などという、漫画の様な出会いを通して、今の関係になっている。
真樹ちゃんともすぐに仲良しになって一緒に昼食を食べる事も多くなって来た。バイトの方は、とりあえず、近くのコンビニに頼み込

んで来週から初仕事が始まる予定だ。

33話

バイトを始めてから私の生活様式が若干変化してきた。バイトの事を忍さんに話すと若干嫌そうな顔をされたが、私には自分の絵の具代を稼ぐという大きな目的があるのだ、別に深夜のアルバイトでもないし別に危ない事は無いと言い切ったが、私がバイトを始めると、ちょこちょこと仕事帰り？に顔を出す様になった。本当にゾフィーが言っていた通り、心配性だ。きっと彼自身は密かにイケメンの訪れるコンビニと奥様方の間で噂になって、いきなり利用客が増えた事など知らないのだろうが・・・流石モデルパワーだ。

そういえば一度、コンビニで彼の男友達にあった事があったが、普段の彼はどちらかと言うと、とてもクールなんだそうで、忍さんの私に対する態度を見てとても驚いていた。

「君、あいつにすごく大切にされてるんだな。」としみじみと感心したように呟いていた。確かに、彼は家族のように私を大切に扱ってくれているとは思う。まあ・・時々訳の分からない行動をすることはあるのだが・・。

バイトはレジ・品出し・陳列・検品・掃除なども含めて、覚える事も沢山あるが、店長さんが優しい人で、ちゃんと教えてくれるので、少しずつ慣れて来た。コンビニの給料は安いと聞いていたが、給料の事よりも、始めてのバイトなので何をするにも楽しく頑張っている。

そうこうしているうちに、お兄ちゃんがうちにやって来た。家に一歩入ると玄関口の靴を見て方眉を上げて呆れたように呟いた。

「また集まっているのか？」

「あ～・・うん、みんなお兄ちゃんに会いたいって言うから。嫌だ

った？」
「別に・・、そう言う訳ではないが」
「まあ、とりあえず上がってよ。今日はお兄ちゃんの大好きな豚の角煮作ったんだよ。」
一瞬兄の表情が柔らかくなった事にほそ笑むと私は兄の手を引っ張ってリビングに足を踏み入れる。
「「お帰りなさい～！」」「「お疲れさまです～。」」と真樹ちゃんや先輩の声が重なり、そして後から一歩遅れて「あの、初めまして・・・」という声が響いた。
「あ、そうそう、お兄ちゃんは始めてだと思うんだけど、最近友達になった和泉蝶子さん。すごく可愛いでしょ？」

「え？ああ、遥の兄の柾樹と言います。初めまして。」でたよ。お兄ちゃんの満面営業スマイル。大抵の女の子は、これでころっといっちゃうんだよな・・。蝶子ちゃんはどうなんだろう・・と横を見ると、案の定顔を真っ赤にしてうつむいている。流石と言うべきか何というか・・。
「あの・・よろしくお願いします。」答えるのもやっとと言った調子で蝶子ちゃんが答えた。可愛い・・・なんというか、守って上げたくなるという男の気持ちがわかる気がする。

「っていうか、遥ちゃん、俺腹減った～！」とソファーに半分寝転がっていた先輩が叫ぶ。
「もう少し遠慮しろよ、お前は・・・。」呆れたように忍さんが呟く。
私はそんな様子を暫くの間じっと見つめると微笑んだ。初め、家をでてルームメイトと一緒に住むと決めたときはとても不安だったのにいつからか、こうして忍さんや、友人達のいるこの空間を何よりも大切に思っている自分がいる事に気がつかされる。大切な、大切な仲間達との時間だ。

「今用意しますから、少し待っていて下さい。」真樹ちゃんと、蝶子ちゃんが手伝ってくれたので手早く用意していた煮物などを温め、テーブルの上に並べて行く。
「うまそ～。」そう言いながらテーブルに近寄ってくる先輩。そういえば、この４人がけのテーブルも流石に手狭になって来てしまっている。椅子を2客足したとしても、やはりキツい。同じ事を考えていたのか忍さんがぽつりと呟いた。
「手狭になって来たな、このテーブルも・・・。」
「そうですね。」
「そのうち、新しく買い替えてもいいかもしれないな。」そう言って先輩の頭をこずいている様子を見ながら私たちは食事を食べ始めたのだった。

「柾樹さん、今日は泊まって行かれるんですよね？」と忍さんが聞く。
「ああ、悪いが世話になる。」
「なんでホテルに泊まらなかったの？」と私。
「・・・・。疲れるんだ。」
「え？」
「今度新しく同僚になった女の事だ。同じホテルに宿泊するだけでも疲れる。」
兄がこういう表現をする時、遥は兄の苦手とする女性の人物像をありありと思い浮かべる事ができた。兄は決して男尊女卑や俺様男ではない。兄が苦手とする女性のタイプは・・
「柾樹さんでもそういう風に思う事あるんですね？」意外そうに真樹ちゃんが口にする。
「俺も人間だからな。苦手なタイプの女と四六時中一緒に行動していると肩が凝る。」
「新しい同僚なんですか？」

「ああ・・。ドイツ支社から本社に転属になった女だ。確かに・・ある意味能力は評価できるんだろうがな。」とぼやきにも似た言葉をはく兄を意外そうに遥は見つめた。
「ドイツから・・？」
そうして、ここにも一人、少し目を見開いて兄を見つめる男がいた。

34話

「柾樹さん、その同僚の方の名前はなんと言うんですか？」
兄が視線だけを忍さんに向けて口を開いた。「何か気になるのか？」
「・・・、なんと無く嫌な気がしたもので。」と少し口ごもりつつ忍さんが言うと不思議なものを見るように柾樹は目を向け言い放った。
「なんだ、昔の女がらみか？」
一瞬しんと食卓が静まった。皆あっけにとられて兄を見ている。視線を浴びた兄はどういった事もなく挑戦的な視線を忍に投げかけていた。
「柾樹さんの会社って〇〇でしたよね？確かリスボンに子会社のある・・・？」
「ああ」
その言葉にやはりと言った感じで忍がため息を吐いた。「では、柾樹さんの言う同僚は桐生真弓という女じゃないですか？」
「・・・やはり知っているのか？」微妙な間があった。兄の目が鋭く光る。
さすがにこの展開は私も予期していたものではなかったので驚いた。まさか兄の同僚が、あのゾフィーの話していた人？でも、お兄ちゃん、今やはりって言った・・？何かあるんだろうか。
「まあ・・なんというか、複雑ですね。まさかとは思いましたが・・・。」そういって口ごもる忍さんを見て兄は小さく息を吐くと、「その話、後でゆっくり聞かせろ、今はとりあえず飯が先だ。」といって強制終了させてしまった。
真樹ちゃんや先輩、それに蝶子ちゃんからも気になる光線が発せられていたが、それを無視して、二人は違う話題へと移行している。なんとなく突っ込めない雰囲気なので、皆黙ってご飯をもくもくと食べるという奇妙な時間になってしまった。

夕食後、ちょっとタバコを吸ってくるといって忍さんと連れ立って出て行った二人、そして残された私は皆の質問攻めにあう事になってしまったのは必然なのか・・・。
「では、その桐生さんと仰る方は彼の昔の恋人だったと言う事ですか？」大人しげな顔をして蝶子姫の質問は無駄無く的確だ。
「うん、まあ、ゾフィーの言ってた所に寄ると・・だけど。」
「ふうん、あいつって、今まで付き合ってた女のタイプ見てても後腐れ無く遊ぶ奴だとは思ってたけど、過去に何があったのか興味ある所だな・・。」と先輩がにやにやと笑う。
そんな先輩をぺしっと真樹ちゃんがはたきながら心配そうに言った。
「でも、ゾフィーが言うにはその女、忍さんの事諦めてないんでしょう？もし遥が一緒に暮らしているなんて知られたら危ないんじゃないの？」

「え？なんで？」
「なんでって・・・その桐生真弓って女、以前忍さんと付き合ってた女を片っ端から排除してたんでしょう？」
「そうだけど、私と忍さん、別に付き合ってる訳でもなんでもないし・・・。」
「でも、そういう方でしたら、、お付き合いがどうと言った以前に、彼が女性と二人暮らしをしていると言う事自体に腹を立てるかもしれませんよ？」
「そうそう、遥ちゃんって、そういう危機感本当に薄そうだからね～。」と3人に言われ、私は以前、近くの電柱で待ち伏せしていた元彼女の事を思い出した。
「う～んん・・そうなんですかねえ・・。でも気をつけるって言ったって、どうすれば良いのか分からないし。」
「まあ、大学にいる間は俺らもいるし、そうそう不審者が入って来られる訳じゃないだろうから大丈夫だと思うけど、行き帰りとかさ、

そういうの気をつけてよ。」
「そう・・ですね。まあ、でもいきなり襲われるなんて事は無いと思いますけど・・。」実は自分の事よりも兄と忍さんの方が気になっているのだ。そのうち皆もそう感じているのかおずおずと蝶子ちゃんが言った。
「遅いですね・・、忍さんと、遥さんのお兄さん。」
「うん・・。」一体二人でどんな話をしているんだろう。とここにいる全員が思っているに違いなかった。

＊＊＊
「で・・？桐生真弓との関係はどうなってるんだ？」
「相変わらずストレートですね、柾樹さん・・。」
「はっ、こんな話題こそストレートに聞くべきだろう？」暫く歩いて近くの公園までやって来た二人はベンチに腰掛ける。柾樹は胸ポケットからタバコを取り出すと火をつけゆっくりと煙りを吸い込み吐き出した。
「桐生真弓は・・、元は俺の父親の仕事がらみのパーティーで知り合ったんです。まあ、なんていうのか、俺も若かったし、色々・・教えてもらいましたから・・。」
「ふん・・色々ね。ということはあの女が手に入れたいと言っていたのは間違いなくお前の事って訳だな。」
「・・そんな事を言ってたんですか？」
「直接聞いた訳では無いが、やけに執着されてるみたいだな・・。あーいったタイプの女は一度本気になるとかなりしつこい。」
確かに柾樹の言う通りだった。最初は良かったのだ。大人の魅力と色気を持つ年上の美貌の彼女は・・。ゾフィーは最初から気に食わなかったのか、随分と噛み付いていたが、彼女は俺の前ではずっと上手く演じてきたのだろう、さほどゾフィーが言う程気にはしていなかったのだが・・・。だが、彼女は徐々に俺の、嫌、俺たちの禁

忌とする領分まで我が物顔で入り込もうとした。だから別れたのだ、
そう別れたはずだった・・。

35話

「そう、それで、住所の方は判ったのかしら？」
「ええ、こちらになります。」そういって男は1枚の紙を提示した。
「それと、もう一つ情報なのですが、どうやらその住所にお住まいなのは二人のようですね。」
「二人・・・？」
「ええ、流石にセキュリティーのしっかりしたマンションなので、うかつに聞き回ると言った事が難しくてですね、ハイ・・、ですが一応写真は撮れましたんで、お渡ししときます。」
「・・この子が？」写真に映っているのは、あの子とそして彼に手を引っ張られうつむきがちに歩いている娘だった。
二人と聞いて真っ先に思い浮かべたのは、あのこうるさい小娘だったのだが、提示された写真に映っている人物は自分の想像とはかけ離れた貧弱な娘だ。一瞬新しい女かと考えたが、今までに彼が付き合って来た女達とは見た目からして一線を画している。
「この子についての情報は？」
「いや、これ以上は流石に最初に契約していた内容以上の事になりますので。」とにやりと笑う男を前に女は小さく舌打ちした。
「まあいいわ。ありがとう。これは後金よ。」そういって女はバックの中から茶封筒を取り出すと目前の男に突きつけた。
男は静かに封筒の中身を確認すると、おちゃらけた笑い顔で「どうも」と言った。
女は組んでいた足を元に戻すと立ち上がり、颯爽とオフィスを出て行った。

＊＊＊

その日、遥は夕方近くまで校内で制作をしているとポケットに入れてあったシルバーの携帯が勢い良く鳴りだした。このメロディーは忍からのものだ。遥はあまり携帯をいじるのが好きではなく、携帯でやる事と言えば、通話と、メールのみだ。普通友人達からかかってくる携帯のトーンも皆同じなのだが、以前忍が遥の携帯に自分のアドレスと電話番号を入れた時御丁寧に自分の分の着メロまで変えておいてくれたらしい。その為、忍からの電話だけは着メロですぐに判るようになっていて、また自分だけが特別な着メロになっている事に忍が痛く満足している事を遥は知る由もない。

「はい、遥です。」

「あ、遥、今何処にいる？」

遥はさっと腕時計に目を走らせた。もう7時を過ぎている。

「あ、すみません。お夕飯の支度して来てなくて・・えっと」続けようとする遥の声を遮るように忍が言った。

「夕飯は心配しなくてもいい、それより、今日は済まないが秋本の家に1晩泊まってくれないか？」

「・・真樹ちゃんの家に？何かあったんですか？」

「いや、まあちょっと色々あって。」

「色々・・・ですか。いいですけど、いきなり真樹ちゃんのお宅にお邪魔したら迷惑じゃないかな・・。」

「問題ない、秋本にはこちらから既に連絡してある。着替えとか必要なものは後で俺が精算するから買っておいてくれ。秋本から電話連絡があると思うから。」

「わかりました。・・・本当に大丈夫なんですね、忍さん？」

受話器の向こう側ではっと息を飲む様な音が聞こえる、そして数秒後、優しげな声が耳を打つ。「大丈夫だ。ありがとう、遥。秋本にもよろしく伝えておいてくれ。」

電話が切れた後、暫く無言で考える。そう、彼が電話を切る前に微

かに聞こえた女性の声のことを・・・。小さく首を振るとまた手元の携帯が鳴りだした。
電話の主は真樹ちゃんで、待ち合わせ場所を簡単に決めた後、私はゆっくりと画材の片付けを始めたのだった。

＊＊＊

「今の電話の相手が新しい彼女なのかしら？」
「・・あなたには関係ないでしょう？それにしてもよくここが分かりましたね？調べたんですか？」
「あら・・コワイ。いつからそんな表情に出す様になったのかしら・・。」
「茶化さないで下さい。それよりも一体何の用ですか？俺とあなたは、もうとっくに関係ないはずですが？」

遡る事約３０分前、玄関のチャイムが鳴り響いた。一瞬遥が帰って来たのかと思ったが、遥はわざわざチャイムを鳴らす様な事はしない。遥にはいつも客が来た時には必ずカメラでチェックしろとうるさく言っている割に、その時の自分は何気なしに誰が来たのかも確認せずドアを不用意に開けてしまった事を後悔する事になる。

いかにも出来る秘書と言った様なファッションに身を包んだ女を一目見た時、俺は激しく後悔すると同時に大きくため息をつく事となる。
そう、其処に立っていたのはここ数日、いや数週間前に柾樹さんとの会話にでてきた本人、桐生真弓だった。
彼女の第一声は玄関から無遠慮に部屋を観察しながらの一言だった。
「なかなか良い所に住んでいるのね。」

いつかは向こうからコンタクトをとってくるだろうとは思っていた

がまさかこんなに早くにやってくるとは思わなかった。そして、今ここに遥がいない事を心の片隅で安堵する自分がいる事に気付いていた。

36話

駅の改札口を出ると、まきちゃんが大きく手を振って駆け寄って来た。
「迎えに来てくれてありがとう。急にごめんね？」
「いいよ、気にしないで。それよりも、お腹減ってない？買い物ついでに何か食べて行こうよ。」
「そうだね・・・。」言葉少なげに二人は駅の反対側にある商店街へと歩き始めた。
下着などの買い物を済ませると二人は最寄りのファミレスへ入って行った。注文を終えると少し気遣うように話しだした。
「ねえ、遥・・。今晩の事、忍さんに聞いているの？」
「ううん。多分・・立ち入らない方が良い内容だと思ったから。それにきっと忍さんも・・」
「え？」
「ううん、ごめん、何でも無い。でもね、きっと忍さんなら大丈夫。」そういって遥は微笑む。確かに胸の奥底に何か不安がある事は否めない。ゾフィーの言っていた事も気になる。だが、それと同時に何処かで自分でも不思議だが、彼は大丈夫だと言う安心感がある。このもやもやがいったい何処から来ているのか・・を知るのはもう少し後になるのだが・・。

「遥・・。そうだね、ごめん！なんか私に電話かけて来た時の忍さん、いつもと違ってなんだか余裕がなさそうな感じがしたからちょっと心配だったんだ。でも、遥が大丈夫って言うなら、きっと大丈夫だよ、忍さん。立ち入った事聞いちゃってごめんね。」
「そんな事無いよ！真樹ちゃんが忍さんの事心配してるのはわかってるし、、でも私も実際どういう状況なのかわからないし、友達として心配するのは当たり前の事だよ。」

「友達・・としてね。」
「うん？」真樹ちゃんからの含みのある視線を受けて戸惑うが、そうこうしている間に、料理が運ばれて来た。
その後、私たちは大学の課題の事やバイトの事など色々と話しながら、帰路についた。真樹ちゃんのお宅は閑静な一軒家で、突然お邪魔した私を家族は喜んで迎えてくれた。
真樹ちゃんの部屋にはすでに客用の布団がひかれてあり、また暫くの間、シングルベットの上の真樹ちゃんと会話を楽しんでいたがだんだんと眠くなり・・いつの間にか私はゆっくりと眠りに落ちて行った。

＊＊＊

少し時間を遡る頃、柾樹は会社で仕事をしていた。忍の元女が配属されてきてから、確かに仕事の上では順調に行っている。部長の言っていた通り、やり手である事はこの数週間で実感していたが、ある意味男よりも強引な手段と手口を使って仕事を取ってくる彼女に一種の嫌悪感を感じる事も少なくはない。社の大半の男は彼女の外面と美貌に惑わされ、狙っている男も少なくはないが、直接共に仕事をする身には、ふとしたときに漏れ出る内面にゾクリとさせられるのだ。

あいつ・・・なんて女に手を出してやがったんだ。ため息をつきながら、タバコに火をつけ煙を吐き出した。前回、忍とあった時、大体の詳しい話は聞かせてもらっていた。だが、全部ではない。あいつはまだ何か隠している・・。

そしてその内容から自分が考えていた通り、桐生真弓という女の性質、いやその執念深さを伺い知る事ができた。きっと近いうちにターゲットと定めた忍に逢いに行くであろう事も予想している。本当

に厄介な女に目をつけられたものだ。
あいつには、念を押しておいたが、もし遥になんらかの被害がでるようであればその時は・・・。

＊＊＊

リビングのソファーの上で、目前の女が見せつける様に足を組み替えた。
「関係ない・・ね。まだあの時の事を怒ってるの？それとも・・・さっきの電話の彼女が原因なのかしら？」

返事を返さない忍を無視したまま女は愉快そうに話し続ける。「可愛い子ね。今まであなたが付き合って来た女の子達とは随分違った毛色だけど・・・。でもそうねえ、どことなく似ているかもしれないわね、ユリアに・・・。」

忍は黙ったまま女を睨みつけた。「何が言いたい・・・？」
「・・・別に・・？あなたはその子に重ねているだけなんじゃないの？二人のユリアの面影を。」そしてくすっと笑うと小さく馬鹿みたいと呟いた。
その途端、忍が女に覆いかぶさるようにソファーに女を叩き付けた。その瞳には暗い憎悪が宿っていた。

「お前が！彼女を殺したんだろうが！！」
「自分が何を言ってるのか分かっているのかしら・・忍。私が彼女を殺した？私は何もしていないわ。彼女を殺したのはむしろ、あなたの方じゃないの？」
その言葉に彼女を拘束していた指の力が弱まる。それを尻目に彼女は尚獲物を追いつめるように言葉を重ねた。
「あなたが・・ユリアを殺したのよ。あなたの母と同じ名をもつ少

女を・・・・。」

３６話（後書き）

次回から忍の過去編に突入する予定です。

37話（前書き）

大分間隔が空いてしまいました。。もう前回までの話忘れられてるかも・・w）

37話

母が死んだ時、俺はまだ道理を知らない子供だった。普段から留守にしがちだった父親は母が死んだと同時にその寂しさを埋める故か、仕事に没頭し、今まで以上に逢う回数は極端に減っていった。
俺の始めての相手はその頃、おざなりに家を空けていた父親が寄越した家政婦だった。俺自身も性を知ってから、何か足りないものを埋めるかの様にそれに没頭していった。病気さえもらわなければ、相手は誰でも厭わなかった。
母の親友であった女は、ユリアが死んでから、俺を実の息子の様に、自分の子供と同じ様に扱って来た。たまに帰って来る父親と、俺の事で何度も喧嘩をしているのを耳に挟んでいる。「まだ子供なのよ？もっと自分の息子に気をかけたらどうなの？！ユリアが悲しむわ・・」
何回同じ言葉を聞いただろうか・・・。

その頃から俺は頻繁に家を空ける事が多くなった。大抵は女の家に入り浸り、飽きがくるとまた次の女へと蝶のように飛び回り、そんな中で親父が連れてきた桐生真弓という女と関係を結んだ後も、後腐れない相手を見繕ってはかりそめの快楽に浸っていた。

高校生になってからのある日の午後、学校帰りに女達とぶらぶらと繁華街を歩いていた時、何故かその日はいつも以上にイライラして無意識に振り上げた手が、対面から歩いてきた女の顔に当たり短い嗚咽と共にカチャンと音が響いた。
足下に色気も素っ気も無い黒斑の眼鏡が転がっていた。どうやら誰かの顔を意識しての事ではなかったとはいえ、殴ってしまったらしい。
さすがにまずいと思って足下にあった眼鏡を拾い上げた。

「すみません、ちょっとよそ見してしまって、あの、大丈夫ですか？」

そこに居たのは小柄な少女とも言える女だった。ぱっと見ただけで自分の周りには到底居ない地味な洋服をまとった小さな少女。が、痛むのか頬に手を当てたまま、俺を見上げたその瞳に一瞬心を奪われた。

かつて見た事のあるスミレ色の瞳・・。美しいと評判であった母とは似ても似つかぬ容貌だが、その瞳はまぎれも無く・・・・。

一瞬ぼーっとした俺の脳裏に小さな声が響いた。

「大丈夫・・です。あの、その眼鏡返してもらえますか？」

はっとして、手に持った眼鏡をわたそうとしたが、片方の眼鏡のレンズにひびが入っているのを見つけ戸惑う。

「やだ、忍、それ壊れちゃってるじゃない。」一緒に居た女達の一人がめざとく傷を見つけていい募る。

「え？」眼鏡なしではあまり良く見えないのか、女達の声を聞いた小柄な少女が一瞬固まる。

「あ、その、本当にすまない。この弁償はするから。」俺は先ほどまでいらだっていた事も忘れてあわてて言い繕う。遠慮する少女を説き伏せて、そこで、一緒に居た女達と別れると、俺は強引に彼女を引っ張って近くの眼鏡屋へと連れ込んだ。

そこは大通りにある店でなかなか品揃えもよさそうな店だ。今の時代、その場で視力検査を受け、数時間で新しい眼鏡を作る事は容易だ。萎縮する彼女だったが強引な俺の態度に諦めたのか、一番安い眼鏡のフレームの所へ行くとおずおずと一つのフレームを手に取った。それは直前まで彼女がつけていたものとさほど変わらない安っぽいフレームだった。

「別に金の心配することないんだから、もっと良いのを選べばいい

のに。」つい思っていた事が口をついて出てきた。
「いえ、そこまでは・・それにレンズもありますし、私半分出しますから。」と小さくつぶやく女に少しイラッとして俺は某メーカーのフレームを押し付けた。
「絶対こっちの方が似合うって。本当なら眼鏡じゃなくてコンタクトの方がいいんじゃねーの？せっかく綺麗な瞳してんだから・・。」
小動物のように萎縮する彼女を見ながら言い募る。
「いえ、コンタクトは・・。」とまた下を向いて小さくつぶやく。
確かに今日自分の周りにいた女達と比べると地味な顔だが別段不細工というほどでもない。
なんだかんだと拒否する彼女を無視して、俺は自分の持っていた方のフレームを店へ預けると、眼鏡が出来上がるまでの間、時間をつぶすために彼女の手を引っ張って近くのカフェに入った。注文を終え、少し赤くなった彼女の頬を冷やす為の氷とフキンをもらって改めて俺は彼女と向き合って話しだした。

「そういえば、まだ名前聞いてなかったよな。あんた名前なんて言うの？」
「ユリア、ユリア　ウィーディンバックです。」
一瞬聞き間違いかと思った。確かにユリアという名前は別段珍しい名前ではないが、まさか母と同じスミレ色の瞳をもつこの少女から同じ名前が出てくるとは思ってなかったのだ。
俺の動揺ぶりに気がついたのか、小さく首を傾げて俺を見つめる彼女に気づかれまいと俺は言葉を発する。
「そうなんだ。ユリアか、良い名前だな、この辺のミドルスクールに通ってるのか？」
少女は少し頬を染めると幼子がやるように少し口をつぼめて言った。
「違います。私、貴方と同じスクールに通っているんですよ、忍さん。」

彼女がハイスクールだという認識と共にこの小柄な少女が自分の名を知っていた事にも驚く。
「なんで俺の名前・・」
「・・・・学内の有名人を知らない方が珍しいです。でも、確かに同じクラスを取った事がないので、面識はありませんが、噂は色々と聞こえてきますから。」

その噂というのが良いものではないという事は重々に承知しているが、同じ学校に通っているという事実を聞き、何故かほっとする自分におかしく思いながらその後、眼鏡が出来るまでの間、たわいもない話をしていた。
眼鏡が出来た後、困ると言い募る彼女を押さえて全額を支払い薄い銀と青のフレームをした彼女は服装はださいものの、すっきりとした顔つきに見え、俺は自己満足に浸りつつユリアと別れた。

今まで学内で俺に近寄ってくるタイプの女とはまったく違うユリアに俺は男女のしがらみを超えた何か新しいものを見つけたような気がしていた。それから、学内で彼女を見つけて話しかけようとすると、あからさまに避けられるので、ある日今まで通った事もなかった図書室で彼女を見つけてからは、時々そこで話をするようになっていた。

今まで回りに居る女というと、幼なじみで妹のようなゾフィー以外、ほとんど体の関係を持っていたが、容姿がどうこうというよりも、ユリアに対して俺はそういった感情をいっさい抱く事がなく、何故か彼女とあって話をするだけで、イライラした気持ちが穏やかになるのが不思議だった。

ゾフィーは年の割に頭の回転が早く、また俺のそういった感情の揺れを機敏に察知していたのか、今までつきあってきた女達の事では

うるさく文句を言っていたが、ユリアに関しては、もちろん手を出していなかった事もあるのだろうが、沈黙を守っていた。

38話（前書き）

あと1回で回想部分は終わりになります。ちょっと暗い展開が続きますが、話の展開上必要部分なのでおつきあい下さい。

38話

ある週末の午後、俺は久しぶりに桐生真弓のコンパートメントを訪れていた。近頃、イライラが治まってきていた為か、あまり女を抱く欲求がなりを潜めていたが、真弓がしつこく電話をかけてくるので、出てきたのだ。

今まで色んな女を抱いてきたが、この女を抱くとまるで自分が捕食者ではなく獲物になった気分にさせられる。一番最初にメイドだった女に手ほどきを受けてから、女性経験は少ない方ではない。

だが、この女を抱く時は決まって最後には手綱を握られた気分に陥る。アジア系にしては目鼻立ちが整っているが冷たい眼差し、獲物をなぶるような愛撫の仕方、性の一滴でも逃さないと言った執拗で巧みなセックスに溺れながらもどこか薄ら寒いような感覚を覚えていた。

本能のどこかで、この女は危ないと警報をならしているにも関わらず、結局彼女との関係を切るまでには至らなかった。この事を後の俺がどれほど後悔したか筆舌に尽くしがたい。

「最近、あまり顔を見せないのね・・？何かあったの？」情事の後、Ｑｕｅｅｎ　ｓｉｚｅのベットに起き上がった彼女が俺の顔を覗き込むようにして妖艶な笑顔を見せる。

「別に・・・。何でもないよ。」

「ふうん、そういえばこの間街で貴方を見かけたけど、あまり見ない感じの子供と一緒だったわね。地味な感じの・・・。」

その言葉にぎょっとして俺は唾を飲み込んだ。

「・・・ただのクラスメートだよ。つーか俺が誰とつきあおうがあんたに関係ないだろ？」

「そう・・ね。」何やら考え込んだように俺を舐め回すように見つ

めながら彼女はつぶやいた。

それからしばらくは何事もなく、俺の人生にとって凪とも言える静かで穏やかな日が続いた。だが、今考えるとそれは本当に嵐の前の静けさだった。

今までつきあってきた女達とは今までのように頻繁にあってヤル事がなくなり、代わりにユリアと会う時間は比例して増えていった。今までとは違った俺の様子に女達がどういう反応を示していたかなどその時の俺は知る由もなかった。その頃からユリアの屈託のない笑顔が曇り、見えない所で傷が増えていたことなんて知らなかったんだ。

＊＊＊

家に帰ってくると、幼なじみのゾフィーが俺を出迎えた。”Ｇｉｆｔｅｄ”と呼ばれる天才的な彼女だが、俺に対する態度は年相応のそれに近い。ゾフィーの母親曰く、俺をしたって甘えているからだそうだが、小姑的な所だけは勘弁してほしい。

「またあの女の所に行ってたの？」開口一番ゾフィーは咎めるような口ぶりで俺に詰問してくる。もちろん何の事を言っているのかわかってはいたが、めんどくさいので適当にはぐらかそうと口を開く。

「何の事だよ？」

「わかってるんでしょう？あの桐生真弓っていう女の事よ。前にも言ったけど、あの女だけは止めといた方がいいよ？それに最近、忍ちょっと変わってきたし、、、何もあの女じゃなくても・・・」そういってゾフィーは少し何かを含んだように言いとどまった。

俺は深く考えずに切り返す。「まったく、お前は心配性だな。まあ、あれだ、別にお前が心配しなくても俺は俺でちゃんとやってるって。それよりも腹減ったな、なんか食いに行くか？」そういって俺はごまかすようにゾフィーの柔らかい頭をなぜた。

結局、その日は近くの店からピザを配達してもらい、食べていると、またゾフィーが口を開いた。
「ねえ、忍。この間、教授とのレッスンの帰りにユリアさんを見たんだけど・・・。」
「ん？何処で・・・。」
「セントトーマス病院の入り口からふらふら出てきたのを車内からちらっと見えたの。」
「病院？見間違えじゃないのか？」
ゾフィーはその言葉に小さく首を振る。そして何かもの言いたげに俺を見つめるが俺にはさっぱりだ。
「フウン・・先日あった時は別になんでもなさそうだったけどな。風邪でも引いたんじゃねーの？」そう返しつつ、ゾフィーが俺の女に珍しく興味を示しているのが驚きだった。俺は自分のポリシーとしてつきあっている女をいっさい家に入れないようにしているが、何処から聞きつけているのか、（まあ別に隠している訳ではないから知ろうと思えば簡単だが）ゾフィーはその時々俺がつきあっている女達の事を大抵把握しているようだった。
つきあっているといってもユリアとは性的な関係はまだ持っていない。一度からかい半分にキスをしたらリンゴみたいに真っ赤になって、そういう反応を示す彼女がなんともおかしくて、いや、それよりも彼女と居ると何とはなしにほっとする自分が居る事を最近は認めつつ、俺なりに接してきたつもりだった。
結局ゾフィーが何を言いたかったのかわからなかったが、執拗に、ユリアの事を気にするので、俺は明日学校に行った時にでもそれとはなしに聞いてみようと思ったのだが、それから1週間、俺は彼女の姿を見る事が無かった。さすがに気になって何度か電話をかけてみたりもしたのだが、全然繋がらない。

学内でユリアの事を知っていそうなやつはいないかと考えたが、その時俺は初めて、自分が彼女の交友関係や学内でどういった生活を送っていたかなど、いっさい知らなかった自分に気がついた。

次の週に入ってからもいっさい彼女と連絡が取れずにいらついていた俺の耳にある同級生の会話が飛び込んできた。大抵ランチタイムは女達と一緒に食べている事が多いのだが、俺のいらつきを感じ取ったのか、今日に限っては俺は遅めの昼食を一人で取っていた。

「おい、聞いたか？あの噂。」

「あん？」

「ほら、あれだよ、うちの学校の女がレイプされたってやつ。」

「ああ、あれってマジな話だったんだ？何？お前詳細知ってんの？」

「俺の親父が警察に居るからさー、ちょろっとおふくろと話てんの小耳に挟んだんだよ。結構ひどかったみたいたぜ？何人ものやつに廻されたらしいし・・・。」

「うっわ最悪だな。犯人捕まった訳？」

「さあ、そこまでは知らない。でもやられた女は知ってるぜ。」

「マジで？誰だよ。」

「えーっと、なんてったかな・・1学年下の地味な女、ユリア・・ウィーデンバック？」

その言葉に俺は固まりついた。

「ちょ、おい、今の話本当か？！」俺は話していた二人の間に割り込み肩を揺さぶる。

「うわっ、な、何だよ、吃驚するじゃねーか！」

「今の話は本当かと聞いてるんだ！」

「は？つーか、何知らなかったの？まあ表沙汰にはなってねーけど、結構裏では噂になってるぜ。」

「そうそう、何？忍その女の事知ってんの？」

「いや・・・」俺は一気に脱力してふらふらと校門へ向かって歩き出した。悠長に授業を受けている場合ではない。そんな俺を不思議

そうに二人の学友が眺めていたが、また自分たちの会話へと戻っていった。
学内ではユリアが極力俺と会っている事を知られるのを嫌がっていたので知られないようにはしていたが、それでも気づく奴は気づく・・。誰かユリアの家を知っているやつは居ないのかと考え込んでいた俺の耳に甲高い声が響いた。

３９話（前書き）

思ったより長くなりそうだったので、２部に分けたので、結局後１話追加することになりました。なので、今日の部分はちょっと短めです。いやああ、自分で書いてて暗い展開ですが・・汗）

39話

「しのぶ！」振り返るとそこにはいつもの取り巻きの中の比較的大人しい一人が青ざめた顔で佇んでいた。
「アマーリア・・」
俺の表情を見て彼女はぐっと何か言いたげに眉を寄せると張りつめた糸を切るように早口で喋りだした。
「ユリアの事で話があるの、時間を取れない？」彼女の口からユリアの名前がでてきたのは驚きだったが、真剣な彼女の眼差しに俺はうなずいた。
「ここでは人目があるから出ましょう、どうせその様子じゃさぼるつもりだったんでしょう？」
俺は彼女の後についてそのまま学校を抜け出した。女にしては大柄な彼女は歩くスピードも早い。ぐんぐんと遠ざかる学校を尻目に俺は聞いた。
「いったい何処に行くんだ？」
「・・セントトーマス病院よ。」
その答えに俺ははっとゾフィーの言葉を思い出した。恐る恐る彼女に問いかける。「そこに・・・ユリアがいるのか？」
「ええ・・。」アマーリアは短く答えた。それから病院に着くまでの間、アマーリアがユリアと小学生の頃からの友人で親同士も交流がある事、スクールの俺の知らない所でユリアが一部の女子から陰湿ないじめを受けていた事などを聞いた。気がついた時にはアマーリアがうまく逃がしてくれていたらしいが、まさかそんな事になっていたなんて・・。俺は自分の馬鹿さ加減に嫌気を覚えつつ、一番気になっていた事を口に出す。
「その・・・、ユリアは大丈夫なのか？体とか・・」頭の中で複数にレイプされたというクラスメートの言葉を思い出しながら慎重に

言葉を選ぶ。
「忍も噂の事を聞いたのね・・・。容態は比較的安定してるみたいだけど・・・・。」悔しげにつぶやく彼女を俺は無言で見つめ、その続きを促す。
「・・あんな事があったんだもの、どんな女性だって普通の神経で居られるはずはないわ。最初に気がついたのは彼女の弟だった。いつもなら帰ってすぐ居間で弟妹達と遊んであげているのに、部屋に閉じこもって出て来ない彼女の部屋に強引に忍び込んで体につけられた傷を見たみたい。顔も殴られて少し張れてたみたいだし。それから両親が帰ってきて事情を聞き出そうとしたけど、いっさい話さなくて、様子がおかしい彼女を連れて病院に行き、陵辱が発覚したみたい。
もちろんすぐに警察に連絡が行って事情聴取がされたんだけど、精神的にそれが耐えられるほどじゃなくて、何度も精神不安に陥ってしまって犯人の捜査は難航しているみたい。貴方は知らないだろうけど、彼女のいじめに加わっていたうちの学校の子達も幾人か事情聴取を受けているのよ。でもこの件に関しては白だったみたいだけど・・。少し精神が安定したかと思ったら、ふらふらと病院から抜け出たり、ずっと不安定なままで、今は精神安定剤をずっと投与されているわ。」
病院に着くと、彼女は釘を刺すように俺に言った。「今の彼女を見ても驚かないであげて、・・本当は忍をここに連れてくるかどうか迷ったの。ユリアだって今の状態を好きな人に見られたくないだろうし、でも、彼女が比較的安定している時にお見舞いに行った時、忍の名前をつぶやいていたから・・。」
病室の前まで来たとき、中から悲壮な悲鳴が響いた。「嫌！止めて、離して！」

俺とアマーリアはとっさに顔を見合わせる。急ぎ病室の中に入った俺が見たものは想像を絶するものだった。
手足を拘束され、点滴などのチューブを差し込まれた小さなユリア、ほんの数週前に会った時とはまったく違ったその姿に俺は唖然と固まった。

アマーリアが、ベット脇に行くと看護婦を呼ぶ為のボタンを押すと同時に驚愕にスミレ色の目を押し開く彼女を揺さぶる。「大丈夫、大丈夫よ、ユリア！ここには貴方を傷つける人なんて居ないわ、大丈夫、そう、ゆっくり深呼吸して、そう、大丈夫だから・・・。」それからすぐに看護婦が来て、錯乱状態の彼女をテイケアするため、俺たちは病室を後にした。

病院の待合室で今見た光景が頭から離れずぐったりとうずくまる俺にアマーリアがホットコーヒーを差し出した。無言でそれを受け取りつつも手がカタカタと震えていた。
「・・・今日はあの様子じゃ面会は無理ね・・・。」痛ましいものを見るように彼女が口を開いた。
「なんで・・なんであんな拘束具まで身につけてっ？！」
「ああしとかないと、寝ている間でも無意識に自分を傷つけてしまうみたいなの。何度も自分が犯された時の夢を見るみたいで、最初は睡眠自体もなかなか取ろうとしなかったから・・。」
無意識のうちに強く唇を噛み締めていたのだろう、口の中に鉄の錆びた味が広がった。
「ちくしょうっ！許せない・・・ユリアをあんな目に遭わせた奴を絶対に突き止めてやる！」憤る俺を横目にアマーリアが小さくつぶやく。
「それは、言うまでもなくユリアの家族や私たちが願う事よ。絶対に許せない・・・でもユリアもああいった状態だし、本当に捜査は難航しているみたい。・・・本当に悔しいわ。」

それからしばらくしてから俺は病院を後にして家へ帰った。しばらく何も手に着かず、考える事もできない有様でどのくらいベットの上に居ただろうか、そのまま朝になっても、学校へなど行く気がせず、灰皿の上に溜まって行く煙草の吸い殻を見つめながら俺は立ち上がった。

＊＊＊

それから、幾度か病院にいるユリアを訪ねたが、大抵は面会謝絶か薬で眠っているやせ細った彼女に会う事しかできなかった。アマーリアからユリアをいじめていたという女達の名前を無理矢理聞き出したが、彼女の報復をしてもユリアは喜ばないという説得と、主犯の幾人かはすでに事情を把握した学校側から処分を受けていた事もあり、いままでつきあってきた彼女らと一線を引く事で落ち着いた。

幾日か後、俺の耳にユリアを襲った犯人の一人が捕まったとの報告が入ってきた。なんでもバーで自慢げに自分の犯した女の話を吹聴していたそうで、それを聞いた客の一人が警察へ連絡をし、逮捕へと繋がったそうだ。

これで、ユリアを犯した他の男達の事も含めて一挙に事件が解決するかと思われたのだが、そうは簡単にいかない事情があるらしかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0658i/

ルームメイト

2011年4月24日15時00分発行